山形県埋蔵文化財調査報告書第141集

月光川左岸地区県営ほ場整備事業

浮橋遺跡
下長橋遺跡
発掘調査報告書

1989

山形県

山形県教育委員会

月光川左岸地区県営ほ場整備事業

浮橋遺跡
下長橋遺跡

発掘調査報告書

平成元年３月

山　　形　　県
山形県教育委員会

遺跡全景（写真提供　伊藤和三郎氏）

ＥＢ214（ＳＢ１）

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和63年度に実施した、遊佐町「浮橋遺跡」及び「下長橋遺跡」の緊急発掘調査報告書であります。調査の結果、浮橋遺跡では地震の影響を受けたと考えられる掘立柱建物跡や土壙等、下長橋遺跡では溝跡等、古代の集落跡に関係する資料が得られました。

近年の開発事業の進展に伴い、地下に埋もれた埋蔵文化財とのかかわりも増加する傾向にあります。県経済と県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と、県民ひいては国民の文化遺産である埋蔵文化財とについては、状況に応じた適切な対処が望まれているところです。

山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」と地域文化の環境づくりという立場から、これらの間の調整を図り今後も埋蔵文化財の保護と活用のため努力を続けていく所存です。

終わりに、本調査に御協力を賜りました関係各位、並びに地元の方々に感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財及びその保護に対するおおかたの理解の一助となれば幸いです。

平成元年３月

山形県教育委員会

教育長　木場　清耕

例　　言

1　本報告書は、山形県教育委員会が山形県農林水産部の委託を受け、昭和63年度に実施した「昭和63年度県営ほ場整備事業・月光川左岸地区」にかかる「浮橋遺跡・下長橋遺跡」の緊急発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地

浮 橋 遺 跡　山形県飽海郡遊佐町大字小原田字浮橋

下長橋遺跡　山形県飽海郡遊佐町大字小原田字村西　他

3　調査期間

浮 橋 遺 跡　自　昭和63年５月23日　～　至　昭和63年８月５日（延53日間）

下長橋遺跡　自　昭和63年７月18日　～　至　昭和63年７月29日（延９日間）

4　調査体制

調 査 主 体　山形県教育委員会

調 査 担 当　山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者	主任調査員	佐々木洋治	（山形県教育庁文化課	埋蔵文化財主査）
	同	佐藤庄一	（同	係長）
	同	野尻　侃	（同	主任技師）
	現場主任	名和達朗	（同	技師）
		月山隆弘		
事務局	事務局長	後藤茂彌	（山形県教育庁文化課	課長）
	事務局長補佐	土門紹穂	（同	課長補佐）
	事務局員	佐藤大治	（同	文化財主査）
		長谷部恵子	（同	主事）
		長谷川　浩	（同	主事）
		高橋春雄		

5　調査については、遊佐町教育委員会・遊佐町中央公民館・月光川土地改良事務所・月光川土地改良区の関係機関、並びに地元遊佐町民の方々の御協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。

6　挿図縮尺は、遺構については、１／30、１／40、１／60、１／250、１／300、遺物については１／３、１／６、を基本としそれぞれにスケールを示した。図版の遺物に１／３、１／６、１／10で表した。

文中、表中及び挿図中の記号は、Ｇ―グリッド、ＳＤ―溝跡、ＳＥ―井戸跡、ＳＫ―土壙、ＳＸ―性格不明遺構、ＥＢ・ＥＰ―柱穴・ピット、ＲＰ―土器、ＲＷ―木製品・木片、Ｆ―遺構覆土、Ｓ―石を示す。

挿図中の方位は、磁北に合わせた。また、挿図断面図のレベルは、図中に明示する以外は標高13.20mを示す。

7　本報告書の作成については、名和達朗・月山隆弘が担当し、挿図・表・図版の作成については、遠藤京子・高崎くに子・西村純子・三沢友子・山内知恵子・吉田直子がこれを補助した。

8　本書の編集は、阿部明彦・名和達朗・月山隆弘が担当し、全体は、佐々木洋治が総括した。

9　本書の作成については、火山灰及び地震について阿子島　功　氏（山形大学教育学部　助教授）、墨書土器について平川　南　氏（国立歴史民俗博物館助教授）、陶器について矢部良明　氏（東京国立博物館陶磁室長）並びに、斎藤孝正　氏（名古屋大学文学部助手）の御教授を得た。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯
1　調査に至るまでの経過 …… 1
2　調査の方法と経過 …… 1
Ⅱ　浮橋遺跡
1　遺跡の概観
（1）遺跡の立地と環境 …… 2
（2）遺跡の層序 …… 2
（3）遺構と遺物の分布 …… 2
2　検出遺構
（1）建物跡 …… 4・9
（2）井戸跡 …… 10・12
（3）土　壙 …… 16
（4）溝　跡 …… 20・21
3　出土遺物
（1）土　器 …… 24
（2）墨書土器 …… 25
（3）陶　器 …… 25
（4）土製品・石製品 …… 25
（5）木製品 …… 25
Ⅲ　下長橋遺跡
1　遺跡の概観 …… 40
2　遺構と遺物 …… 42
Ⅳ　まとめ …… 45

挿図目次

第１図　浮橋・下長橋遺跡位置図

浮橋遺跡

第２図　遺跡全体図 …… 3
第３図　遺構配置図 …… 5・6
第４図　ＳＢ１建物跡 …… 7
第５図　ＳＢ１柱跡断面・ＳＢ２建物跡　8
第６図　ＳＢ３・４建物跡 …… 9
第７図　ＳＥ11井戸跡 …… 11
第８図　ＳＥ12・13井戸跡 …… 13
第９図　ＳＥ14井戸跡 …… 14
第10図　ＳＥ15井戸跡 …… 15
第11図　ＳＫ16土壙 …… 16
第12図　ＳＫ17・18・19・151土壙 …… 17
第13図　ＳＫ152・153土壙 …… 18
第14図　ＳＫ158・159・181土壙 …… 19
第15図　ＳＤ100溝跡 …… 20
第16図　ＳＤ22・43・92溝跡 …… 21
第17図　土製品・陶器 …… 25
第18図　出土土器（１） …… 26
第19図　出土土器（２） …… 27
第20図　出土土器（３） …… 28
第21図　出土土器（４） …… 29
第22図　出土土器（５） …… 30
第23図　出土土器（６） …… 31
第24図　出土土器（７） …… 32
第25図　出土土器（８） …… 33
第26図　出土土器（９） …… 34
第27図　木製品 …… 35

下長橋遺跡

第28図　遺跡配置図 …… 40
第29図　遺跡全体図・土層断面図 …… 41
第30図　遺構実測図（１） …… 42
第31図　遺構実測図（２） …… 43
第32図　出土土器実測図 …… 44

表目次

浮橋遺跡

表－１　遺構観察表 …… 22・23
表－２　出土土器・土製品・陶器・木製品観察表 …… 36～39

下長橋遺跡

表－３　遺構観察表 …… 44
表－４　出土土器観察表 …… 44

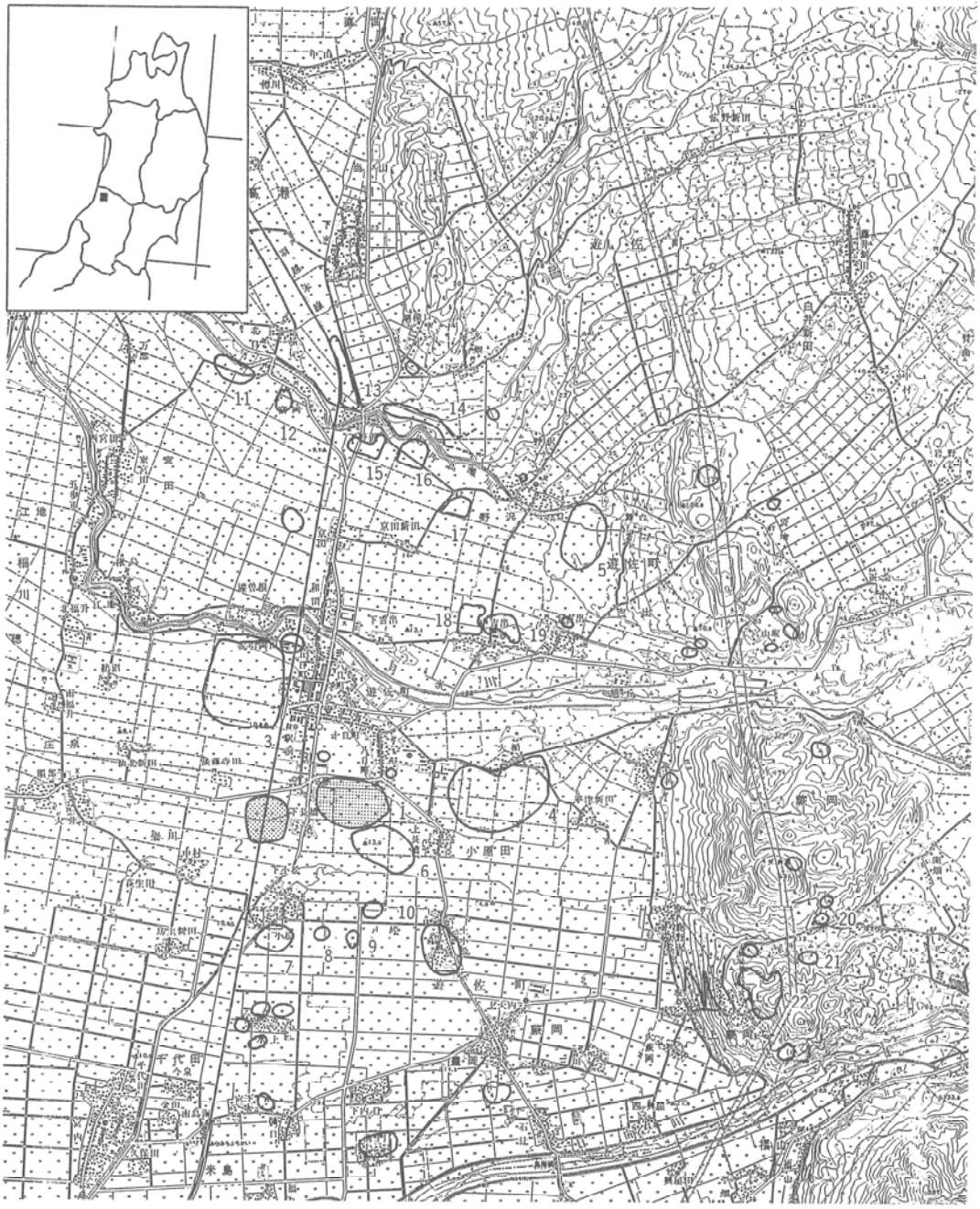
図版目次

浮橋遺跡

図版１　遺跡遠景・作業風景
図版２　遺跡近景・調査風景
図版３　ＳＢ１・２
図版４　ＳＢ３・４
図版５　ＥＢ203・204・205・206・208・210・466・212
図版６　ＥＢ213・215・340・504・611・450・499・583
図版７　ＳＥ11
図版８　ＳＥ14
図版９　ＳＥ15
図版10　ＳＥ12・ＳＫ16
図版11　ＳＫ17・19・152・153・155・158・159・170・173
図版12　ＳＫ172・174・175・176・ＳＤ100
図版13　ＳＤ20・101・102・100・43・ＳＥ11・ＲＰ52他・ＲＰ53
図版14　ＲＰ76・ＲＰ86・ＲＰ40・ＲＰ41・ＲＰ42・ＲＰ43・ＲＰ45・ＲＰ47・ＲＰ50
図版15　出土土器
図版16　出土土器・陶器
図版17　出土土器
図版18　出土土器
図版19　ＳＫ16出土土器
図版20　土錘・木製品
図版21　ＳＥ11・14井戸枠

下長橋遺跡

図版22　Ａトレンチ調査前状況
Ａトレンチ調査状況
Ａトレンチ全景・ＥＢ５・16・17
Ａトレンチ土層断面
図版23　ＥＢ10・11・12・21・16・17
ＳＤ６・７
図版24　ＳＤ６・７
図版25　ＳＤ13・Ｃトレンチ調査前状況
Ｃトレンチ調査状況
Ｃトレンチ全景
図版26　Ｃトレンチ土層断面・ＳＫ１出土土器



浮橋・下長橋遺跡と周辺の遺跡　　第１図　浮橋・下長橋遺跡位置図（Ｓ＝１：50,000）

	遺跡名	種別	時代		遺跡名	種別	時代
1	浮橋遺跡	集落跡	平安末～鎌倉	12	上高田遺跡	集落跡	平安末～鎌倉
2	下長橋遺跡	集落跡	平安	13	宮の下遺跡	集落跡	縄文・平安
3	小深田遺跡	集落跡	平安	14	道中A・B遺跡	集落跡	縄文・平安
4	大楯遺跡	城館跡	鎌倉	15	石田遺跡	集落跡	平安
5	仁田田遺跡	集落跡	縄文・平安末～鎌倉	16	宅田遺跡	集落跡	縄文・平安・鎌倉
6	水尻遺跡	集落跡	平安末～鎌倉	17	大坪遺跡	集落跡	平安
7	前田遺跡	集落跡	平安	18	三田遺跡	集落跡	平安～鎌倉
8	地正面遺跡	集落跡	平安	19	袋冷遺跡	集落跡	平安～鎌倉
9	楯畑遺跡	集落跡	平安末～鎌倉	20	大狗森B遺跡	窯跡	平安
10	村前遺跡	集落跡	平安～鎌倉	21	堂林A遺跡	集落跡・窯跡	縄文
11	木戸下遺跡	集落跡	平安～鎌倉	22	厩岡館跡	城館跡	平安以降

第１図　浮橋・下長橋遺跡位置図

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至るまでの経過

山形県の日本海側、庄内平野北部に位置する遊佐町には、県指定史跡「吹浦石器時代遺跡」をはじめ数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が確認され、これまで調査が進められてきたところである。

ここに昭和62年度から県営ほ場整備事業・月光川左岸地区が計画され、山形県教育委員会では、遺跡と開発事業との調整を行うため、昭和62年９月11日、山形県農林水産部農地建設課と上記計画についてヒアリングを行った。次に、浮橋遺跡について同年10月14・15日、及び下長橋遺跡について同28・29日に現地の分布調査（試掘調査）に入り、事業計画区域と遺跡とのかかわりについて確認を行った。その結果、計画区域が遺跡範囲内にかかることが明らかになった。

この調査内容を基に、月光川土地改良事務所・月光川土地改良区・遊佐町教育委員会の関係機関と協議を行った結果、県教育委員会が主体となり、昭和63年度２遺跡についての緊急発掘調査を実施することにより、遺跡の記録保存を図ることとなった。

調査対象区域は、浮橋遺跡が面工事区域（60×60m、3,600m²）、下長橋遺跡がほ場整備事業排水路工事区域（幅３m×長さ70m×２本、420m²）である。

2　調査の方法と経過

浮橋遺跡の調査区は、昭和62年度の分布調査結果に基づき遺構・遺物の集中区域を選定した。初めに調査区全体を包み込むように現況水田畦畔から任意に、５m×５mを一単位とするグリッドの設定を行った。X軸は西から東へ（10～21G）、Y軸は北から南へ（10～21G）と座標番号で表わした（第２図）。Y軸と磁北の方向は、N－90°30′－Eを測る。次に遺構検出面までの深さを確認するために、５m×２mを基本として手掘りによるトレンチ14箇所を設けた。これを基に重機械で調査区全体の表土を除去した。調査区はX・Y軸の16Gを延長した線で４区画し、北西側A区・北東側B区・南西側C区・南東側D区と呼称した。

下長橋遺跡の調査区は、かんがい排水路工事区域と限られた範囲である。事業区内に南北３m・東西70mのトレンチを２箇所設け、重機械で表土を除去した。トレンチの中軸線は、かんがい排水路線のセンター杭に合わせた。両遺跡ともに重機械で表土の除去後、手掘りによる掘り下げを繰り返しながら面精査を行った。検出された遺構は平面プラン確認後、覆土を半截して掘り下げ、土層断面図・写真等の記録作業を随時実施した。

浮橋遺跡の現地説明会は８月２日に、関係各位機関及び一般町民を対象として実施した。

II　浮橋遺跡

1　遺跡の概観

（1）遺跡の立地と環境

浮橋遺跡は、ＪＲ東日本羽越本線遊佐駅の南東約800mに位置し、遊佐町大字小原田字浮橋に所在する。月光川は、鳥海山より当町中心街北側を蛇行し、東より西へ流れ日本海へと注ぎ、遺跡範囲は月光川左岸に広がる河間底地を形成する。調査区は北東側から南西側にかけて45～52m幅で斜めに微高地が立地し、標高約11mを測る。遺跡の範囲は東西約450m・南北約200mに及ぶ。

遊佐町には浮橋遺跡を含め現在までに168箇所（山形県遺跡地図）の遺跡が確認されている。旧石器時代から中世・江戸時代に及び長い時間にわたる。特に県内最北端の吹浦遺跡（縄文・平安時代）は、縄文時代の住居跡や数多くのフラスコ状土壙・遺物等が検出しており、昭和28年には県指定史跡になっている。

周辺の遺跡では、下長橋地区に前田・地正面・佐渡・塚田・下長橋、他に水尻・大楯・小深田等平安時代（集落跡）～鎌倉時代（城館跡）の遺跡が密集して存在している。

（2）遺跡の層序

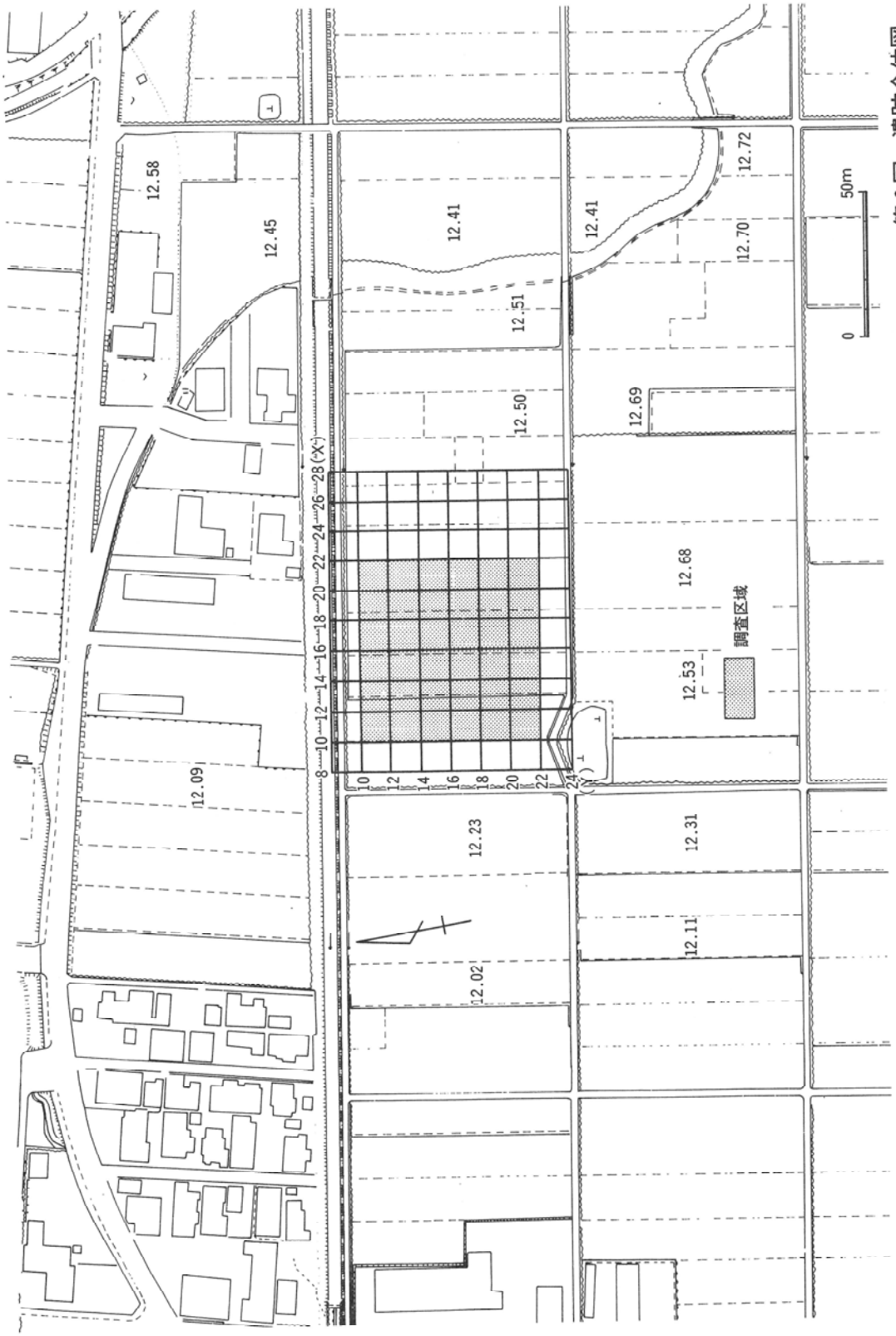
調査区は概ね、北東側から南西側の方向が微高地となっており、南東・北西側は低地になっている。遺構等の分布から微高地に生活の跡が認められる。遺跡範囲は現在のように平坦な地ではなく、起伏があったものと推定される。

層序は基本的にⅠ～Ⅲ層に分けられる。Ⅰ層：耕作土(10～15cm)、Ⅱ層：黒褐色シルト(10～15cm)、Ⅲ層：にぶい黄褐色細砂質土・褐灰色砂質土（地山）である。遺物の包含層はⅡ層・Ⅲ層上面、遺構の確認はⅢ層上面である。井戸枠・柱痕等の遺存状況が良好なことから、遺跡範囲一帯は地下水が高いことが伺える。

（3）遺構と遺物の分布

検出した遺構は、調査区の南東と北西側隅を除く全域に分布している。建物跡は西側中央（ＳＢ１・３)、北東側（ＳＢ２)、東側中央（ＳＢ４）に４棟、井戸跡は南西側に５基、土壙・溝跡・建物として構成できなかったピット等は調査区全体に検出している。隅丸方形の環状溝跡（ＳＤ100）は北東側に確認している。

遺物の出土は遺構の検出状況とほぼ同様であり、南東側を除く全域に認められる。井戸跡（ＳＥ11・14・15)、土壙（ＳＫ16・18・153・170)、溝跡（ＳＤ43・101・102)、ピット（ＥＰ660）から土器・木製品等が多く出土している。


12.58
12.45
12.41
12.41
12.72
12.70
12.51
12.50
12.69
12.68
12.53
調査区域
12.09
12.23
12.31
12.11
12.02
8
10
12
14
16
18
20
22
24
26
28
(X)
10
12
14
16
18
20
22
24
(Y)
0
50m

第2図　遺跡全体図

2　検出遺構

本遺跡で検出された遺構は、建物跡４棟、井戸跡５基・土壙49基・溝跡121条・性格不明ピット多数である。建物跡として構成できたもの、井戸跡については遺構番号を付した順に記述する。土壙・溝跡については表―１にまとめ、ここでは遺構の概要と特徴のあるものについて概述する。

（１）建物跡

ＳＢ１建物跡（第４・５図　図版３）

Ａ区南側Ｃ区北側（12～14―14～16Ｇ）に位置し、Ⅲ層上面で確認された。梁行２間、桁行５間を呈す。ただし、東側に２間分延びる可能性があり、桁行７間とも推定される。柱間距離、北面桁行2.4～3.5m・南面桁行2.5～3.4m・西面梁行2.5・3.4m・東面梁行2.4・3.4mを測る。桁行・梁行の間尺は若干異なるが各面の柱間はほぼ一定である。南北の主軸方向約Ｎ―７°―Ｅを測る。掘り方の平面形30～70cmの円形・隅丸方形、深さ15～65cmを呈す。覆土はＦ１～３層に分けられる。柱根はＥＢ203・204・214に残存しており、ＥＢ205～208・213にアタリが確認された。掘り方の土層断面によれば、地震等地下の変動により東西または西北西の方向に傾き（ＥＢ201～204・206・208・211～215西側・西北西側）・（ＥＢ205東側）が認められ横スベリの状況を呈する。遺物はＥＢ201・202・204～210・212～214から土師器・須恵器・赤焼土器・磨石・石英が出土している。

以上の出土遺物から、平安時代（10Ｃ前半）を推定される。

ＳＢ２建物跡（第５図　図版３）

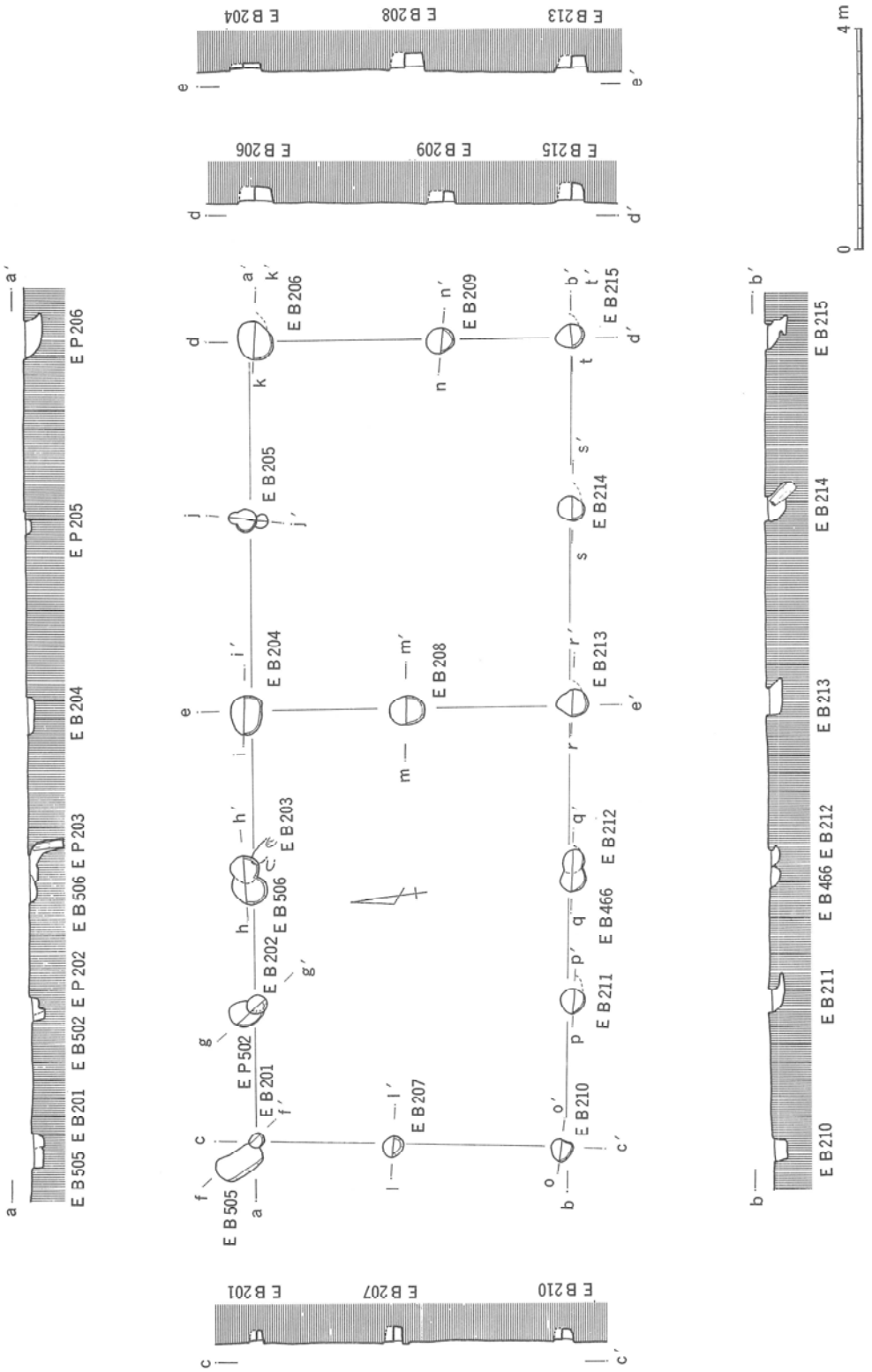
Ｂ区北側（17・18―10・11Ｇ）に位置し、Ⅲ層上面で確認された。梁行２間・桁行３間を呈し南北の建物跡である。柱間距離、梁行1.8～2.0m・桁行1.4～1.6mを測り、桁行より梁行柱間が若干長い。南北の主軸方向Ｎ―10°―Ｗを測る。掘り方の平面形は円形を呈し、径15～20cm、深さ約20cmを測り、柱根・アタリ・遺物の出土は認められない。覆土は黒褐色シルトの一層である。時期はＳＢ１以降のもので平安時代（10Ｃ後半）と推定される。

ＳＢ３建物跡（第６図　図版４）

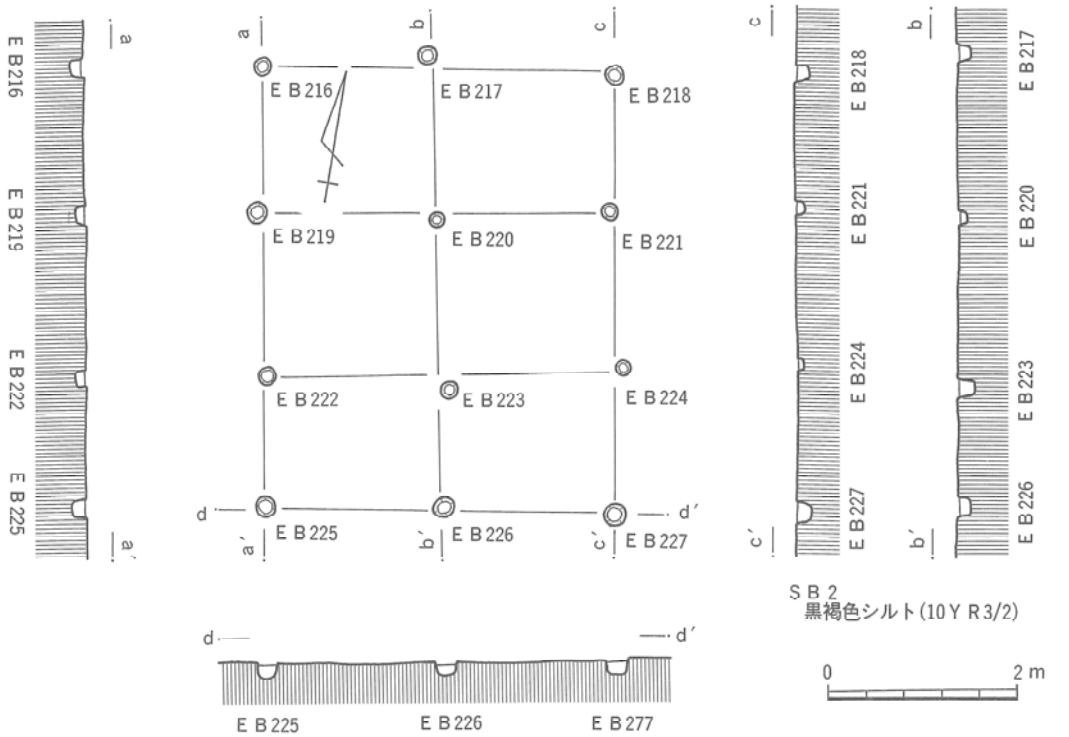
Ｃ区北側（12・13―16・17Ｇ）に位置し、Ⅲ層上面で確認された。梁行２間・桁行２間を呈す。柱間距離、梁行2.3～2.9m・桁行2.7・2.8mを測り、桁行より梁行柱間が約30cm短い。南北の主軸方向Ｎ―15°―Ｗを測る。掘り方の平面形は円形を呈し、径15～20cm、深さ約20cmを測り、柱根・アタリは認められない。覆土は黒褐色シルトの１層である。遺物はＥＢ228・230～233・236に赤焼土器が出土している。掘り方の規模・建物跡の方向等が類似するＳＢ２と同時期の平安時代（10Ｃ後半）と推定される。

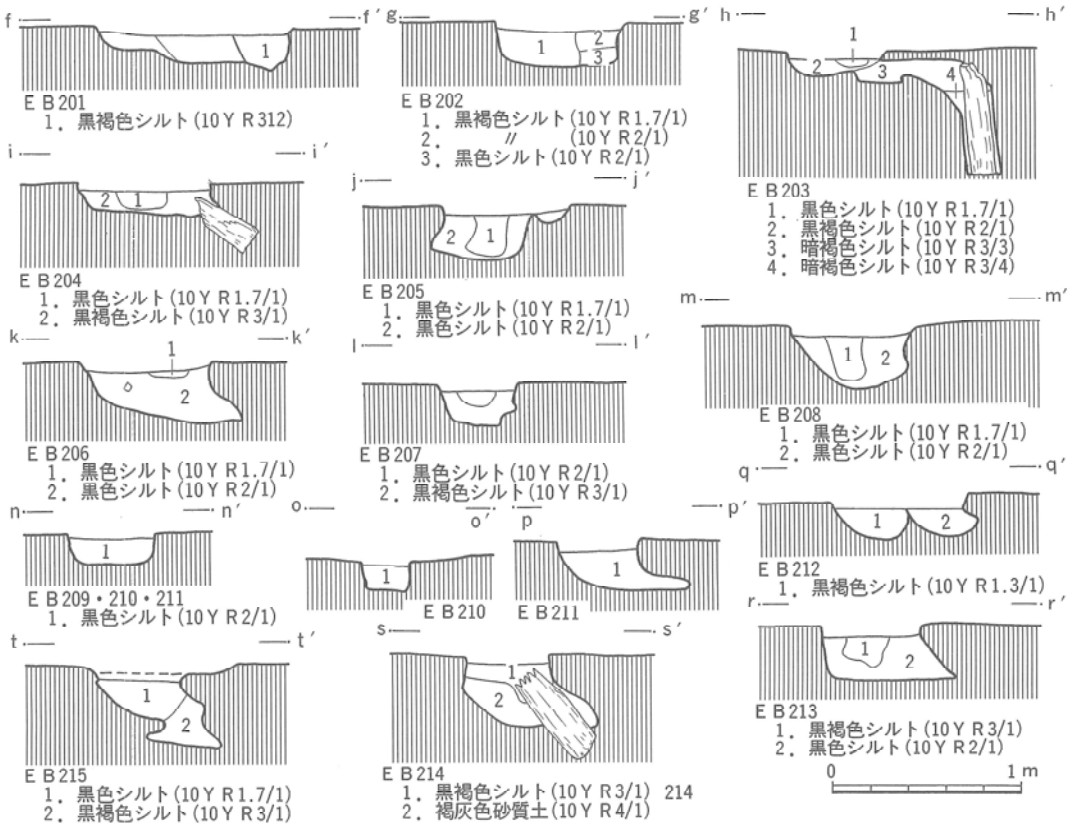
SD111
SB 2
SD106
SD104
SD103
SD105
SD107
SD101
SD92
SD110
SK19
SD98
SD97
SD99
SD95
SD102
SD108
SK151
EB262
SK533
SK175
SD91
EB570
EB611
EB610
SK170
SK173
SK172
SD86
SD58
EB578
EB456
SK171
SK182
SK166
SK177
SK167
SD100
SK174
SE 14
SK181
SD55
SK16
SK155
SD88
SK153
SD65
SK178
SD127
SB 1
SD62
SD64
SE15
SK180
SD74
SD47
SD49
SD61
SD93
SD72
SD76
SD73
SD45
SD48
SB 4
SK152
SB 3
SD38
SD84
SD113
SD46
SE 13
SD40
SD35
SD34
SD27
SD39
SD23
SD26
SK18
SE 11・12
暗渠
SD67
SD30
SK17
暗渠
SD68
SD21
SD25
SD33
SD22
SD32
SD122
SD31
0
10m

第３図　遺構配置図


E B 505
E B 201
E B 502
E P 202
E B 506
E P 203
E B 204
E P 205
E P 206
E B 201
E B 207
E B 210
E B 204
E B 208
E B 213
E B 206
E B 209
E B 215
E B 505
E P 502
E B 202
E B 506
E B 203
E B 204
E B 207
E B 208
E B 211
E B 466
E B 212
E B 213
E B 214
E B 205
E B 209
E B 206
E B 210
E B 211
E B 466
E B 212
E B 213
E B 214
E B 215
0
4 m

第４図　ＳＢ１建物跡

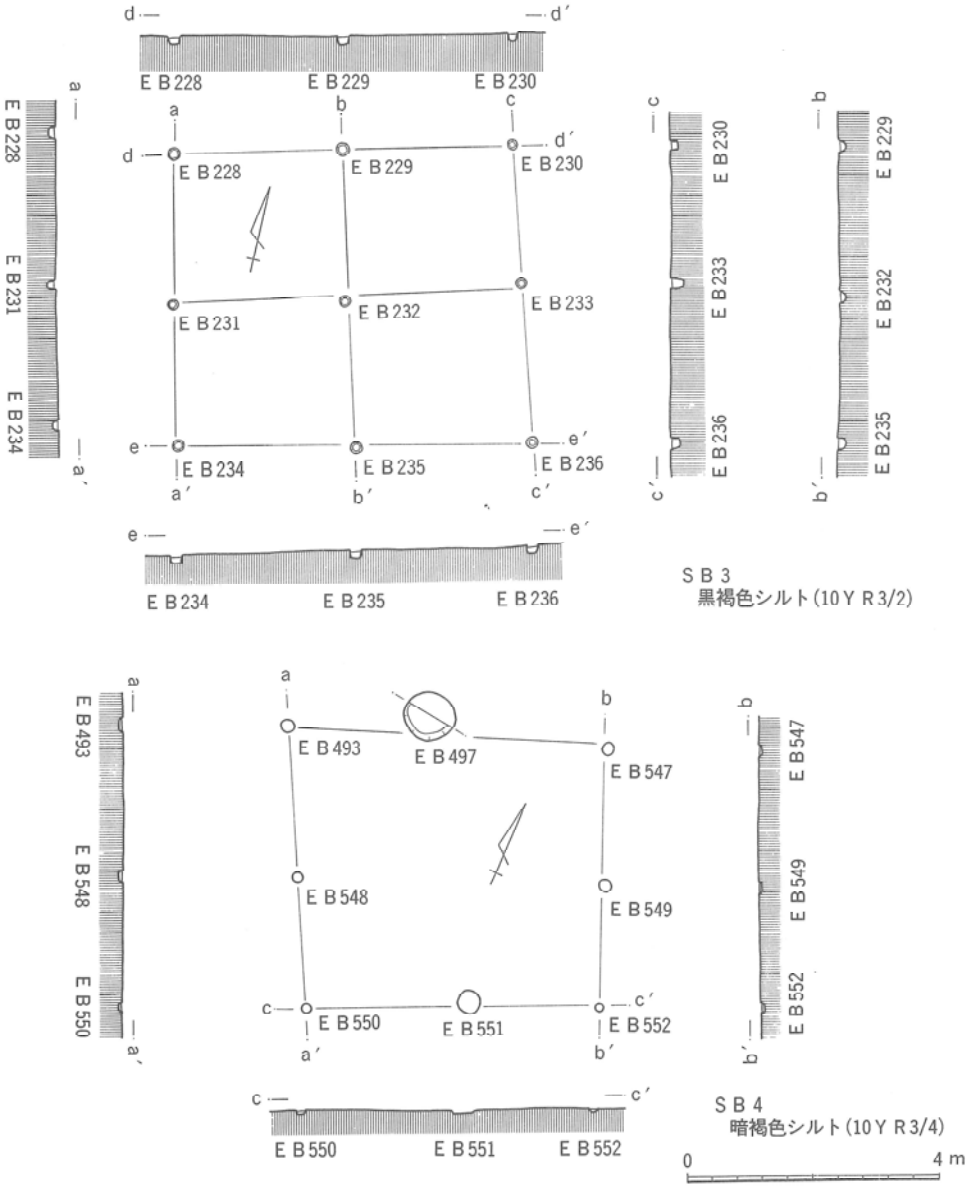




第5図　ＳＢ１柱跡断面・ＳＢ２建物跡

ＳＢ4建物跡（第６図　図版４）

Ｄ区北側（19・20―16～18Ｇ）に位置し、Ⅲ層上面で確認された。梁行２間、桁行２間を呈す。柱間距離、北側桁行ＥＢ493・497・547は西から2.3m・2.8m、南面桁行ＥＢ550～552は西から2.6m・2.1m、西側梁行ＥＢ493・548・550は北から2.4m・2.1m、南面梁行ＥＢ547・549・552は北から2.0m・2.1mを測る。掘り方は径14～24cm・深さ６～８cmの円形を呈す。柱根・アタリは認められない。遺物は須恵器・赤焼土器が出土している。時期は平安時代（10Ｃ後半）と推定される。



第６図　ＳＢ３・４建物跡

（2）井戸跡

検出された井戸跡は5基を数える。A・C・D区と調査区の南西側で検出している。平面形は検出面で円形・楕円形を呈し、掘り込みはほぼ垂直である。井戸跡は井桁に組み込んだものと、横桟の外側に縦板を付設しているもの、丸木舟の舟首と舟尾とを切り落とし転用したものを合わせたものや、井戸枠は確認していないもの等がある。

以下、各井戸跡毎に記述する。

ＳＥ11井戸跡（第7図　図版7）

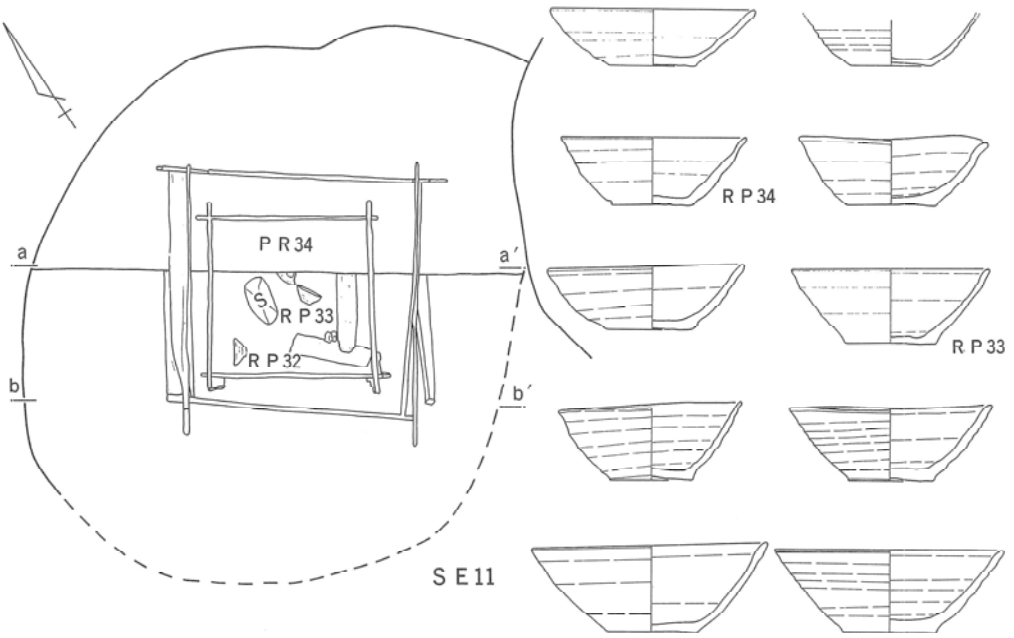
D区西側中央（16―18・19G）に位置し、Ⅲ層上面で確認された。平面形は南・南東側は不明であるが、楕円形を呈するものと考えられる。南東側は重複が認められ、ＳＥ12で切られている。掘り方の中心には大小2段の井桁に組み込んでいる。上部の規模、幅12～24cm、長さ78～132cm、厚さ0.5～3cmを測り、各面2段の構造からなる。内法約180cmを測る。下部の規模、幅28～32cm、長さ74～75cm、厚さ2～4cmを測る。内法約120cmを測る。板材は柾目を使用し、材質は未詳ながら針葉樹と推定される。最上部の板材は風化が進み極めて薄く、下部の板材ほど遺存状況が良好である。掘り方は基底部より垂直に近い立ち上がりをもち、掘り方中央部から外側に弯曲し、上面で若干開く。掘り方内の覆土は11層に分けられ、井桁内の覆土は4層からなる。Ｆ6層は火山灰と推定されるオリーブ灰色粘質土がレンズ状に入る。井桁内最下部と下部井桁の外側に径2cm前後の礫を詰め込んでいる。遺物の出土はＦ6・7層であり、ほとんどがＦ7層である。赤焼土器十数点（墨書土器6点を含む）・木製品（鍬・浮子・板状木製品・不明木製品）数点、自然礫（10×20cm）・摩石・石英が各々1点づつ出土している。出土遺物により、平安時代（10Ｃ前半）と推定される。

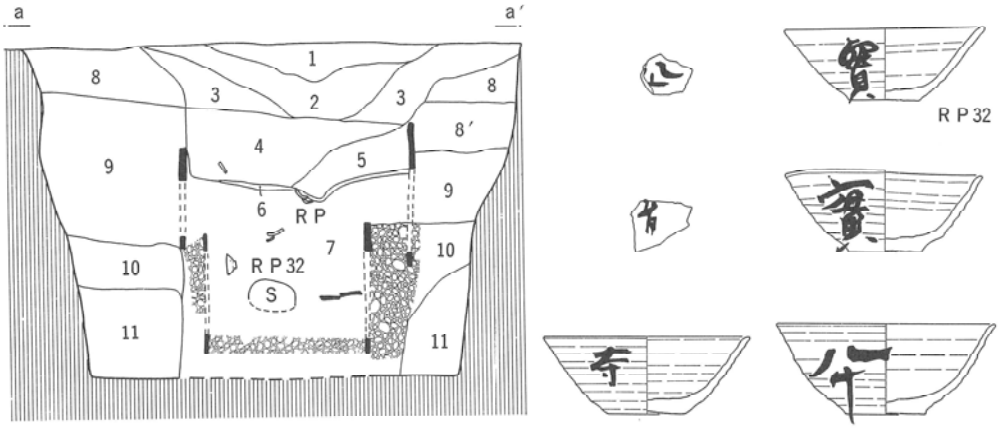
ＳＥ12井戸跡（第8図　図版10）

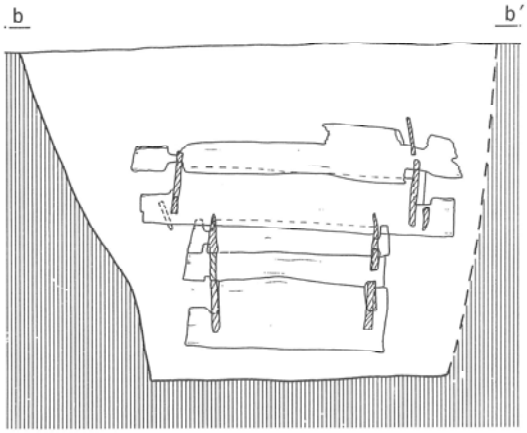
D区西側中央（16―18・19G）に位置し、Ⅲ層上面で確認された。平面形は略円形を呈し、平面径1.4～1.6m、深さ約70cmを測る。掘り方は基底部が平坦で、東側が急傾斜で外反し、西側は底部より緩やかに立ち上がり掘り方中央部より急傾斜で開口部へ開く。北西側は重複が認められ、ＳＥ11を切っている。覆土は6層に分けられる。最下層（Ｆ6）黒褐色粘質土に灰色砂質土が混入しており火山灰と推定される。井桁・遺物等の検出は認められない。井戸廃棄の際、取り除いたものと考えられる。遺物の出土は認められず未詳であるが重複関係により、平安時代（10Ｃ前半以降）と推定される。

ＳＥ13井戸跡（第8図）

D区南西側（16―18G）に位置し、Ⅲ層上面で確認された。平面形は略円形を呈し、平面径2.2～2.56m、深さ約80cmを測る。掘り方は基底部が平坦で、南側が急傾斜、北側は掘







S E 11
1　黒色シルト層(10Y R 2/1)炭化物多量混入
2　黒色シルト層(10Y R 2/2)炭化物若干混入
3　灰黄褐色微砂質土(10Y R 4/2)炭化物若干混入
4　黒褐色微砂質土(10Y R 3/1)炭化物若干混入
5　褐灰色細砂粘質土(10Y R 4/1)炭化物若干混入
6　オリーブ灰色粘質土(10Y 5/2)火山灰
7　灰色粘質土泥炭層(5 Y 4/1)赤焼土器小礫多量混入
8　小礫(2～5 cm)
8′　黄褐色砂質土(2.5Y 5/3)炭化物若干混入
8′　黄灰色細砂粘質土(2.5Y 4/1)暗灰黄色(2.5Y 4/2)ブロック状に混入
9　黄灰色砂質土(2.5Y 4/1)炭化物若干混入
10　黒褐色砂質土(2.5Y 3/1)
11　オリーブ黒色粘質土(5 Y 3/1)

0　1 m

第７図　ＳＥ11井戸跡

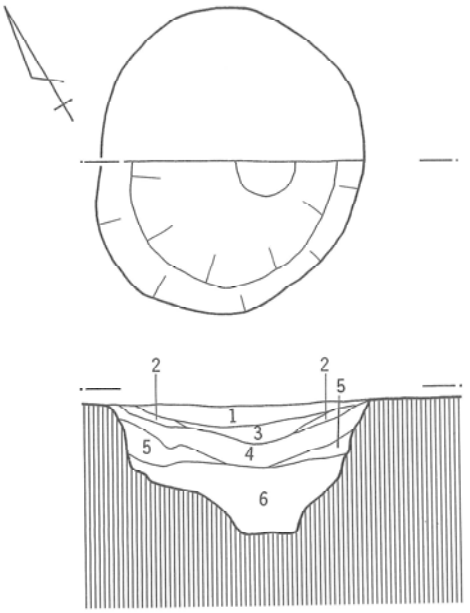
り方中央部まで急傾斜で立ち上がり開口部へと開く。覆土は８層に分けられる。Ｆ６層は黒褐色微砂質土にオリーブ灰色粘質が混入しており、ＳＥ11・12と同様に火山灰と推定される。井桁等の板材は認められないが、三枚の板材を用い板材角辺を三角形に組み突き刺した状態の枠組材が検出している。板状の枠組材は井戸廃棄する際に祭司的な役割を果たしたものと考えられる。土器はＦ１・８層から、赤焼土器数点（墨書土器１点を含む）出土している。出土遺物により、平安時代（10Ｃ前半）と推定される。

ＳＥ14井戸跡（第９図　図版８）

Ａ区南東側（15―14・15Ｇ）に位置し、Ⅲ層上面で確認された。平面形は略円形を呈し、掘り方南東側に遺存状況の良好な井戸枠を検出している。井戸枠は径70cm以上の大木を半截し、刳り貫いた状態である。南東側で検出した井戸枠には一辺3.5cmの水板穴が確認された。舟の転用材を使用したものと考えられる。丸木舟の舟首と舟尾を切り落とし、半分にしたものを合わせている。切り落としの径が短方を北西側に、それを包み込むように約10cm重ね合わせている。切り落としの径が短方を北西側に、それを包み込むように約10cm重ね合わせた状態で、若干ではあるが東側に傾いて検出している。遺物は掘り方Ｆ２層上・井戸枠内Ｆ３・６層より赤焼土器・斎串・棒状木製品・板状木製品が各々数点出土している。掘り方は西側が基底部より中央部まで急な立ち上がりをもち、緩やかに開口部へと開く。東側は基底部より中央部まで西側と同じであるが、中程上部で外湾し再び西側に内湾する。建物跡柱穴と同様、地下の変動により、掘り方と井戸枠の横スベリが推定される。出土遺物により平安時代（10Ｃ頃）と推定される。

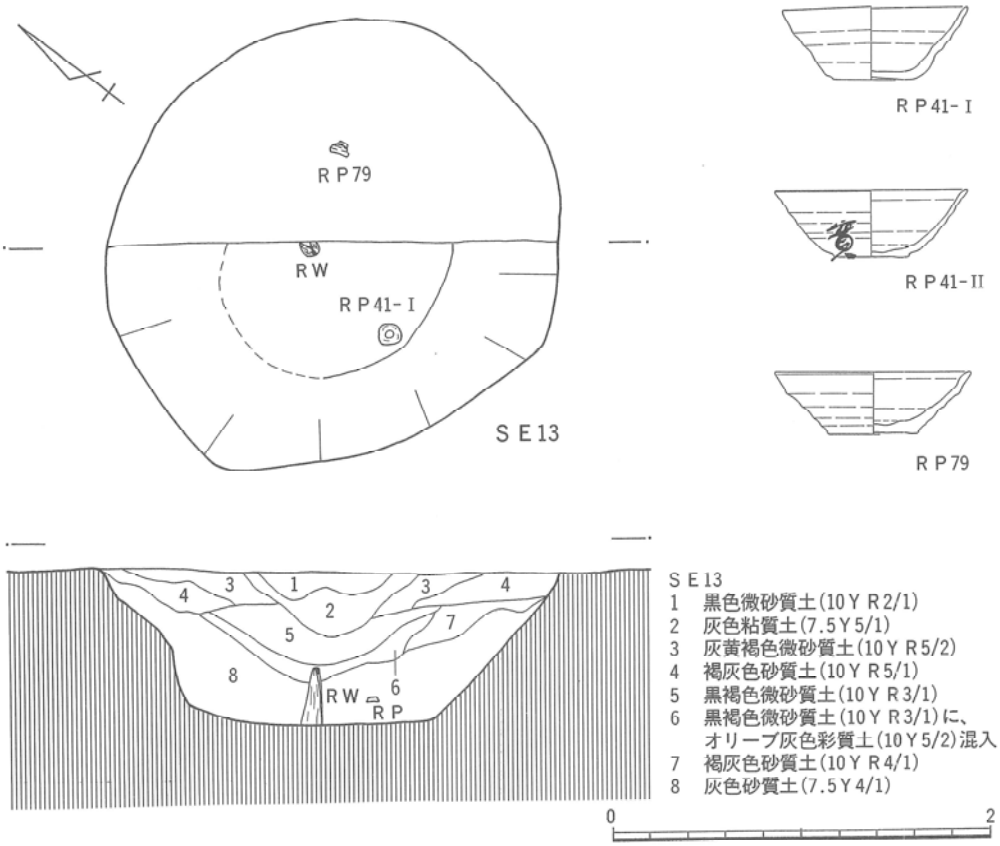
ＳＥ15井戸跡（第10図　図版９）

Ｃ区南側（10―16Ｇ）に位置し、Ⅲ層上面で確認された。平面形は不整形を呈す。掘り方東側に井桁に縦板を構造している井戸枠が検出している。井桁規模、幅18～24cm・長さ90～130cm・厚さ0.5～２cmを測り、２・３段の構造からなる。井桁の平面形は、ＳＥ11・14同様地下の変動あるいは、土圧によるものか捻じれて菱形を呈する。井桁外側四方角に細木を打ち込んでいる。縦板は２・３板重ねて構造しており、下部は全て平坦で打ち込まれたものではない。上部は風化が著しい。縦板上部東・西側に桟（細木）を用いている内法120cmを測る。横板・縦板ともに柾目を使用し、材質は未詳ながら針葉樹と推定される。掘り方の覆土は８層に分けられ、井桁内の覆土は２層からなる。遺物の出土はＦ６であり、赤焼土器数点・自然礫（16×30cm）１点出土している。自然礫はＳＥ11でも１点出土しており井戸廃棄後に祭司的な意味を持つものとも推定される。掘り方は基底部は平坦、東側はほぼ垂直な立ち上がり、西側は急傾斜である。出土遺物により平安時代（10Ｃ頃）と推定される。



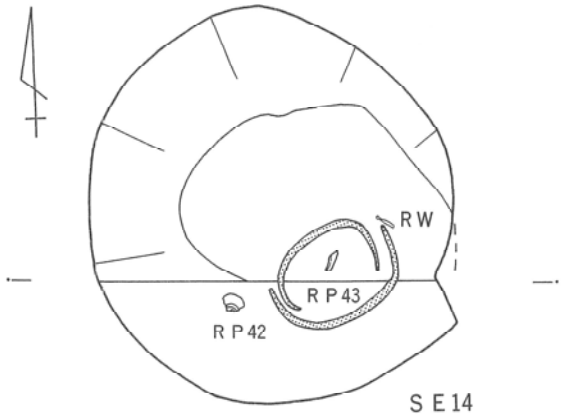
SE12

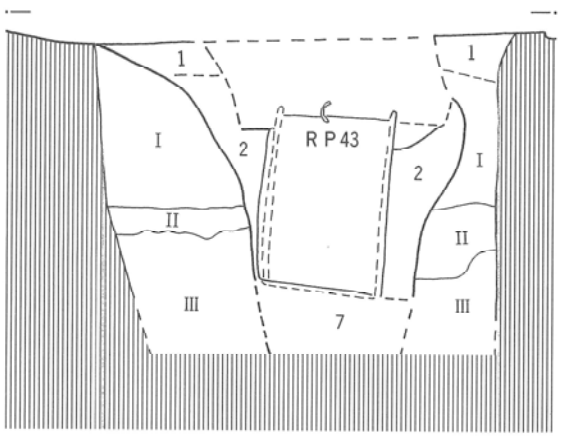
SE12
1　黒褐色シルト(10YR1.7/1)
2　黒褐色粘質土(5YR1.7/1)
3　黒褐色粘質土(5YR1.7/1)
4　黒褐色粘質土(5YR2/1)炭化物若干混入
5　褐灰色粘質土(5YR4/1)
6　黒褐色粘質土(10YR2/1)灰色砂質土まばらに混入
　(火山灰)

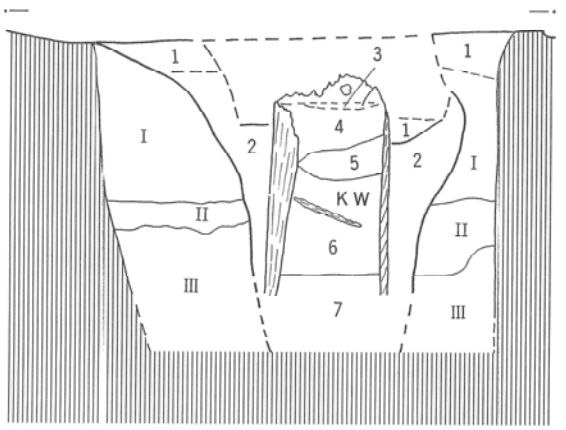


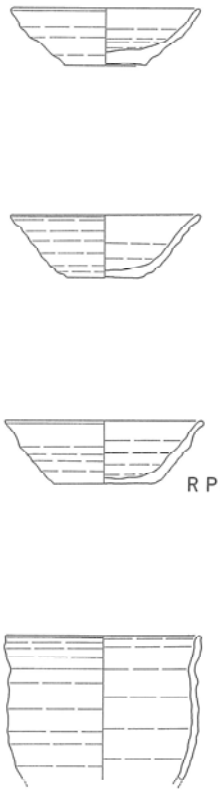
SE13
1　黒色微砂質土(10YR2/1)
2　灰色粘質土(7.5Y5/1)
3　灰黄褐色微砂質土(10YR5/2)
4　褐灰色砂質土(10YR5/1)
5　黒褐色微砂質土(10YR3/1)
6　黒褐色微砂質土(10YR3/1)に、
　オリーブ灰色彩質土(10Y5/2)混入
7　褐灰色砂質土(10YR4/1)
8　灰色砂質土(7.5Y4/1)

第8図　SE12・13井戸跡





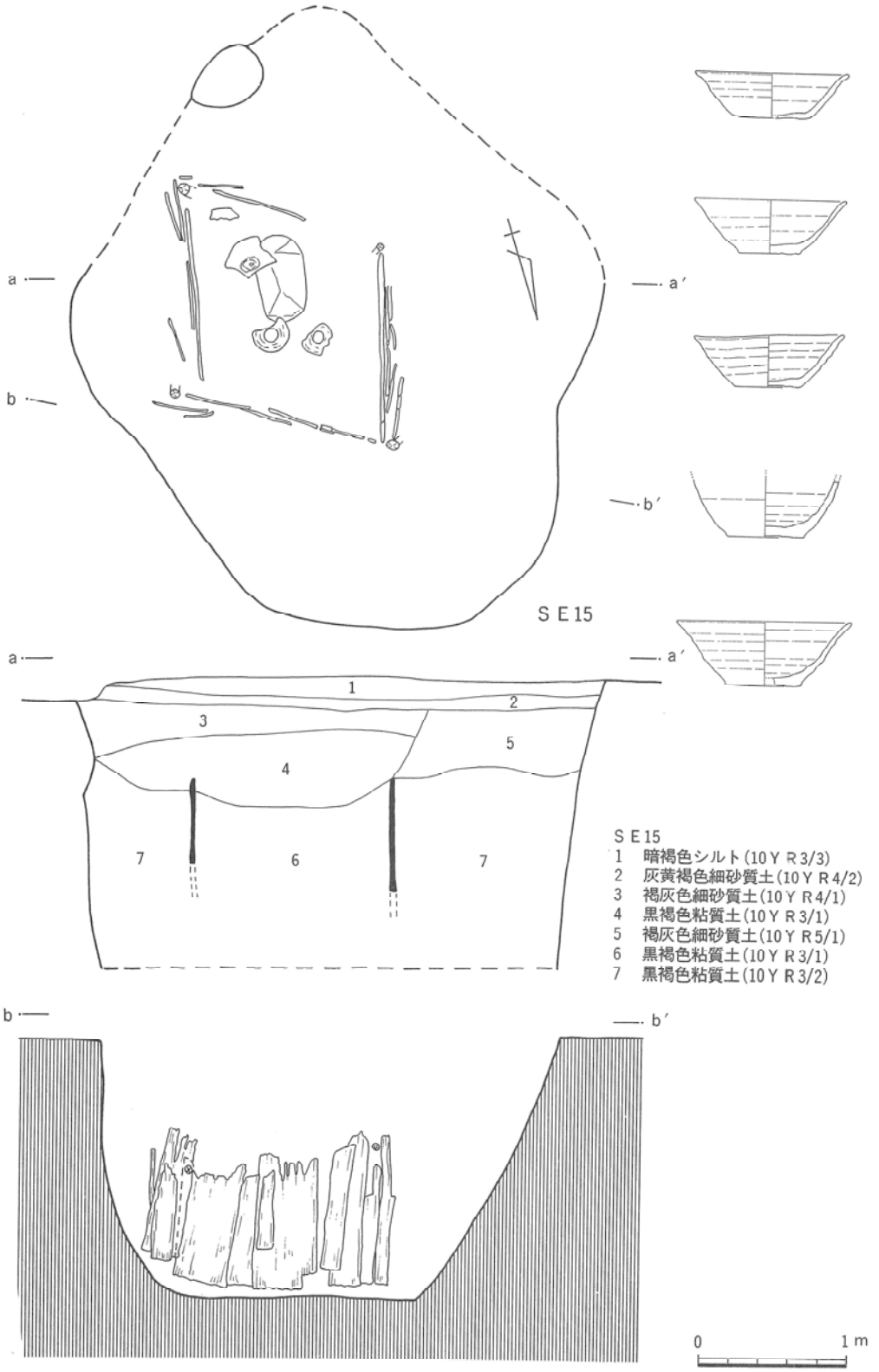




SE14
I　褐灰色砂質土(10YR5/1)
II　黒褐色粘質土(10YR2/1)泥灰層。
III　黄灰色粘砂質土(2.5Y4/1)
1　褐灰色砂質土(10YR4/1)酸化している。
2　黒褐色細砂質土(10YR3/1)炭化物多量混入。
3　黒色シルト(10YR2/1)炭化物混入。遺物出土。
4　黒褐色細砂質土(10YR3/2)
5　黒色粘質土(10YR1.7/1)
6　黒色粘質土(10YR1.7/1)木質遺物出土。
7　褐灰色粘質(10YR4/1)

0　1m

第9図　SE14井戸跡

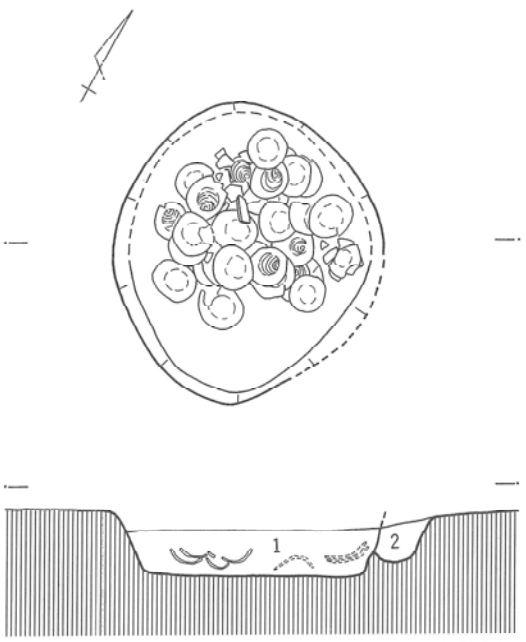


第10図　SE15井戸跡

（3）土　壙

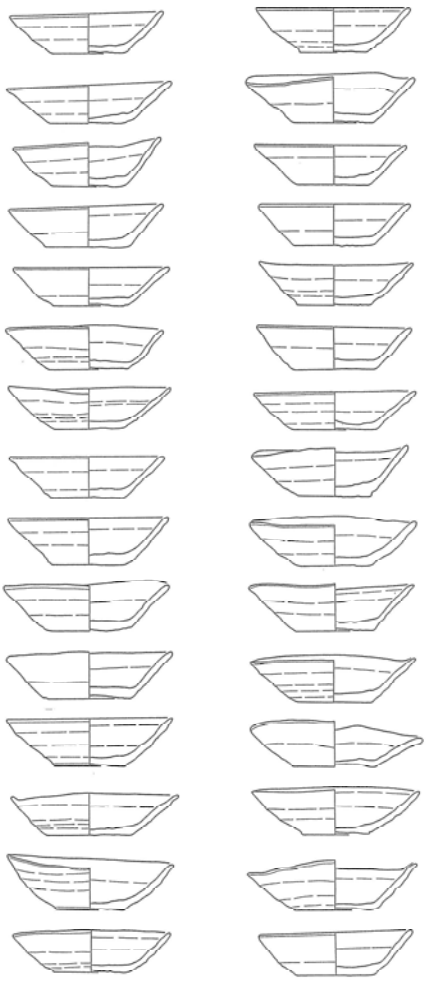
土壙と柱穴の区分は、検出面で平面形１ｍ以上を測る遺構を土壙と限定した（ＳＫ16を除く。）遺構として登録されたものは49基を数える。調査区全体に検出しているが、平面形・深さ等比較的大きなものは、調査区南側Ｃ・Ｄ区に多く分布している。平面形は円形・略円形・楕円形・不整形があり、円形・楕円形のものが多い。全体的な規模は平面形1.01～4.70ｍ・深さ12～90cmを測り、径約120cmの土壙が多く検出している。

土壙の全てに認められたものでないが、土層断面によれば比較的深い土壙には井戸跡・柱穴と同様、地下の変動により東西の方向へ掘り方の傾き、あるいは土層が入り組んでいるのが認められた（ＳＫ155・159・180）。ＳＫ16（第11図）からほぼ完形の赤焼土器皿30点・甕片１点が出土している。坏は口径・器高ともに小ぶりであり、祭司用に使用した後、一括廃棄したものと推定される。ＳＫ19（17・18—12Ｇ）の底部から棒状木製品が数点出土している。



ＳＫ16

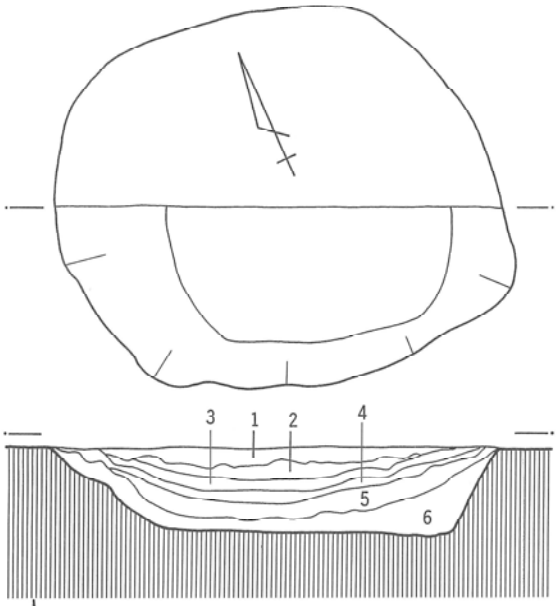
ＳＫ16
1　黒色粘土(10ＹＲ1.7/1)灰色粘土粒混入
2　灰色粘土(５ＹＲ3/1)明灰色粒・炭化物混入



ＳＫ16出土土器群

0　1ｍ

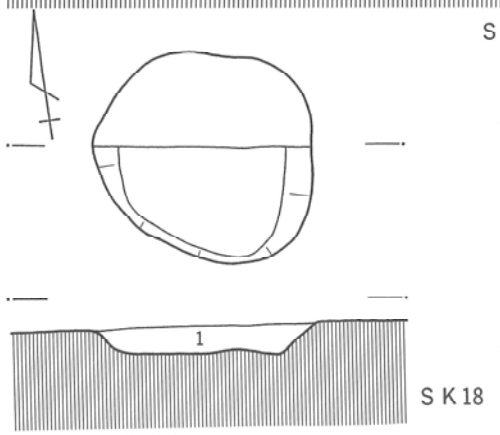
第11図　ＳＫ16土壙



ＳＫ17
1　黒褐色シルト（10ＹＲ3/1）
2　黒褐色粘質土（10ＹＲ2/1）
3　黒褐色粘質土（10ＹＲ2/1）に、
　　にぶい黄橙色粘質土（10ＹＲ6/4）混入
　　（横に３～４本ライン状に入る。）
4　黒褐色粘質土（10ＹＲ2/2）
5　褐灰色細砂質土（10ＹＲ4/1）
6　褐灰色細砂粘質土（10ＹＲ5/1）

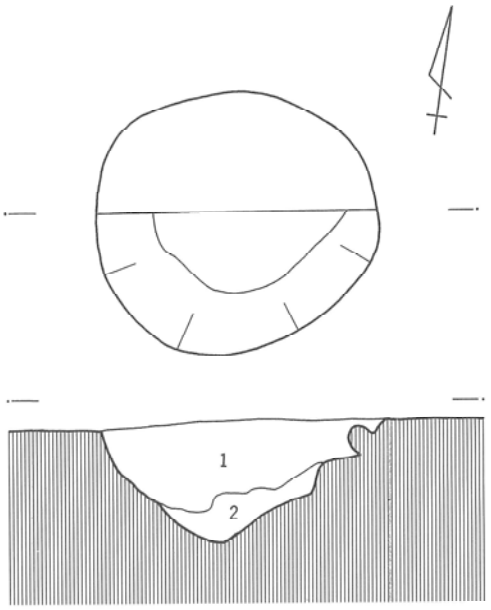
0　2 m

ＳＫ17



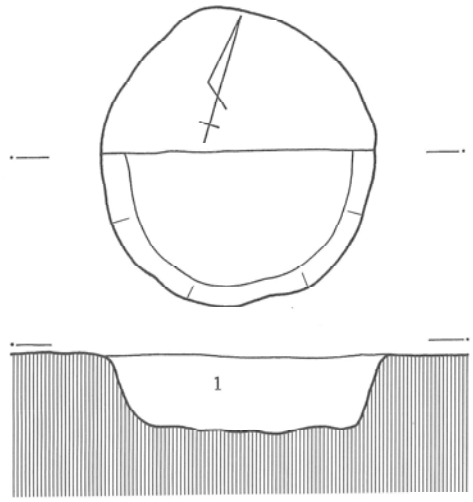
ＳＫ18

ＳＫ18
1　暗褐色シルト（10ＹＲ3/3）
　　炭化物混入



ＳＫ151

ＳＫ151
1　黒褐色粘質土（10ＹＲ3/1）に、
　　にぶい黄褐色砂質土（10ＹＲ5/4）
　　がまばらに混入。
2　にぶい黄褐色砂質土（10ＹＲ5/4）

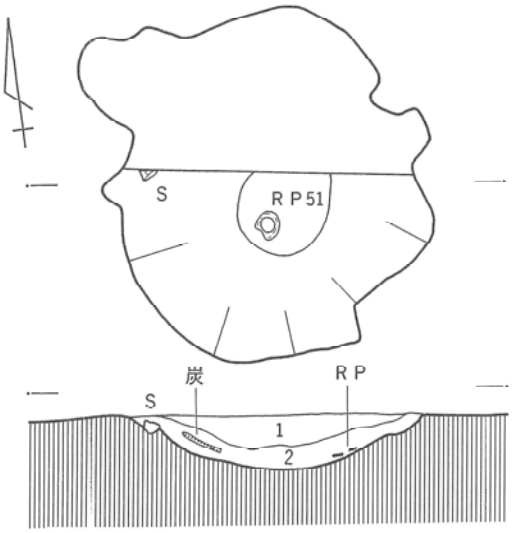


ＳＫ19

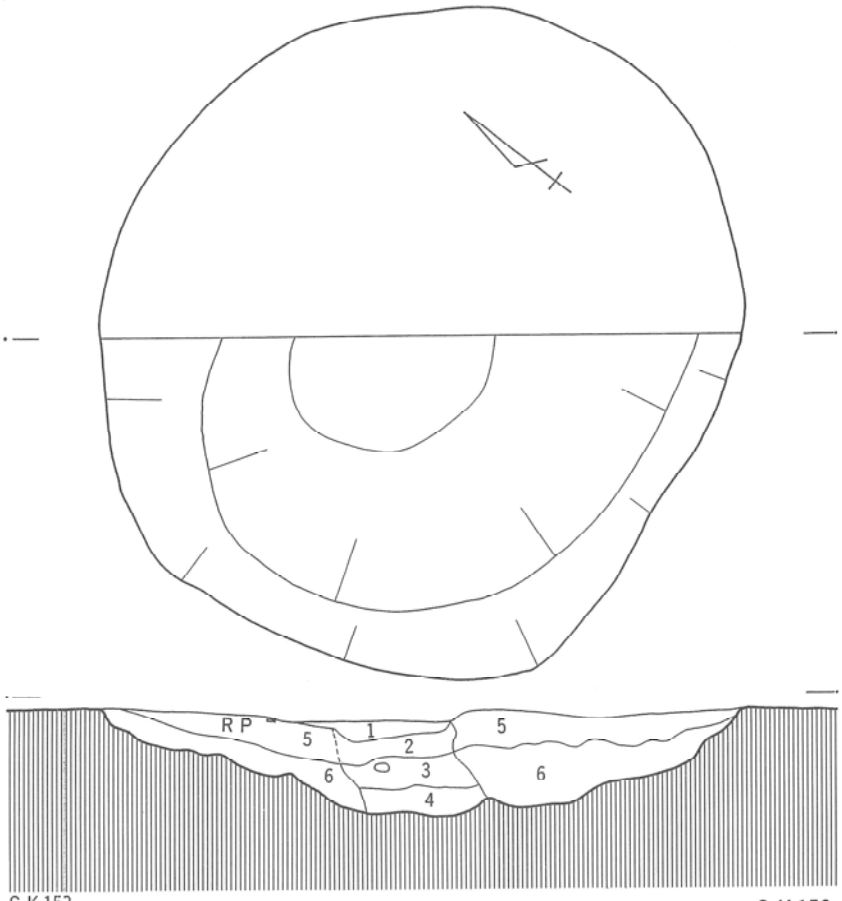
ＳＫ19
1　灰褐色シルト（10ＹＲ4/1）と
　　にぶい黄褐色シルト（10ＹＲ5/4）が
　　まばらに混入。

0　1 m

第12図　ＳＫ17・18・19・151土壙

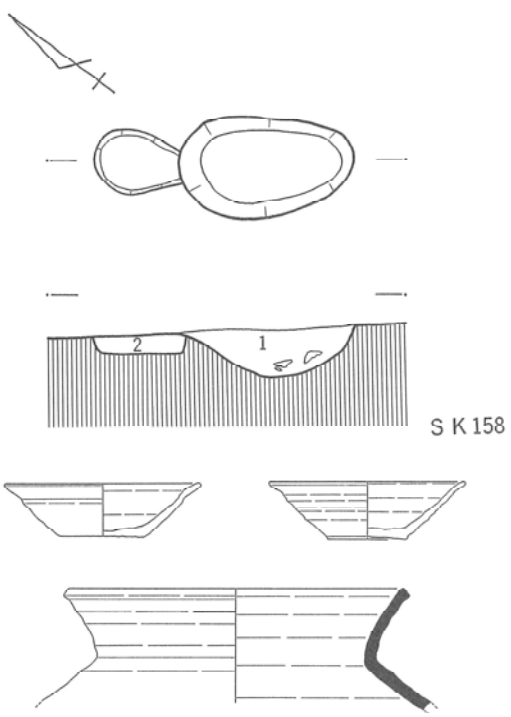


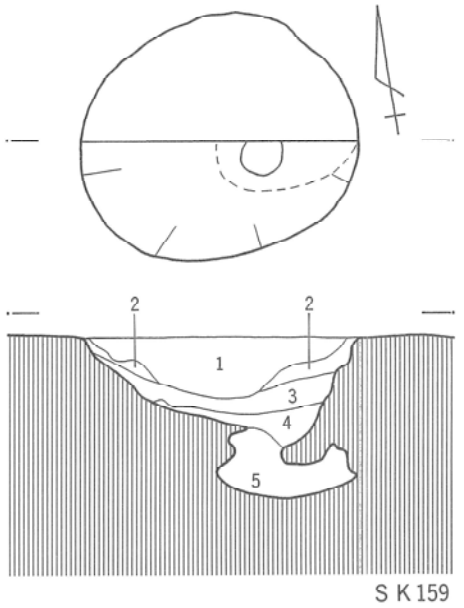
S K 152
1　褐色シルト(7.5Y R4/3)炭化物若干混入
2　褐灰色粘質土(7.5Y R4/1)炭化物多量混入



S K 153
1　黒褐色シルト(5Y R2/1)炭化物粒混入
2　茶褐色シルト(7.5Y R2/1)炭化物粒混入
3　灰黒色シルト(2.5Y R2/1)炭化物粒混入
4　灰黒色砂質シルト(2.5Y R2/1)炭化物粒混入
5　茶褐色シルト(7.5Y R2/2)灰白色シルトを稿状に混入
6　灰黒色砂質シルト(2.5Y R2/1)灰白色シルトを多量混入

第13図　土　壙

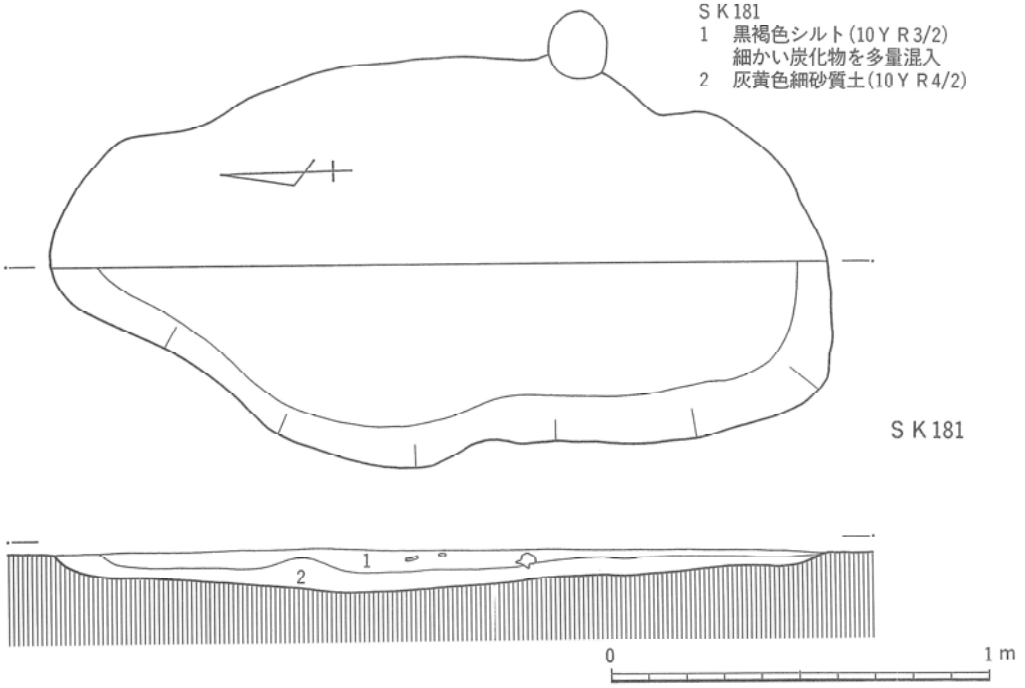




S K 158
1　黒褐色シルト(10Y R 3/1)
　　炭化物多量混入
2　灰黄色細砂質土(10Y R 4/2)
　　炭化物若干混入

S K 159
1　黒褐色シルト(10Y R 2/2)
　　炭化物多量混入
2　明黄褐色砂質土(10Y R 6/6)
3　黒褐色砂質土(10Y R 3/1)
　　炭化物混入
4　褐灰色砂質土(10Y R 4/1)
　　炭化物若干混入
5　黒褐色砂質土(10Y R 3/1)
　　炭化物若干混入

S K 181
1　黒褐色シルト(10Y R 3/2)
　　細かい炭化物を多量混入
2　灰黄色細砂質土(10Y R 4/2)



第14図　土　壙

（4）溝　跡

検出された漆跡は121条を数える。大別すると３種類に分けられる。磁北方向（南北）とほぼ同一に走るタイプ(幅20～30cm•深さ約15cm)、磁北方向と直交し東西に走るタイプ(幅約1.5m・深さ約30cm)、平面形が環状しているタイプである。

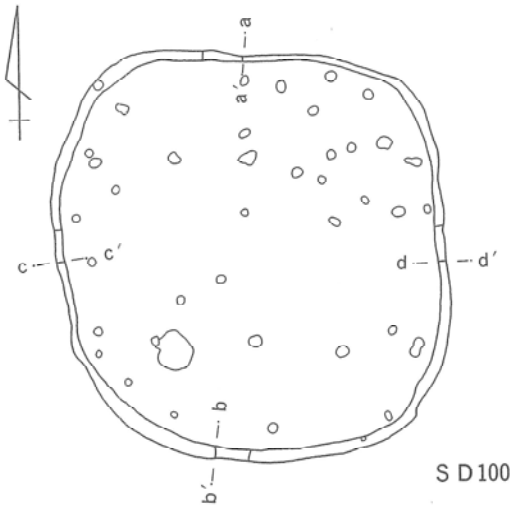
以下代表的な溝跡について概述する。

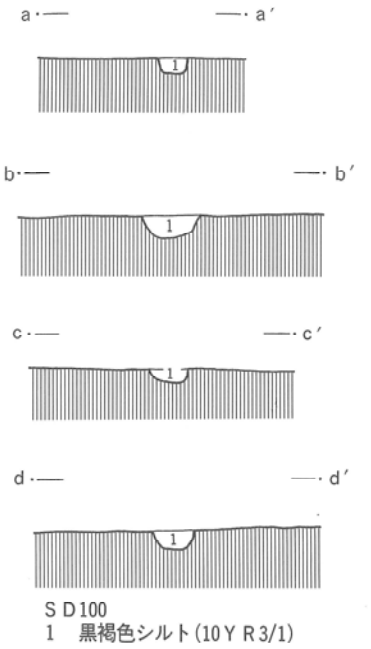
ＳＤ100溝跡（第15図　図版12）

Ｂ区南側（19～21—12～15Ｇ）に位置し、Ⅲ層上面で確認された。平面形が北東・北西側は隅丸の方形、南側は半円形を呈し、環状している。確認面で幅20～30cm・深さ８～12cm・環状の幅（溝跡外側）で東西約10cm・南北約11cmを測る。覆土は黒褐色シルトの１層で、遺物の出土は認められない。時期は10Ｃ前半と推定される。溝跡内側から柱穴が多数検出しており、その内14基の横スベリが確認された。建物跡を構成しうる可能性として、平面形が六角形の組み合せが想定できる柱穴を確認している。

ＳＤ43溝跡（第16図　図版13）

Ａ区南側・Ｃ区北側（13・14—15・16）に位置し、Ⅲ層上面で確認された。幅27～43cm・深さ約30cmを測る。磁北にほぼ直交し、南側で２又に別れＳＤ39・40となり、北側はＳＢ１の中央で切れる。覆土は２層になっている。ただし場所によって土色は異なる。遺物は、





第15図　ＳＤ100溝跡

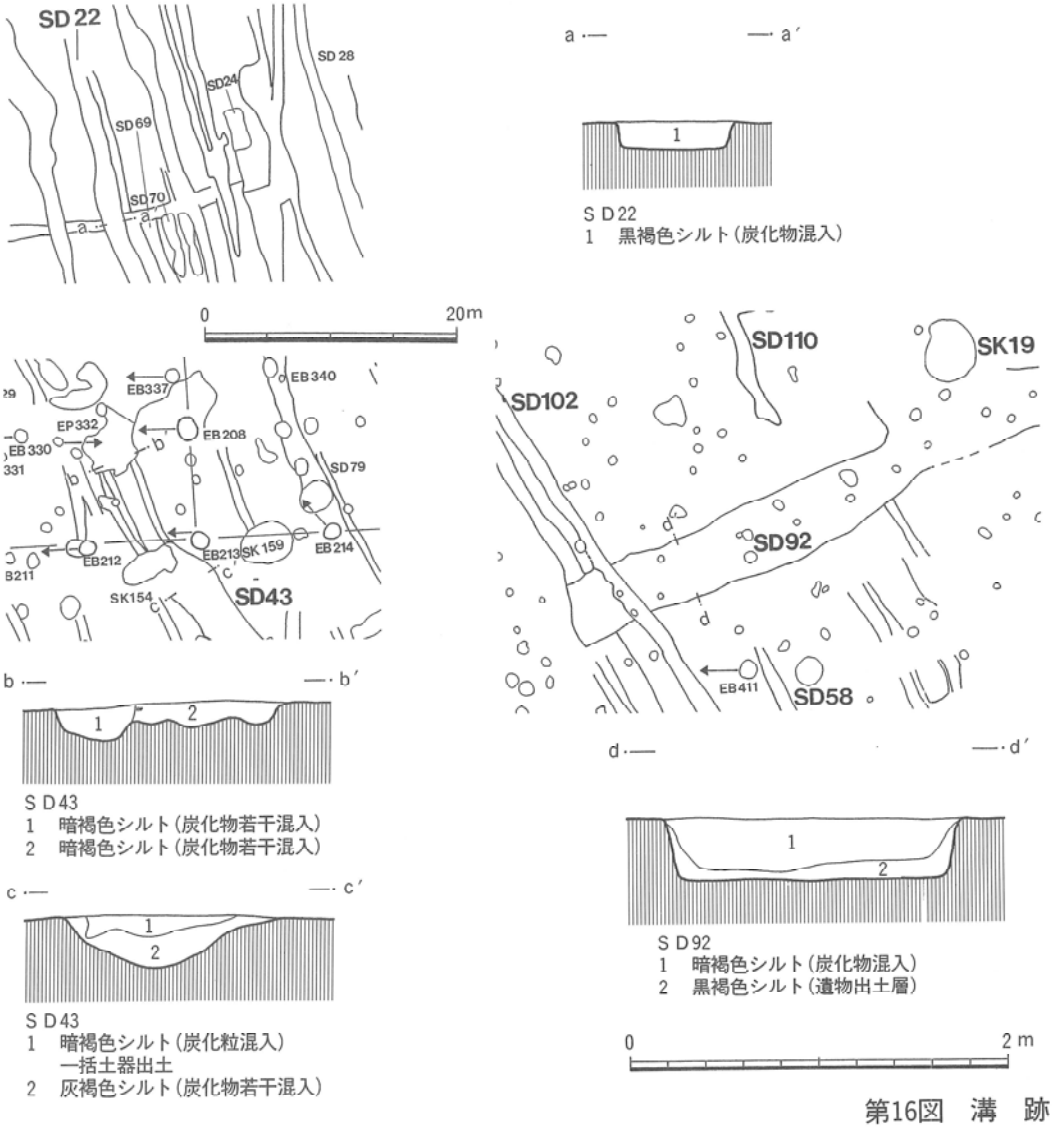
ＲＰ58・59・80～85が出土している。時期は10Ｃ後半から11Ｃ前半と推定される。

ＳＤ22溝跡（第16図　図版13）

Ｃ区南西（10―20・21Ｇ）に位置し、Ⅲ層上面で確認された。幅20～32cm・深さ約20cmを測る。南側で重複が認められ、ＳＤ142を切っている。覆土は１層で、遺物(赤焼土器)が若干出土している。時期はＳＢ２～４と同方向であることから10Ｃ後半と推定される。

ＳＤ92溝跡（第16図）

Ｂ区中央（16～21―11～13Ｇ）に位置し、Ⅲ層上面で確認された。幅1.1～2.0m・深さ約30cmを測る。磁北にほぼ直交し、西側がＳＤ101・102切られている。覆土は２層で遺物が下層で出土している。時期は出土遺物より９Ｃ末～10Ｃ頃と推定される。



第16図　溝　跡

表－1　遺構観察表

種　別	出土地点（G）	平面形	規　模(cm) 長径×短径,幅	深さ(cm)	壁の掘込状態	底面の状　態	備　　考
ＳＥ11	16-18・19	楕円形	(252)×(193)	(123)	急傾斜	平坦	ＲＰ32～37
ＳＥ12	16-18・19	略円形	161×136	70	東側急傾斜西側上部垂直下部緩やか	平坦	
ＳＥ13	16-18	略円形	255×221	80	急傾斜	平坦	ＰＲ41・79
ＳＥ14	15-14・15	略円形	105×96	(68)	東側垂直西側急傾斜	急傾斜	ＲＰ42・43
ＳＥ15	10-16	不整形	(418)×(320)	175	東側垂直西側急傾斜	平坦	ＲＰ74・75・91・92・94
ＳＫ16	18-15	円形	79×70	16	急傾斜	平坦	ＲＰ１～31
ＳＫ17	13・14-19・20	楕円形	502×395	90	東側急傾斜西側緩やか	平坦	
ＳＫ18	14-19	略円形	121×106	16	東側緩やか西側急傾斜	平坦	
ＳＫ19	18-12	円形	156×145	40	急傾斜	ほぼ平坦	
ＳＫ151	15-12	円形	150×135	63	急傾斜東側段あり	鍋底状	
ＳＫ152	16-17	不整形	103×79	14	緩やか	鍋底状	ＲＰ51
ＳＫ153	17-16	略円形	181×159	25	緩やか	凹凸	
ＳＫ158	12-15	楕円形	(46)×(26)	12	東側急傾斜西側緩やか	鍋底状	ＲＰ90・93
ＳＫ159	13・14-15・16	略円形	74×63	43	東側急傾斜西側上部緩やか下部袋状	鍋底状	ＲＰ72・73
ＳＫ181	10-15	不整形	206×101	12	緩やか	中央凹む	ＲＰ99
ＳＤ22	10-20・21		32×20	15	急傾斜	平坦	
ＳＤ43	13・14-15・16		43×27	28	東側緩やか西側急傾斜	鍋底状	ＲＰ58・59・80～85
ＳＤ92	16～21-11～13		200×110	33	急傾斜	平坦	ＲＰ86・87
ＳＤ100	19～21-12～15	環状	30×21	12	緩やか	平坦	
ＥＢ201	12-14	円形	28×24	22	東側急傾斜西側緩やか	凹凸	（ＳＢ1）
ＥＢ202	12・13-14	円形	38×33	23	急傾斜	平坦	（ＳＢ1）
ＥＢ203	13-14	円形	(52)×(49)	65	急傾斜	平坦	柱根残存する（ＳＢ1）
ＥＢ204	14-14	楕円形	73×55	36	急傾斜	平坦	柱根残存する（ＳＢ1）
ＥＢ205	15-14	円形	42×(40)	28	南側急傾斜北側袋状	鍋底状	（ＳＢ1）
ＥＢ206	12-16	略円形	72×59	33	東側袋状西側緩やか	傾斜	（ＳＢ1）
ＥＢ207	13-16	円形	40×35	22	急傾斜東側段あり	やや傾斜	（ＳＢ1）
ＥＢ208	14-15	楕円形	63×53	35	東側袋状西側緩やか	鍋底状	（ＳＢ1）
ＥＢ209	14-15	円形	52×44	16	東側垂直西側急傾斜	平坦	（ＳＢ1）
ＥＢ210	12-16	略円形	42×38	16	東側垂直西側急傾斜	平坦	（ＳＢ1）
ＥＢ211	12-16	円形	45×42	27	東側袋状西側緩やか	平坦	（ＳＢ1）
ＥＢ212	13-16	楕円形	46×38	21	東側袋状西側不明	鍋底状	（ＳＢ1）

種　別	出土地点（G）	平面形	規　模 長径×短径，幅	深さ（cm）	壁の掘込状態	底面の状　態	備　考
ＥＢ213	13-16	略円形	58×47	29	東側急傾斜 西側急傾斜 下部袋状	平坦	ＲＰ98　（ＳＢ1）
ＥＢ214	15-15	円形	49×43	57	東側袋状西側上部 垂直下部緩やか	平坦	柱根残存する（ＳＢ1）
ＥＢ215	15-15	楕円形	55×43	40	東側西側上部緩やか 下部袋状	傾斜	（ＳＢ1）
ＥＢ216	1-15・16	円形	11×9	7	垂直	傾斜	（ＳＢ2）
ＥＢ217	16-14	円形	11×10	7	急傾斜	平坦	（ＳＢ2）
ＥＢ218	18-10	円形	11×10	7	急傾斜	平坦	（ＳＢ2）
ＥＢ219	17-10	円形	12×11	7	急傾斜	平坦	（ＳＢ2）
ＥＢ220	17-10	円形	9×8	5	急傾斜	平坦	（ＳＢ2）
ＥＢ221	18-10	円形	9×9	5	急傾斜	鍋底状	（ＳＢ2）
ＥＢ222	17-10	円形	11×10	6	南側垂直 北側急傾斜	傾斜	（ＳＢ2）
ＥＢ223	18-10	円形	11×9	10	急傾斜	平坦	（ＳＢ2）
ＥＢ224	18-10	円形	9×8	3	北側垂直 南側急傾斜	傾斜	（ＳＢ2）
ＥＢ225	17-10	円形	11×10	8	南側垂直 北側急傾斜	平坦	（ＳＢ2）
ＥＢ226	18-10	円形	12×11	7	垂直	平坦	（ＳＢ2）
ＥＢ227	18-11	円形	12×12	8	急傾斜	平坦	（ＳＢ2）
ＥＢ228	12-17	円形	20×19	6	急傾斜	平坦	（ＳＢ3）
ＥＢ229	12-16	円形	22×21	5	急傾斜	鍋底状	（ＳＢ3）
ＥＢ230	13-16	円形	17×15	7	北側垂直 南側急傾斜	傾斜	（ＳＢ3）
ＥＢ231	12-17	円形	18×16	7	急傾斜	平坦	（ＳＢ3）
ＥＢ232	12-17	円形	19×18	5	急傾斜	鍋底状	（ＳＢ3）
ＥＢ233	13-17	円形	18×17	10	北側急傾斜 南側垂直	平坦	（ＳＢ3）
ＥＢ234	12-17	円形	20×18	5	急傾斜	平坦	（ＳＢ3）
ＥＢ235	12-17	円形	20×19	6	垂直	鍋底状	（ＳＢ3）
ＥＢ236	13-17	円形	19×19	7	北側垂直 南側急傾斜	傾斜	（ＳＢ3）
ＥＢ493	19-17	円形	25×21	3	南側急傾斜 北側緩やか	平坦	（ＳＢ3）
ＥＢ547	19・20-16	円形	22×19	3	北側急傾斜 南側緩やか	傾斜	（ＳＢ4）
ＥＢ548	19-17	円形	19×17	4	急傾斜	傾斜	（ＳＢ4）
ＥＢ549	20-17	円形	22×20	3	急傾斜	平坦	（ＳＢ4）
ＥＢ550	19-17・18	円形	17×15	3	急傾斜	平坦	（ＳＢ4）
ＥＢ551	20-17	円形	40×36	3	東側緩やか 西側急傾斜	平坦	（ＳＢ4）
ＥＢ552	20-17	円形	15×13	3	急傾斜	平坦	（ＳＢ4）

3　出土遺物

（1）土　器（第18～26図　表―2　図版15～19）

出土総数は、41,645点。数え、うち完形土器及び復元等による実測可能な土器の大部分は、井戸跡・土壙及び溝跡等の遺構内出土のものである。土器総数の割合は、土師器6.2%、須恵器7.8%、赤焼土器86.0%である。出土数の多いのは供膳形態の坏で、各割合は土師器7.7%、須恵器5.6%、赤焼土器86.7%であり、どちらも赤焼土器が圧倒的に多い状況である。図示した各土器の概要については表―2にまとめ、ここでは各種別に多い割合をもつ坏及び一括土器等について述べる。

土師器は、ヘラミガキを行い内面及び両面黒色処理の坏や高台付坏である。内黒平底のものは、大きさにより3つに分けられる。1類：口径13cm・器高4.5cm大で、口径に比して器高の低い小形のもの（1～6・8・12)。2類：口径13cm・器高6cm前後のもの（7・9)。3類：口径17cm・器高8.7cm大の大形のもの（14）である。高台付坏は、内黒でやや高い高台をもち、丸みをもつ体部から口縁部が少し外反するもの（13）や、両黒のものがある。出土数は、少ない。また、ごく僅かであるが底部に放射状のナデを行うものもみとめられる（16―10G)。

須恵器は、坏・高台付坏・蓋・皿・壺・甕の器種があり、中でも坏が全体の53%を越える割合をしめる。

坏（A）は、底部切り離しが回転ヘラ切りと糸切り離しによるものがあり、A1類：口径13cm・器高3.5cm前後で、底部回転ヘラ切り離しによるもの（18・19・21・22)。A2類：図示したのは1点のみであるが、器高4.5cmと1類よりも高く、口径に比して底径が小さい土器（20)。切り離しは回転糸切り離しである。

高台付坏（B）は、B1類：底部から強く弯曲して立ち上がる土器（25～27)。B2類：直線的に立ち上がる体部で、口径に比して器高の高い土器（28）である。

赤焼土器は、坏・高台付坏・蓋・皿・埚・壺？・甕・羽釜・甑？の器種があり、うち坏は75%を越える割合である。ロクロ成形によるもので、体部がほぼ直線的に立ち上がる器形を呈する。底部は回転糸切り離し無調整である。但し、数点回転ヘラ切り離しと考えられるものがみとめられた。図示した土器の回転方向は、大半が右方向であるが、左回転(44・59・73）も若干みとめられる。

次に口径と器高比を基準にみると、3つのグループに分けられる。1類：口径10.9～12.2cm・器高2.9～3.2cmで、浅く皿形に近い小形の土器である。EB660からの一括出土である(93～95・108・109)。2類：口径12.0～13.6cm・器高3.6～5.8cmで、やや器高の幅が大きいが出土数の多いグループである。(42～48・50・52・54～67・70・71・73～80・86～90・

92～104・106・107・111・112・114)。３類：口径14.5～15.6cm・器高5.5～6.6cmで、全体に法量の大きい土器である。図はＳＥ11（49・51・53）及びＳＫ154（115）からの出土である。

ＳＫ16出土土器（120～149）は、小形の赤焼土器皿で、30枚一括確認である。大きさは、口径9.8～11.3cm・器高2.3～3.4cmとまとまっている。口径が坏１類より少し小さいが、ほぼ同類と考えられる器形である。どちらもピット及び土壙からの同一器形一括出土であり、祭祀に関連する１群と思われる。

（２）墨書土器（第18～24図　表－２　図版15・17・18）

出土数は、78点である。赤焼土器が74.3％と最も多く、土師器18.0％・須恵器7.7％の割合である。器種は、大半が坏である。小破片が多く、判読できたのは18点である。文字は「實」７点、「仝」４点、「人」４点、「寺」１点、「戸」１点、「山」１点である（註１）ＳＥ11からは「實」、「丶」、「人」、「寺」の土器が確認された。

なお、須恵器坏（38）「川」及び高台付坏（26）「×」の線刻がみとめられた。

（３）陶　器（第17図　表－２　図版16）

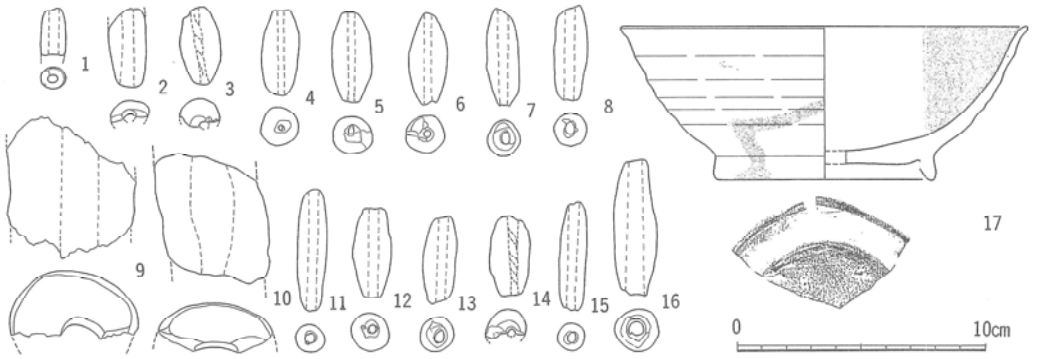
緑釉・灰釉陶器、中世陶器と考えられる須恵器系の擂鉢、瓦器等である。出土数は、数点のみである。図示したのは17のみであるが、緑釉陶器(14－10Ｇ・17－20Ｇ)は猿投折戸53号窯式(10Ｃ後半)灰釉陶器(17)は、口縁部が緩やかに外反する椀で、東濃丸石－２窯式(11Ｃ中～後半)に併行する。（ＳＤ58）は、時期不明（鎌倉期？）が考えられる。(註２)。

（４）土製品・石製品（第17図　表－２　図版19）

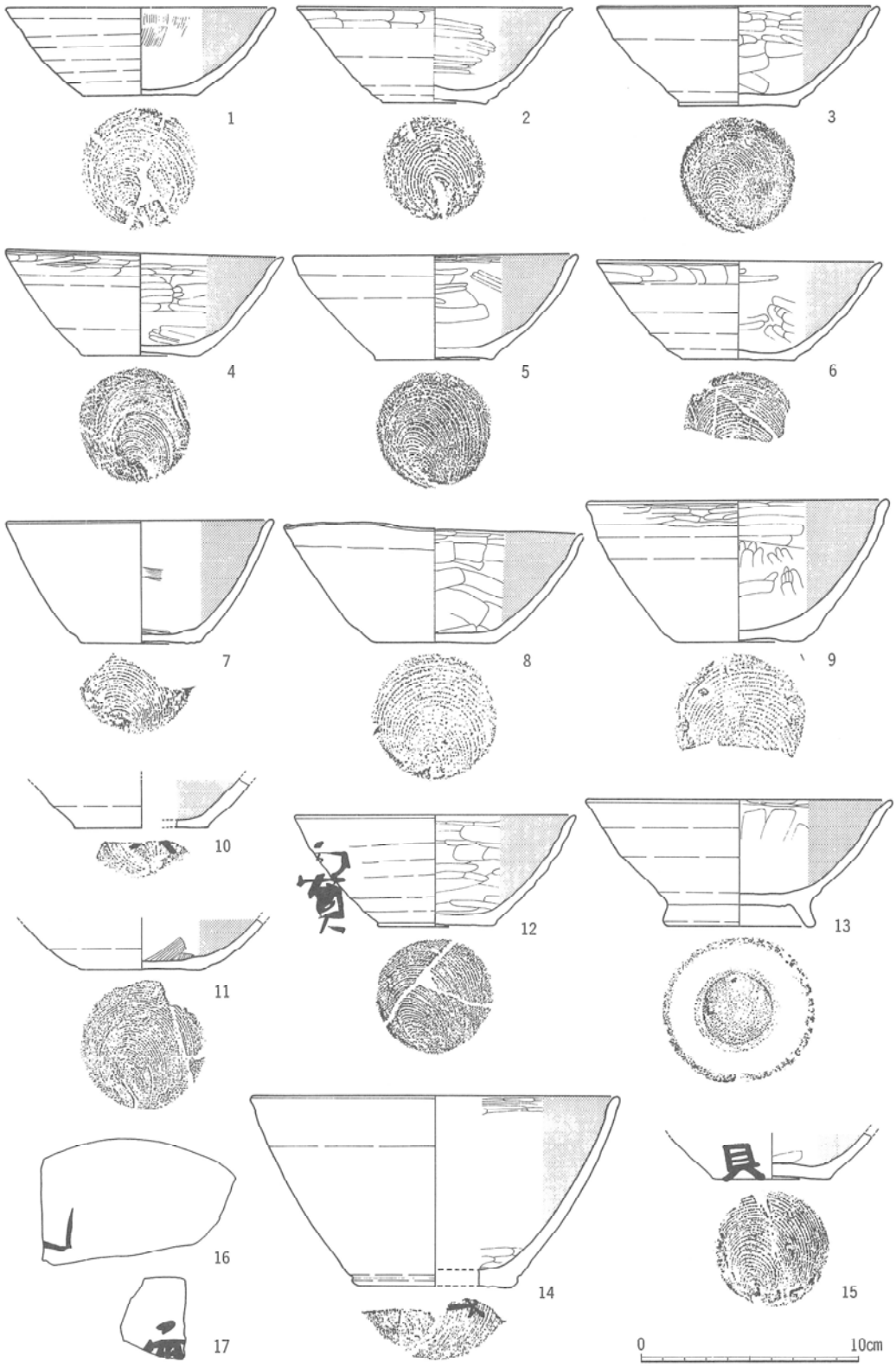
土錘・紡錘車・フイゴ羽口・石英原石・磨石である。うち、土錘は孔の断面に縄目状の凹凸をもつものがあり、製作の違いがみとめられる。

（５）木製品（第27図　表－２　図版20）

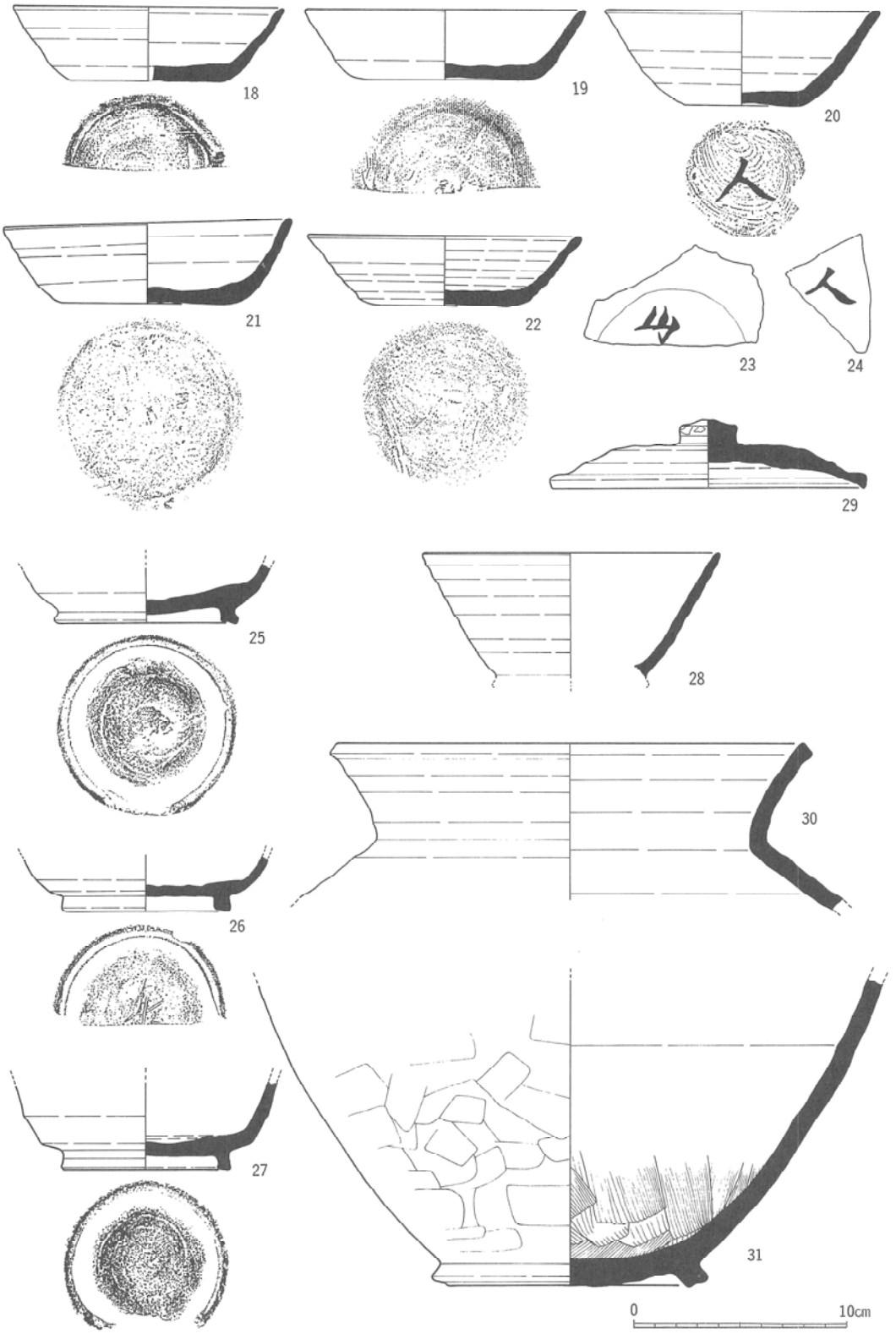
斎串・鍬・浮子・用途不明木製品に分けられる。形態は、表記する。ＳＥ11（４～６）及びＳＥ14（１～３）内出土である。



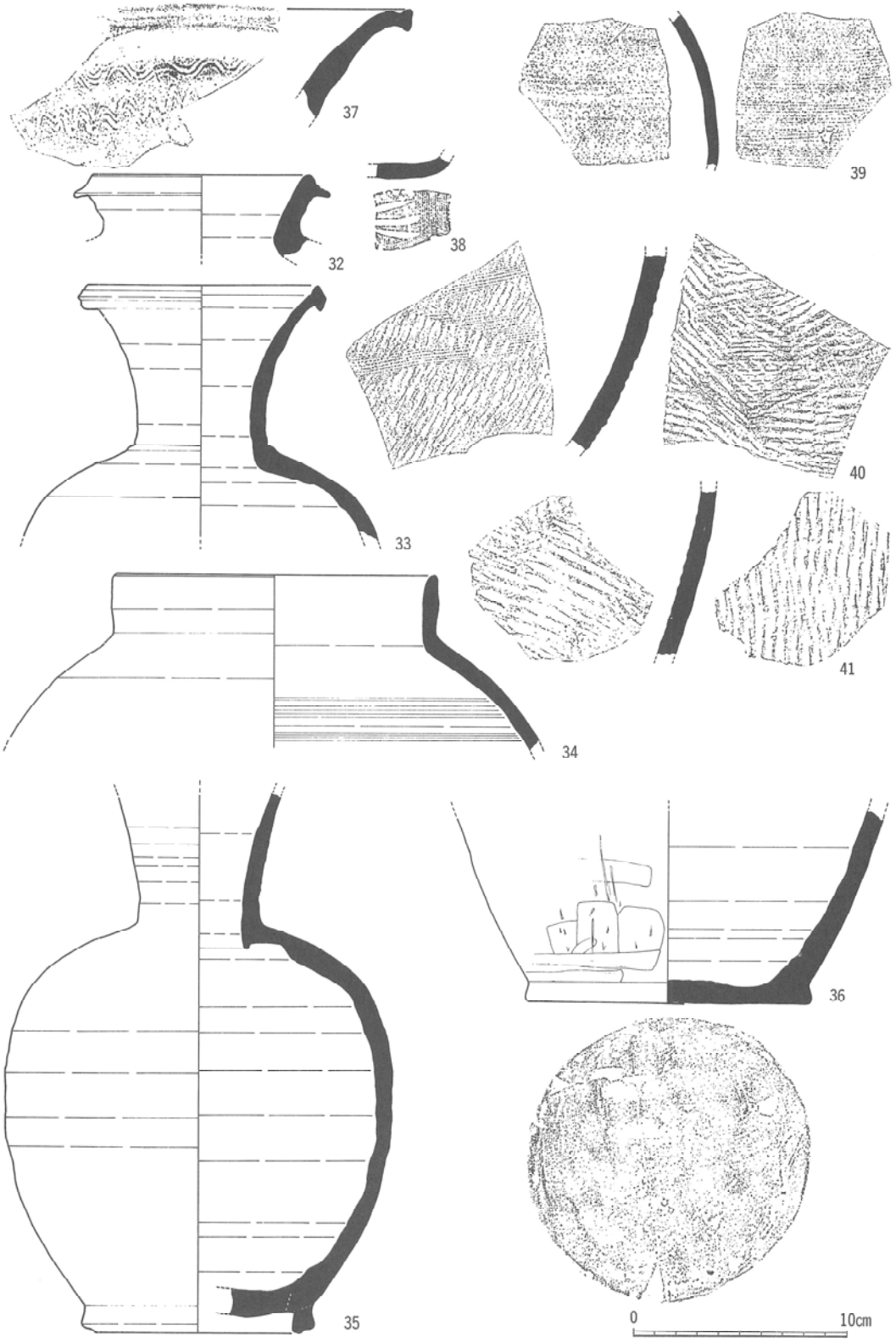
第17図　土製品・陶器



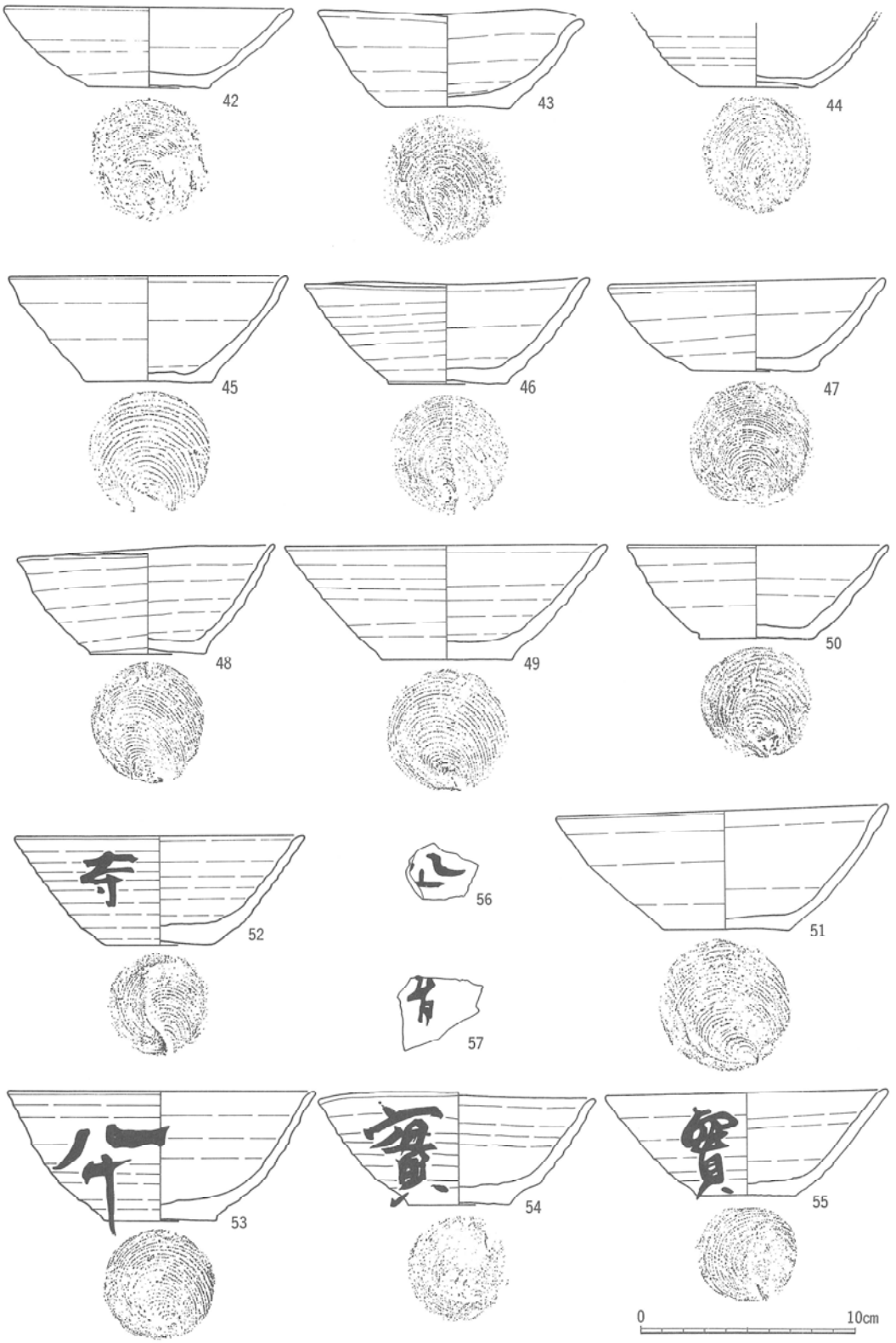
第18図　出土土器（1）



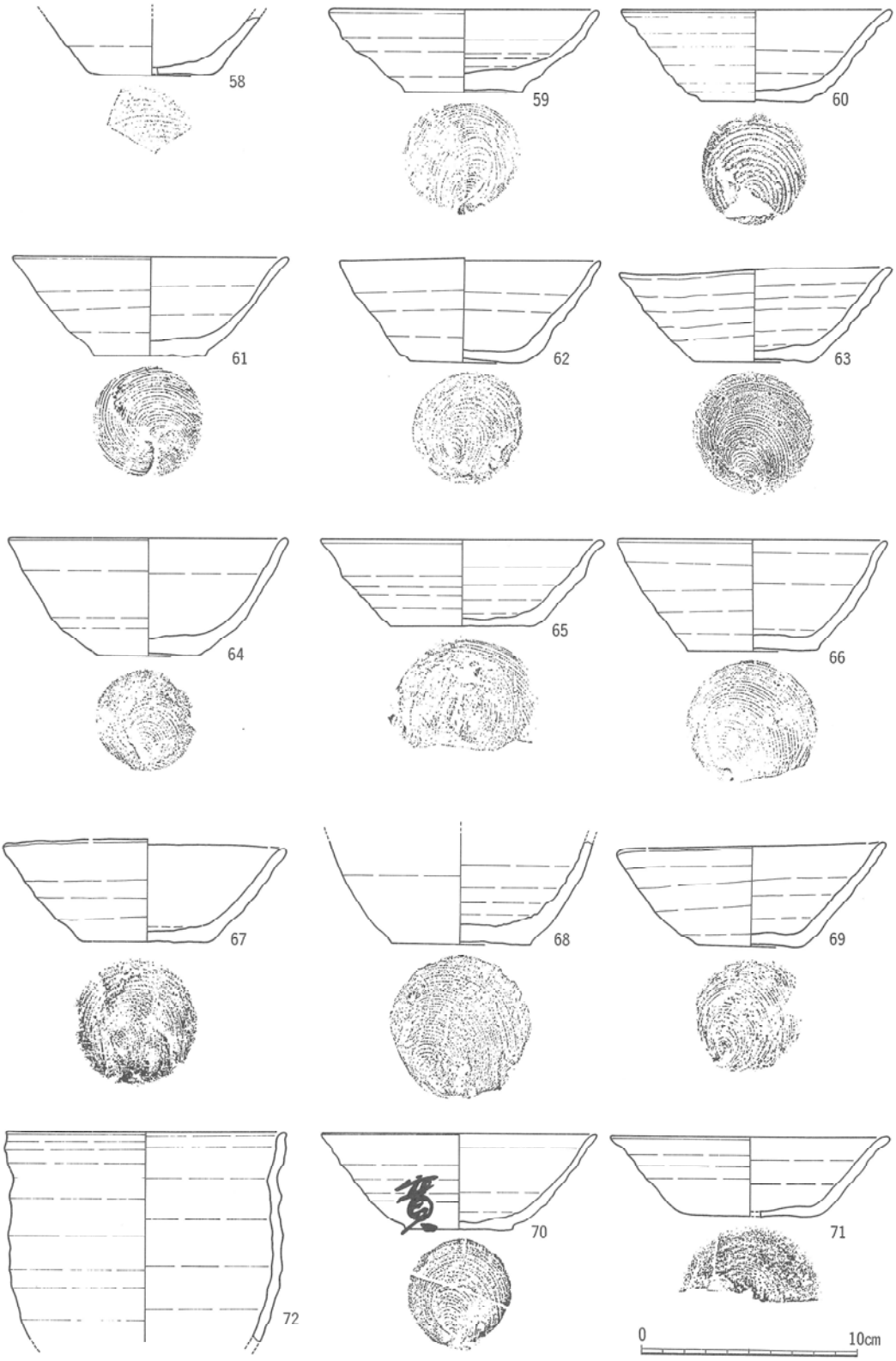
第19図　出土土器（２）



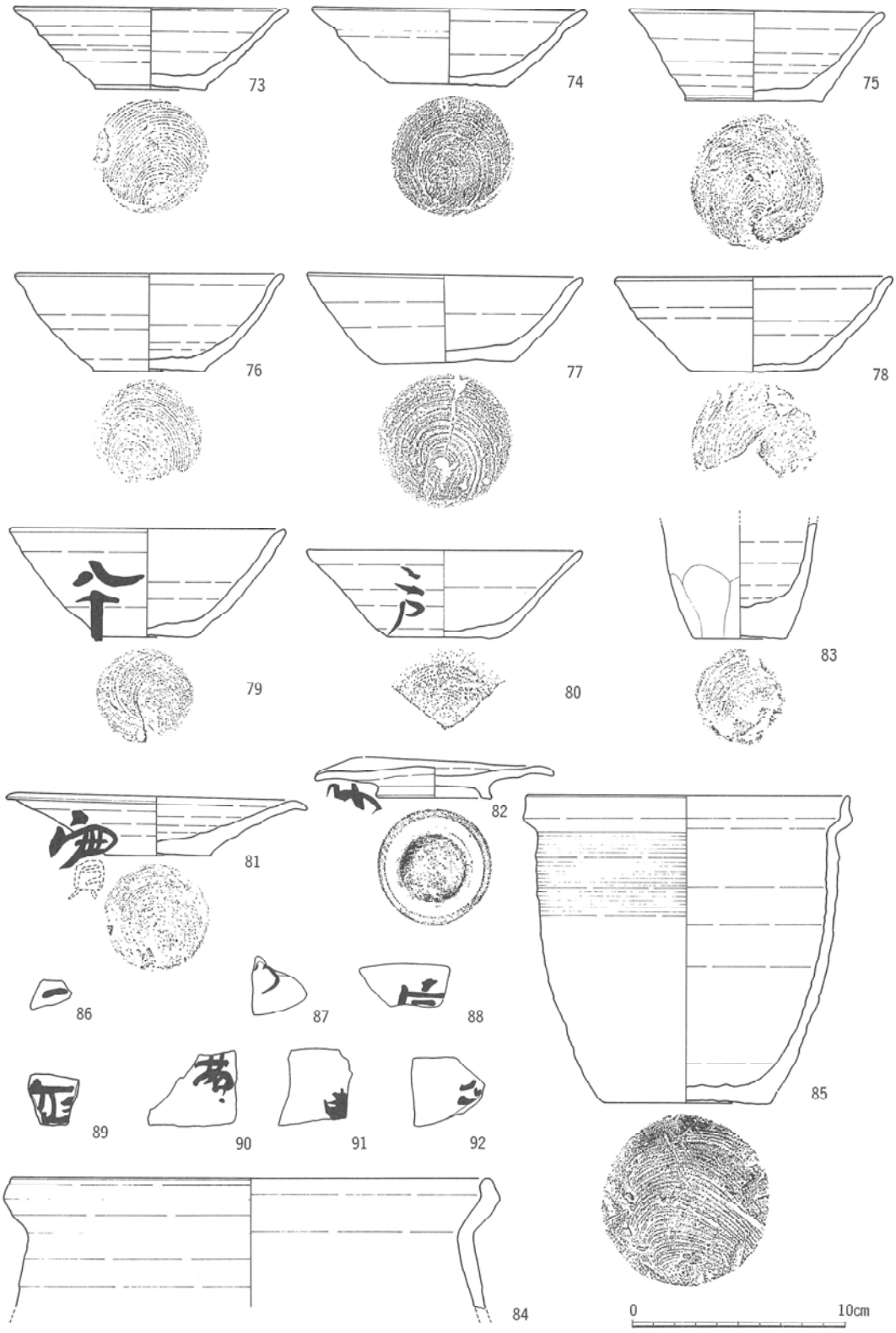
第20図　出土土器（３）



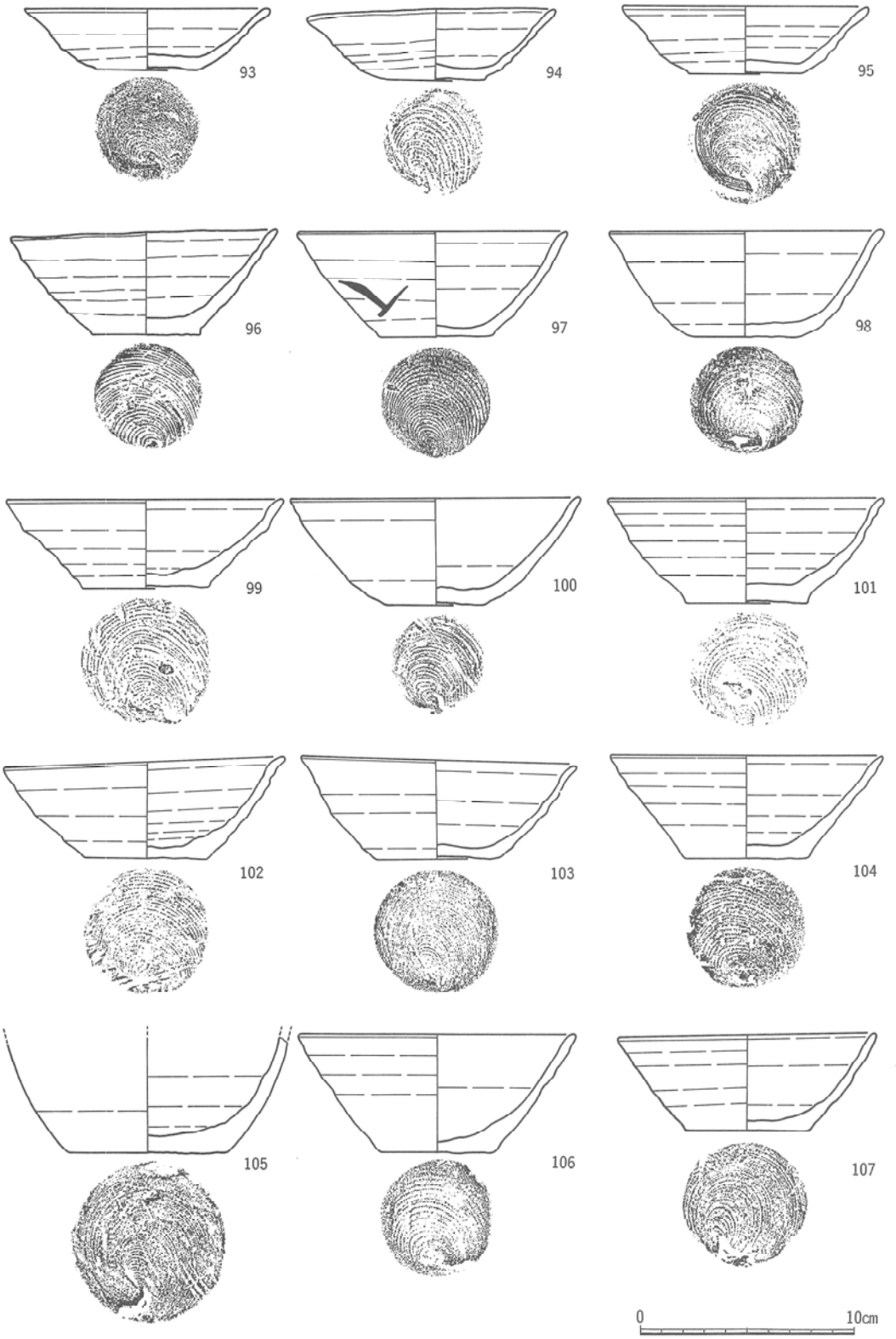
第21図　出土土器（４）



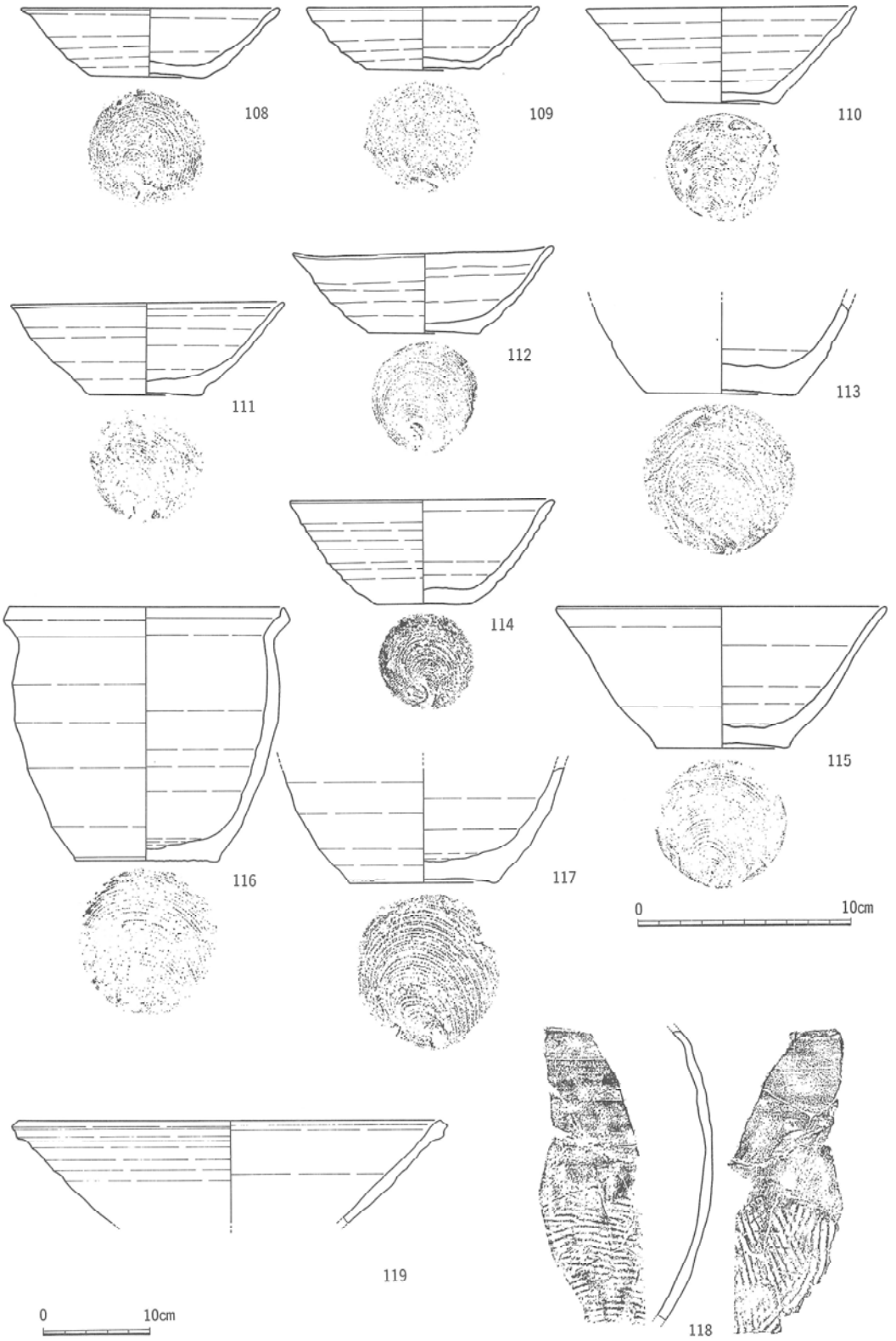
第22図　出土土器(5)



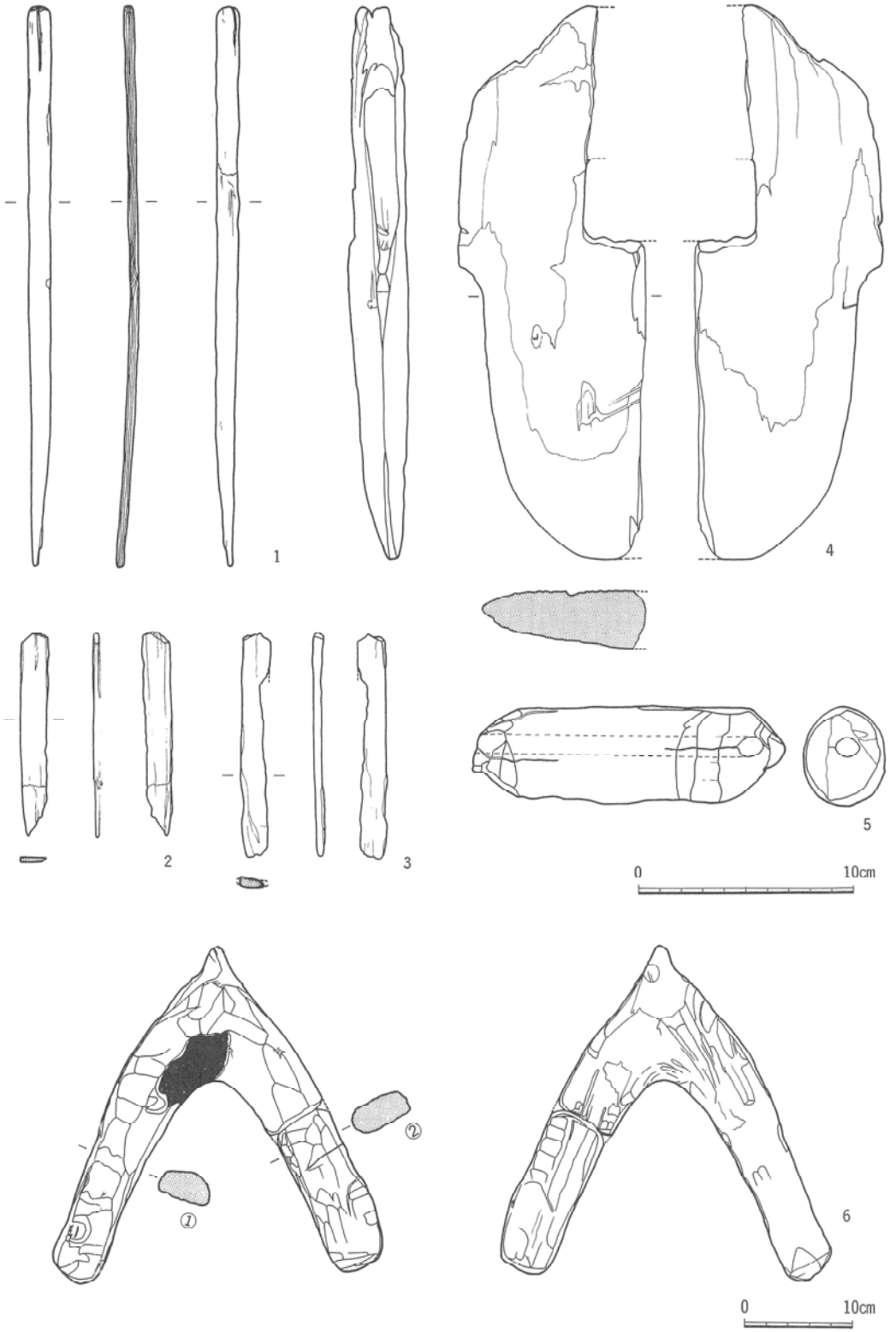
第23図　出土土器（６）



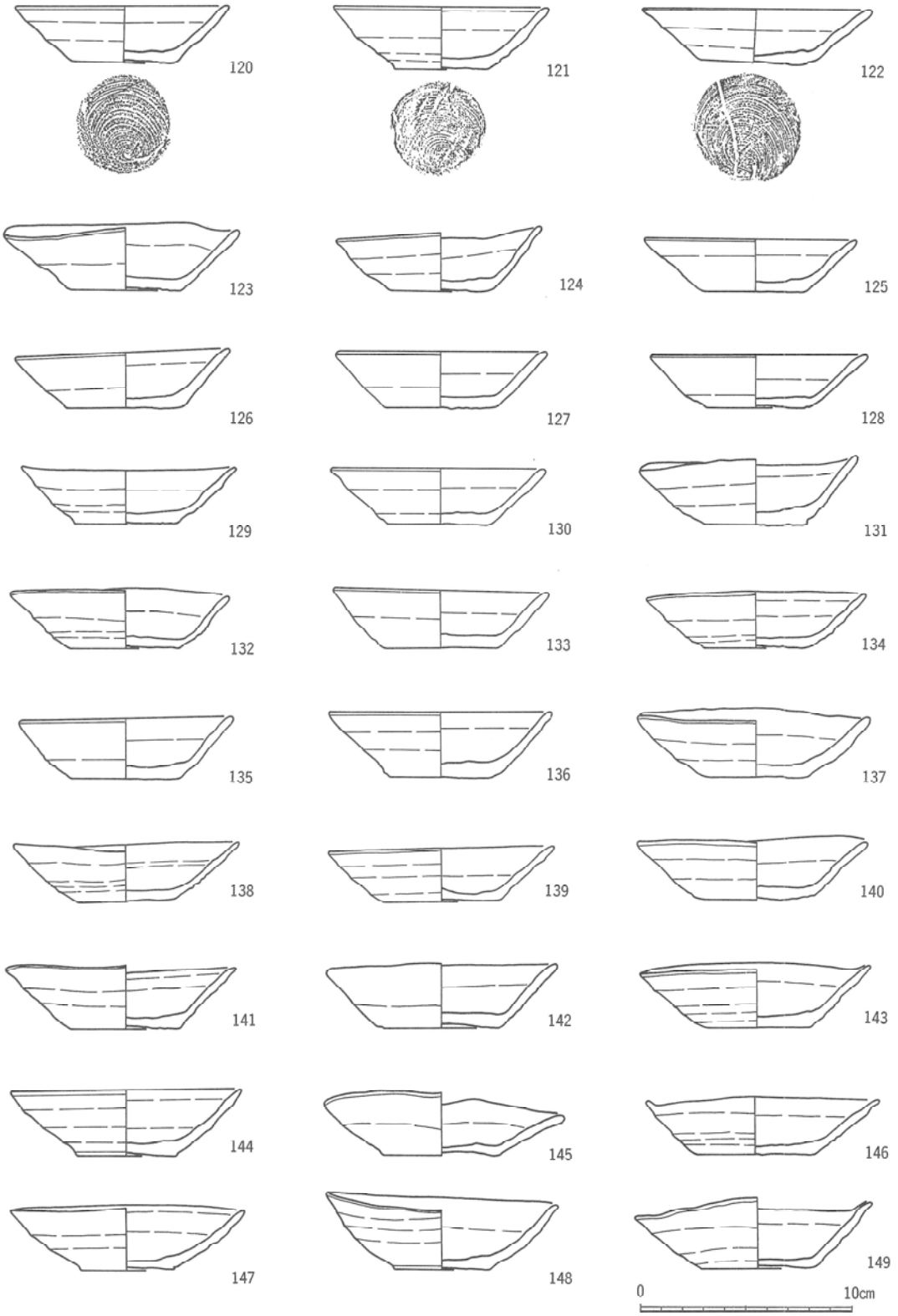
第24図　出土土器(7)



第25図　出土土器（８）



第27図　木製品


120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
0
10cm

第26図　出土土器(9)

表一2　出土土器観察表

種別	挿図番号	図版番号	器種	出土位置	計測値(mm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	底部	備考
土師器	18-1	15-1	坏	SK157	124	54	41.5	口縁部ヘラミガキ ロクロナデ	ヘラミガキ 墨色処理	回転糸切り右	
	18-2		坏	SD40	127	48	45.5	口縁部ヘラミガキ ロクロナデ	ヘラミガキ 墨色処理	回転糸切り右	
	18-3		坏	16-18	131	55	47	口縁部ヘラミガキ ロクロナデ	ヘラミガキ 墨色処理	回転糸切り右	RP78-1 底部円盤状に出る
	18-4	15-2	坏	SD40	127	54	48	口縁部ヘラミガキ ロクロナデ	ヘラミガキ 墨色処理	回転糸切り右	
	18-5	15-3	坏	16-18	132	54	49	口縁部ヘラミガキ ロクロナデ	ヘラミガキ 墨色処理	回転糸切り右	RP78-2 体部に墨書不明
	18-6		坏	SD40	131	52	46	口縁部ヘラミガキ ロクロナデ	ヘラミガキ 墨色処理	回転糸切り右	
	18-7	15-4	坏	SD40	123	55	56.5	ロクロナデ	ヘラミガキ 墨色処理	回転糸切り右	口縁～体部に漆？付着
	18-8	15-5	坏	SD43	139	56	52	口縁部ヘラミガキ ロクロナデ	ヘラミガキ 墨色処理	回転糸切り右	RP81
	18-9		坏	SD79	140	60	65	口縁部ヘラミガキ ロクロナデ	ヘラミガキ 墨色処理	回転糸切り右	RP49
	18-10		坏	10-18		62	(22)	ロクロナデ	ヘラミガキ 墨色処理	回転糸切り右	墨書不明
	18-11		坏	SD55		60	(23)	ロクロナデ	ヘラナデ 墨色処理	回転糸切り右	
	18-12	15-6	坏	16-18	130	54	51	口縁部ヘラミガキ ロクロナデ	ヘラミガキ 墨色処理	回転糸切り右	RP78-3 墨書「實」
	18-13		高台付坏	SD126	142	68	58	ロクロナデ	ヘラミガキ 墨色処理	回転糸切り	RP95
	18-14	15-7	坏	SD43	170	71	87	口縁部ヘラミガキ ロクロナデ	ヘラミガキ 墨色処理	回転糸切り右	RP85 出高台 墨書「大」カ
	18-15	15-8	坏	SD25		54	(20)	ロクロナデ	ヘラミガキ 墨色処理	回転糸切り右	体部に墨書「實」カ
	18-16	15-13	坏	SD40				口縁部ヘラミガキ ロクロナデ	ヘラミガキ 墨色処理		墨書「人」カ
	18-17	17-24	坏	SD101				口縁部ヘラミガキ ロクロナデ	ヘラミガキ 墨色処理		RP52 墨書「實」カ
須恵器	19-18	15-9	坏	SD78	128	74	35	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	
	19-19		坏	14-18	132	74	33	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	墨書不明
	19-20		坏	14-18	130	56	44	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	墨書「人」
	19-21	15-11	坏	SK152-y	136	80	38	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	RP51
	19-22	15-10	坏	SK18	130	60	33	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	
	19-23	15-16	坏	15-14						回転ヘラ切り	墨書「山」
	19-24		坏	12-18						回転ヘラ切り	墨書「人」
	19-25		高台付坏	13-17		36	(28)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	
	19-26	15-12	坏	SD43		78	(26.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	RP81 底部線刻「×」
	19-27	15-17	坏	SD154		78	(41)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	
	19-28		坏	SD43	141		(58.5)	ロクロナデ	ロクロナデ		RP82
	19-29		蓋	SD43	148		32.5	ロクロナデ	ロクロナデ		RP80
	19-30	15-15	甕	SK181	220		(78.5)	平行叩き目 ロクロナデ	アテ痕 ロクロナデ		RP99
	19-31	15-19	壺	17-12		114	(143)	平行叩き目 カキ目	アテ痕　ナデ ハケ目		RP40
	20-32	15-18	壺	EB405	102		(38)	ロクロナデ	ロクロナデ		
	20-33	16-2	壺	SE10-F12	108		(118)	ロクロナデ	ロクロナデ		長頸壺
	20-34	15-14	壺	SD101	152		(81)	ロクロナデ	ロクロナデ		RP52-1短頸壺
	20-35	16-1	壺	17-12		96	(252)	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ		RP52-2自然釉頸部内面接合部に指頭圧痕
	20-36	16-3	壺	SX517-F1		135	(90)	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ		
	20-37	16-5	甕	11-21				ロクロナデ	ロクロナデ		頸部に櫛描波状文
	20-38		坏	13-18				ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	底部に線刻
	20-39		壺	SD101				ロクロナデ	ロクロナデ		RP52-3　RP51-1と同一個体か
	20-40		甕	SD101				平行叩き目	平行アテ痕 ハケ目		RP52-4
	20-41		甕	SD101				平行叩き目	平行アテ痕		RP52-5
赤焼土器	21-42	17-1	坏	SE11	136	58	43	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP35
	21-43	17-2	坏	SE11-F12	125	59	43.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	
	21-44		坏	SE11-F12		52	(32)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP37
	21-45		坏	SE11-F12	131	59	50	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP33
	21-46	17-5	坏	SE11-F12	134	56	49	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP35-1 底部に墨斑
	21-47	17-3	坏	SE11-F12	130	60	43	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	
	21-48	17-4	坏	SE11-F12	121	55	49	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	
	21-49		坏	SE11-F12	152	62	54.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP35-2
	21-50		坏	SE11-F12	123	54	44.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP34
	21-51		坏	SE11-F12	156	58	57	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP35-3
	25-52	17-6	坏	SE11-F12	136	50	52	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	墨書「寺」

種別	挿図番号	図版番号	器種	出土位置	計測値(mm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	底部	備考
赤焼土器	21-53	17-7	坏	SE11-F12	145	53	61	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	墨書「仐」
	21-54	17-8	坏	SE11-F12	130	48	50	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	墨書「實」
	21-55	17-9	坏	SE11	133	47	485	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP32 墨書「實」
	21-56	17-25	坏	SE11				ロクロナデ	ロクロナデ		墨書「仐」
	21-57	17-27	坏	SE11				ロクロナデ	ロクロナデ		墨書不明
	22-58		坏	SE15		56	(26.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	内面漆付着
	22-59		坏	SE14	126	55	38	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り左	
	22-60	17-10	坏	SE14掘り方	126	52	42	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	底部に黒斑
	22-61		坏	SE15	128	52	46	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP75
	22-62	17-11	坏	SE13-F5	122	53	47	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP41 体部内面に黒斑
	22-63		坏	SE15	127	55	43	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP74 口縁部に黒斑
	22-64		坏	SE11-F12	130	48	54	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	口縁～体部に黒斑
	22-65	17-12	坏	SE14掘り方	132	66	40	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP42 二回の切り離し痕跡
	22-66		坏	SE11-F12	126	61	51	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	身込みに黒斑
	22-67		坏	SE15-Y	131	59	44	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	口縁部に黒斑
	22-68		甕	SE15		65	(48)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	PR91
	22-69		坏	SE11	126	50	45.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	
	22-70	17-13	坏	SE13-F5	128	50	45	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP41 墨書「實」
	22-71	17-14	坏	SE15	130	62	37	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP94 底部に黒斑
	22-72	18-18	甕	SE14堀り方	130		(96)	ロクロナデ	ロクロナデ		
	23-73	17-15	坏	SK158	130	53	38	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り左	RP90
	23-74	17-16	坏	SK158	130	56	36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP93
	23-75		坏	SK157	120	65	42	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	
	23-76	17-18	坏	SD101	127	53	46	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	
	23-77	17-17	坏	SK170	130.5	62	41	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP76 内面に漆？付着
	23-78	17-28	坏	SD101	131	60	45	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	口縁部に漆？付着
	23-79	17-29	坏	SD110	130	46	50	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	墨書「仐」
	23-80	18-1	坏	EB582	130.5	51	40	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	墨書「戸」
	23-81		皿	SD101	142	50	27.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP53 墨書「實」
	23-82	18-4	皿	EB213	113	54	14	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	RP98 墨書不明
	23-83		壺？	EB524		42.5	(53)	ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切り右	体部下半ヘラケズリ
	23-84	18-16	甕	SD101	225		(61.5)	ロクロナデ	ロクロナデ		RP52-6
	23-85	18-19	甕	SD43	153	80	145	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP59
	23-86	17-21	坏	SD43				ロクロナデ			墨書不明
	23-87	17-26	坏	SD42				ロクロナデ	ロクロナデ		墨書不明
	23-88	17-19	坏	EB660				ロクロナデ	ロクロナデ		RP101-1 墨書「實」カ
	23-89		坏	SD102				ロクロナデ	ロクロナデ		墨書「實」カ
	23-90	17-22	坏	EB660				ロクロナデ	ロクロナデ		RP101-2 墨書「實」カ
	23-91	17-23	皿	EB660				ロクロナデ	ロクロナデ		RP101-3 墨書不明
	23-92	17-20	坏	EB660				ロクロナデ	ロクロナデ		RP101-4 墨書「仐」カ
	24-93	18-2	坏	EB660	115	49	29	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	PR104
	24-94	18-5	坏	EB660	117	48	32	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP103
	24-95	18-3	坏	EB660	116	54	32	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP105
	24-96		坏	SD101	125	51	47.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP52 体部に黒斑
	24-97	18-7	坏	SD43	128	52	48	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP84 墨書「人」
	24-98		坏	SD126	129	51	49	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP97
	24-99		坏	SE13-F	130	60		ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP79
	24-100	18-8	坏	SD43	136	46	49	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP58
	24-101	18-6	坏	EB660	130	58	48	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP101-5
	24-102	18-9	坏	SD101	132	58	44.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP55 口縁部に黒斑
	24-103	18-10	坏	15-13	130	58	46	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP61
	24-104		坏	SD101	128	48	58	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP52-1

種別	挿図番号	図版番号	器種	出土位置	計測値(mm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	底部	備考
赤	24-105	18-11	甕	SD101		75	(53)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP44
	24-106	18-12	坏	SD110	130	53	54	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP46
	24-107		坏	20-16	122	58	44	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP63
	25-108		坏	EB660	122	55	31.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP 101-6・102～106
	25-109		坏	EB660	109	53	28.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP102
	25-110		坏	SD101	127	53	44	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP52 口縁部内面に黒斑
	25-111		坏	SK172	129	54	43	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP77
	25-112	18-13	坏	EB311	123	52	39	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP47 内面漆付着
	25-113	18-14	甕	11-15		71	(43)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP68
	25-114	18-15	坏	SD101	125	45	49	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP52-2
	25-115		坏	SK154	155	63	66	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP60 体部に黒斑
	25-116	18-17	甕	SD86	130	68	119	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP45
	25-117		甕	19-11		70	(54)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP38
	25-118		甕	SD43				ロクロナデ 平行叩き目ヘラケズリ	ロクロナデ 平行アテ痕	丸底	RP84
焼	25-119		鍋	SE15	396		(95)	ロクロナデ 平行叩きナデヘラケズリ	ロクロナデ 平行アテ痕		RP92
	26-120	19	皿	SK16	102	48	27	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP21
	26-121	19	皿	SK16	103	45	29	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP 1
	26-122	19	皿	SK16	107	51	25	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP19
	26-123	19	皿	SK16	102	53	28.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP17
	26-124	19	皿	SK16	98	48	28.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP 6
	26-125	19	皿	SK16	100	50	25.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP 7
	26-126	19	皿	SK16	100	56	26	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP20
	26-127	19	皿	SK16	100	52	26	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP30
土	26-128	19	皿	SK16	102	47	25	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP 9
	26-129	19	皿	SK16	103	50	27.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP 4
	26-130	19	皿	SK16	103	47	27	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP11
	26-131	19	皿	SK16	103	47	30	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP15
	26-132	19	皿	SK16	104	53	26.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP 5
	26-133	19	皿	SK16	104	53	28	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP12
	26-134	19	皿	SK16	105	50	25	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP13
	26-135	19	皿	SK16	106	51	28	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP18
器	26-136	19	皿	SK16	106	50	30	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP24
	26-137	19	皿	SK16	108	50	28	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP10
	26-138	19	皿	SK16	108	46	29	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP14
	26-139	19	皿	SK16	108	56	26	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP25
	26-140	19	皿	SK16	108	54	28.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP28
	26-141	19	皿	SK16	110	52	29	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP 2
	26-142	19	皿	SK16	110	55	29	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP 8
	26-143	19	皿	SK16	110	49	27.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP22
	26-144	19	皿	SK16	110	47	31.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP23
	26-145	19	皿	SK16	110	56	22.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP29
	26-146	19	皿	SK16	111	56	26	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP26
	26-147	19	皿	SK16	111	45	29	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP 3
	26-148	19	皿	SK16	110	46	34	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP31
	26-149	19	皿	SK16	113	54	28.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP27 口縁～底部に黒斑

土製品・陶器

挿図番号	図版番号	種別	器種	出土位置	計測値(mm・g) 最大長	最大径	孔径	重量	形態他	備考
17-1	20-1	製品	土錘	19-14	19	10	4	(1.61)	紡錘形を呈する。端部欠損。	
17-2	20-2		土錘		31.8	14.8	6	(2.95)	紡錘形を呈する。端部欠損。	
17-3	20-3		土錘		31.8	16.2	4	4.23	紡錘形を呈する。孔断面に製作時と考えられる縄目を残す。	
17-4			土錘		35	15	25	7.14	紡錘形を呈する。孔に縄目痕？と考えられる凹凸がみとめられる。	
17-5			土錘		36.4	16	3	8.79	紡錘形を呈する。孔に縄目痕？と考えられる凹凸がみとめられる。	
17-6			土錘		38	16	3.5	7.49	紡錘形を呈する。孔に縄目痕？と考えられる凹凸がみとめられる。	
17-7	20-4		土錘	15-15	40	13.5	4.5	5.67	紡錘形を呈する。	
17-8	20-5		土錘	14-15	38.5	13.3	4	5.79	紡錘形を呈する。	
17-9	20-10		フイゴ羽口	SD40	55.5	(52)	16	(52.52)	棒状を呈する。欠損品。	
17-10	20-9		フイゴ羽口	SD91	52	(45.8)	11.5	(35.62)	棒状を呈する。欠損品。	
17-11	20-7		土錘	EB439	47.5	11.7	4	5.22	紡錘形を呈する。	
17-12			土錘		34.8	15.6	4	7.73	紡錘形を呈する。孔に縄目痕？と考えられる凹凸がみとめられる。	
17-13			土錘	15-15	35	13.5	4	5.15	紡錘形を呈する。	
17-14			土錘		31.4	15.8	4	4.77	紡錘形を呈する。孔断面に製作面に製作時と考えられる縄目を残す。	
17-15	20-6		土錘	19-14	42.2	10.8	3.5	4.16	紡錘形を呈する。	
17-16	20-8		土錘	10-10	53	17.5	8	11.38	紡錘形を呈する。	

					口径	底径	器高	外面	内面	底部	備考
17-17	16-4	灰釉陶器	椀	10-10	164	90	62	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り右	RP71

木製品

挿図番号	図版番号	種別	器種	出土位置	計測値(mm・g) 最大長	最大径	孔径	重量	形態他	備考
27-1	20-11	木製品	斎串	SE14-F	259	10	4		上端は、少し丸くつくり、縦に切り込みが1条入る。下端は、鋭角に尖る。	
27-2	20-21		斎串	SE14-F	(93)	12.5	2.5		上端は、片側に斜めに削りを入れ、縦に切り込みが1条入る。下端は、欠損。	
27-3	20-13		斎串	SE14-F	(103)	(13)	4		上端は、主頭状につくり、縦に切り込みが1条入る。下端及び側面は欠損。	
27-4	20-14		鍬	SE11-F	256.5	(87.5)	27.5		身の中位上部に四角い柄穴を通す。側面に一段の削り込みを入れ、刃部着装部をつくる。縦半分欠損。	
27-5	20-15		浮子	SE11-F	145			44	棒状を呈する。丸木の両端に粗い削りを入れ、中央に径10cmの孔を通す。	
27-6	20-16		不明木製品	SE11-F	304.5	304.5			脚部幅と厚さ①49.28②55.26用途不明である。二又部に樹皮の一部を残す。	

Ⅲ　下長橋遺跡

1　遺跡の概観

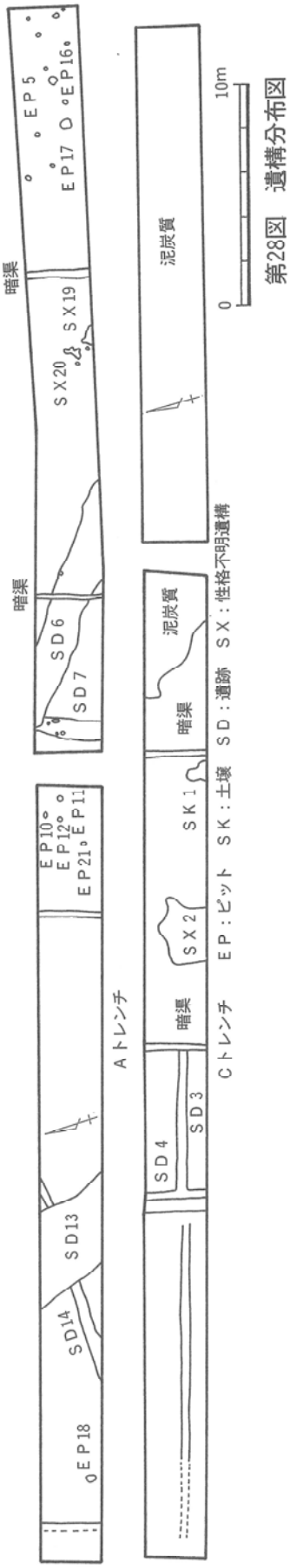
本遺跡は、山形県遊佐町大字小原田村西他に所在する。この一帯は、月光川左岸に広がる沖積地で、その中に隣接する形で数多くの遺跡が分布する(第１図)。遺跡は、ＪＲ羽越本線遊佐駅の南へ約800m、下長橋地区西側の水田に位置し、標高は約11mを測る。北に位置する小深田遺跡からは約１㎞、東に位置する浮橋遺跡からは約500mの距離である。

ここに昭和62年度から県営ほ場整備事業・月光川左岸地区が実施されることになり、同年に分布調査及び緊急調査が行われた。その結果、東西300m・南北450mの遺跡範囲内等が考えられ、それを基に関係機関と協議を重ね、今回その63年度排水路工事にかかる区域について緊急発掘調査を実施することとなったものである。今年度は、県道遊佐（停）藤崎線八走踏切除去工事、県営かんがい排水事業・月光川地区にかかる調査も行われた。

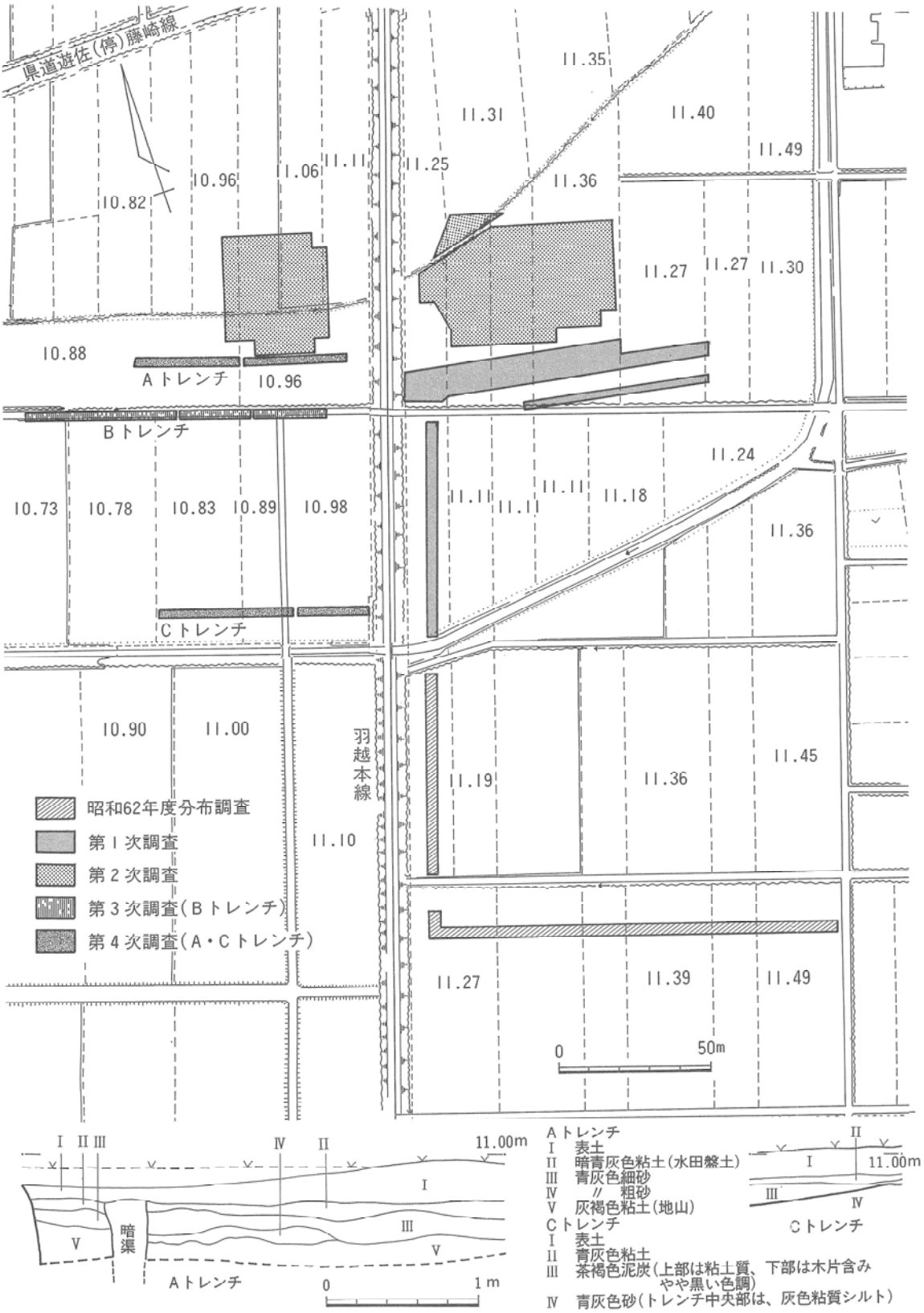
便宜上、昭和62年度調査を第１次、同63年度県道分を第２次、同県かん排分を第３次（Ｂトレンチ）、今回を第４次調査（Ａ・Ｃトレンチ）と区分する。

調査は、重機を用い事業区域内に幅３ｍ・長さ70mのトレンチを２本入れて行い、粗掘り後、順次面削りでトレンチを掘り進め遺構・遺物の確認、その位置確認や遺構覆土精査及び写真記録等を行いながら調査を進めて行った。記録については、隣接する調査区（第２・３次調査）との位置関係が相互に把握できるように、グリッド杭及び基準杭の配置関係を確認した。

遺跡の層序は、Ａトレンチでは５つ、Ｃトレンチでは４つに分けられる。遺構・遺物の確認はＡトレンチがⅤ層上面、Ｂトレンチが Ⅳ層上面である。両トレンチ間の層位は、未確認である。遺構・遺物については、Ａトレンチ検出がほとんどであるが全体に確認数は少ない。出土遺物も、大部分がＳＤ内出土である。



第28図　遺構分布図

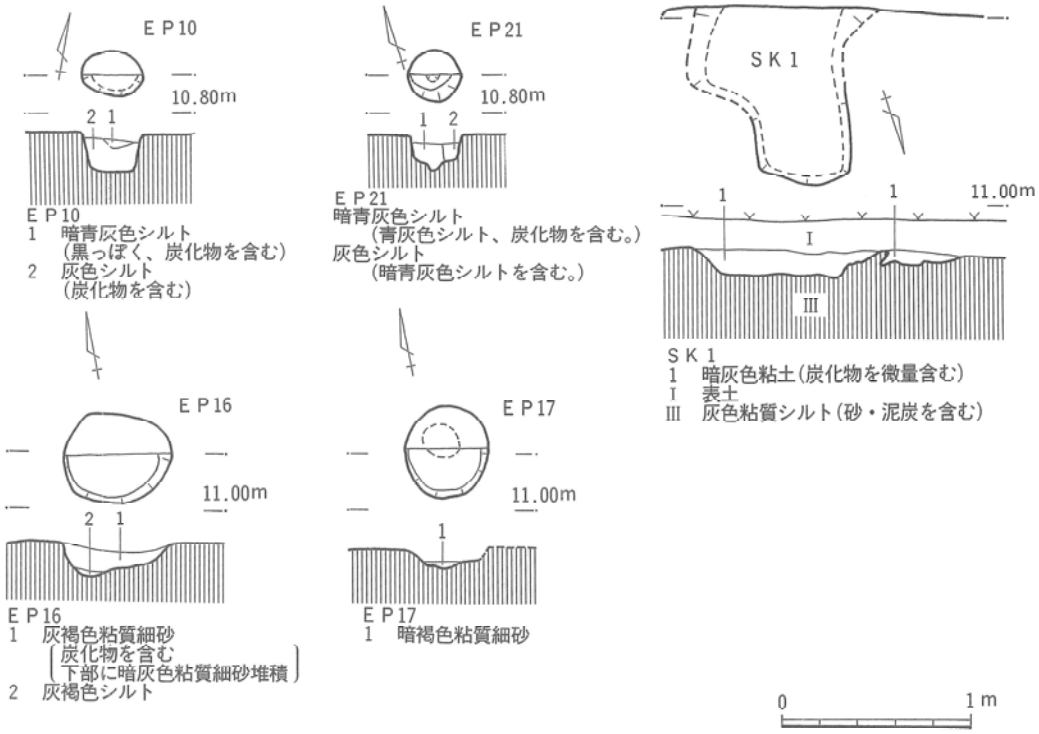


第29図　遺跡全体図・土層断面図

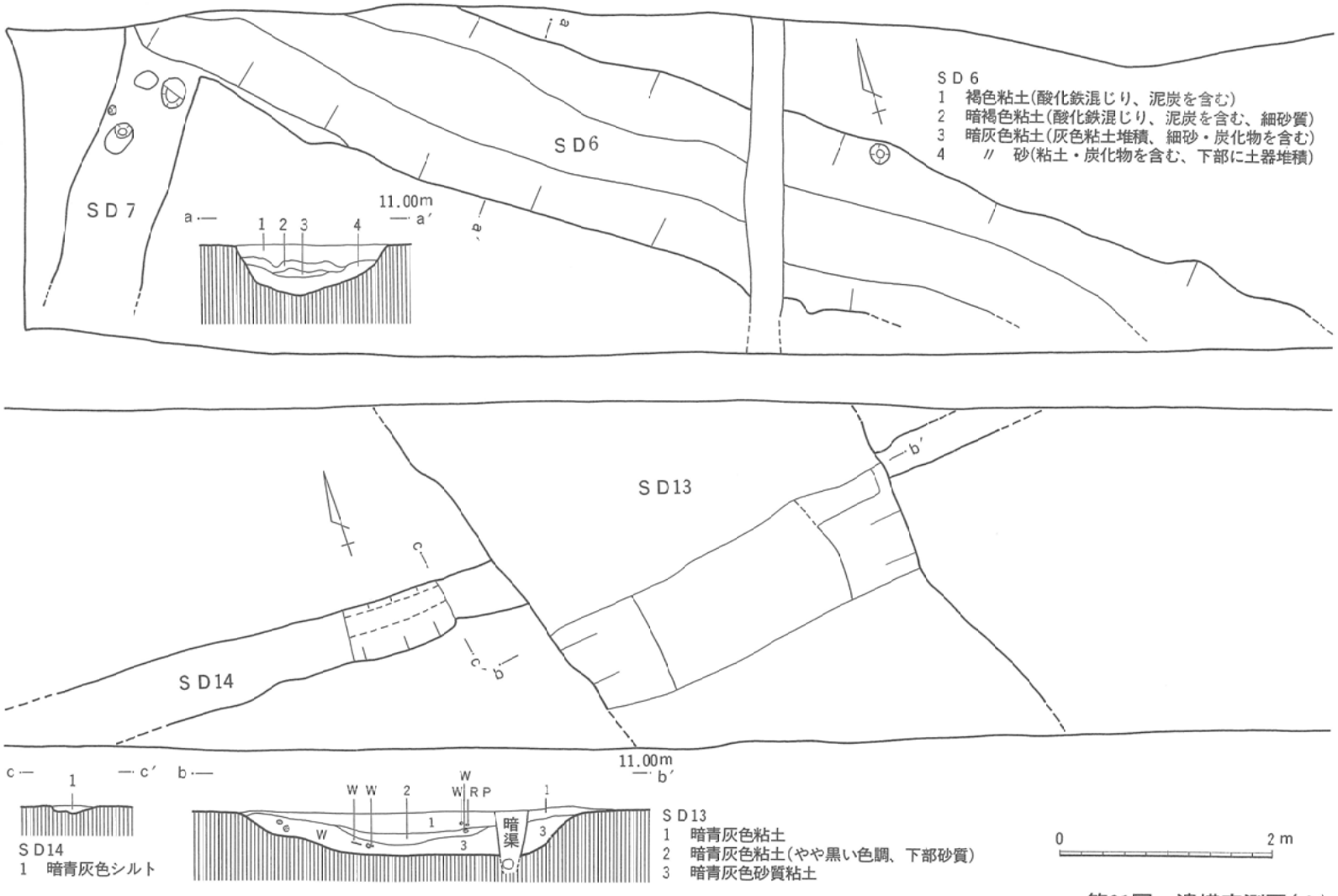
2　遺構と遺物

確認した遺構はピット24・土壙１・溝跡６、性格不明遺構３である。ピットは、Ａトレンチ中央及び東側に分布するが、掘立柱建物跡を想定する柱並びは確認できなかった。ＳＫ１は、セクション西側にレンズの層が続き、自然層の可能性が考えられる。ＳＤ６は、Ａトレンチを斜めに北西方向に横断する。ＳＤ６・７検出状態の重複関係からＳＤ７←ＳＤ６の新旧がたどれる。出土遺物は、今回の調査区内では比較的多く土器片・箸等である。ＳＤ13は、Ａトレンチ西側に位置する。ＳＤ14との重複は、ＳＤ13←14の新旧状況である。下駄・箸・杓子・傘等の木製品、針金等の出土遺物の内容から、耕地整理（昭和22年）以前の旧河川（八ツ面川）の流路跡が考えられる。

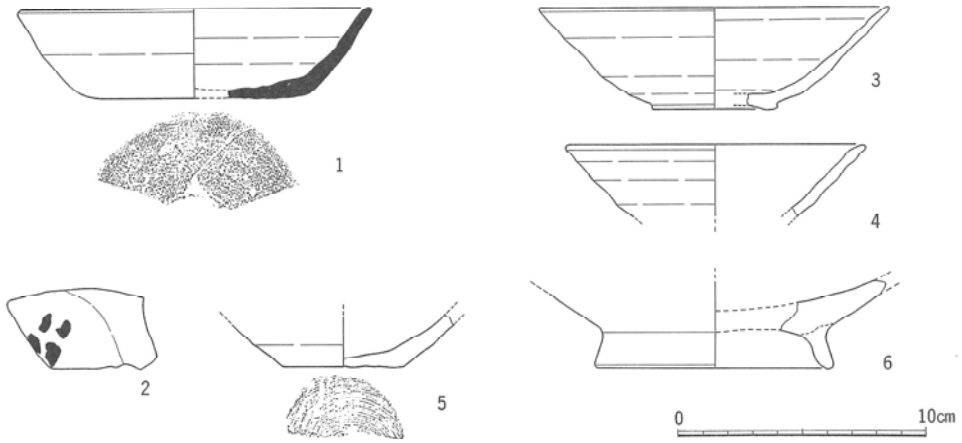
出土遺物は、整理箱約３箱と、全体に少ない。土器の種別は、土師器・須恵器・赤焼土器で、うち赤焼土器が最も多い。土師器は、坏ないし高台付坏である。内面黒色処理と両面のものがある。赤焼土器は、壙・甕・鉢・堝である。坏は、底部回転糸切り離し無調整によるものである。甕は、底部平底のものと、丸底（体部片からの推定）で体部不半にタタキを行うものがある。須恵器は、ＳＤ６出土の坏で、底部切り離しは、回転ヘラ切りと糸切り無調整のものがある。遺構との関連では時期的には、赤焼土器坏を含む遺物の内容から平安時代（10Ｃ代頃）が考えられる。



第30図　遺構実測図（１）


SD6
1 褐色粘土(酸化鉄混じり、泥炭を含む)
2 暗褐色粘土(酸化鉄混じり、泥炭を含む、細砂質)
3 暗灰色粘土(灰色粘土堆積、細砂・炭化物を含む)
4 〃 砂(粘土・炭化物を含む、下部に土器堆積)
SD6
SD7
SD13
SD14
11.00m
a
a′
b
b′
c
c′
1 2 3 4
W W 2 W R P 1
暗渠
SD14
1 暗青灰色シルト
SD13
1 暗青灰色粘土
2 暗青灰色粘土(やや黒い色調、下部砂質)
3 暗青灰色砂質粘土
0
2 m

第31図 遺構実測図(2)



1・2・4：ＳＤ６出土　5：ＳＸ19出土
3　　：ＥＰ５出土　6：Ａトレンチ

第32図　出土土器実測図

表－3　遺構観察表

種　別	平面形	規模(cm) 長径×短径,幅	深さ(cm)	壁の掘込状態	底面の状態	時期	備　考
ＥＰ10	楕円形	33×23	22	垂直	平坦	平安	
ＥＰ16	楕円形	57×47	19	東側緩やか 西側急傾斜	西壁側凹む		
ＥＰ17	略円形	48×44	12	緩やか	凹凸		
ＥＰ21	円　形	28×27	20	垂直	中央凹む		
ＳＫ１	不整形	(95)×100	16	東側、西側上部緩やか、西側下部垂直	西側凹凸		
ＳＤ６		151～166	48	緩やか	中央凹む	平安	
ＳＤ７		73～86	3				新旧関係ＳＤ7←ＳＤ6 陶器出土
ＳＤ13		325～354	46	緩やか、西側段を呈する	平坦		
ＳＤ14		40～50	8	緩やか	平坦		

※　(　　)内数値は、部分検出部計測値を示す。

表－4　出土土器観察表

種別	挿図番号	図版番号	器種	出土位置	計測値(mm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	底部	備考
須恵器	31-1	2ε-1	坏	ＳＤ６-Ｆ	142	90	36	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	
	31-2	2ε-2	坏	ＳＤ６-Ｆ				ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	底部に墨書をもつ文字不明
赤焼土器	31-3	2ε-3	坏	ＥＰ5-Ｆ	141	51	41	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転糸切り	
	31-4	2ε-4	坏	ＳＤ6-Ｆ	121		(29)	ロクロナデ	ロクロナデ		
	31-5	2ε-5	坏	ＳＸ19-Ｆ		49	(21)	ロクロナデ		右回転糸切り	
	31-6	2ε-6	鉢	Ａトレンチ		96	(34.5)				

※　(　　)内数値は、残存部及び推定計測値を示す。

Ⅳ　ま　と　め

浮橋遺跡発掘面積は、3,600㎡である。柱穴では、ＳＢ１～４の掘立柱建物跡が確認できた。井戸跡は、井桁のもの（ＳＥ11）、丸木舟を転用したもの（ＳＥ14）、縦板に横桟を組むもの（ＳＥ15）の３タイプがあるが、それぞれの新旧関係は確認できなかった。ＳＫ16とＥＢ660は、皿ないし小形の坏が一括状態で出土し、祭祀的な様相がうかがえる遺構である。溝跡は、略円形を呈するＳＤ100と調査区中央及び南西を北西方向にはしる溝跡群及び東西方向に延びるＳＤ92がある。ＳＤ100は、内側に六角形の柱並びが想定でき、特殊な構造の建物跡が推定できる。方向性や重複状況から、ＳＤ92→北西方向溝跡群→ＳＤ100の順序が考えられる。さらに、北西方向溝跡群→ＳＢ１・ＳＥ14が考えられる。ＳＢ２～４は、溝跡群と向きが近く時期的な共通性も検討できるが、柱穴の規模や深さ等から、ＳＢ１よりも後出の可能性がある。ＳＥ11･13及びＳＫ181は、覆土内に火山灰と考えられる灰白色の堆積層がみとめられる。

次に今回の調査で注目されるものに、地震によるものと考えられる横滑りの土層がある。それは、ＳＤ100からＳＢ１の範囲に広がり、厳密な角度ではないが、ほぼ北西ないし西向きへずれと一部東向きの状況が観察できた。上記の祭祀遺構や火山灰及びこれと類似する様相が、本遺跡西側に位置する「下長橋遺跡」の第２次調査でも確認され、時期的関係等今後の比較検討が望まれる。

時期は、土器の内容から平安時代（９Ｃ末～11Ｃ後半）が考えられ、平底の土師器坏や須恵器坏Ａ２類及び赤焼土器坏２・３類の特徴から、10Ｃ前半頃が主体と思われる。

下長橋遺跡発掘面積は、トレンチ調査の420㎡である。遺構は、Ａトレンチから主に検出され、第２次調査区の方に分布する傾向を示す。建物跡等は、未検出であるが、今回の調査区は、遺跡の南側の範囲に位置する。遺物が比較的多かったのは、ＳＤ６である。前述の調査区への延長は、確認できなかった。

時期は、ＳＤ６出土土器等から平安時代（10Ｃ頃）が考えられる。

参考文献

奈良国立文化財研究所（1984年）『木器集成図録　近畿古代篇』　奈良国立文化財研究所史料第27冊

山形県教育委員会　（1985年）『手蔵田遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査報告書第87集

〃　（1987年）『南興野遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査報告書第114集

〃　（　〃　）『桜林興野遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査報告書第115集

〃　(1988年)『分布調査報告書（15)』　山形県埋蔵文化財調査報告書第119集
〃　(　〃　)『手蔵田10・11遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財調査報告書第124集
〃　(　〃　)『浮橋遺跡調査説明資料』
〃　(　〃　)『下長橋遺跡第２次調査説明資料』
〃　(　〃　)『下長橋遺跡第３次調査説明資料』
〃　(　〃　)『下長橋遺跡第４次調査説明資料』

図　　版

遺跡遠景（南西から）

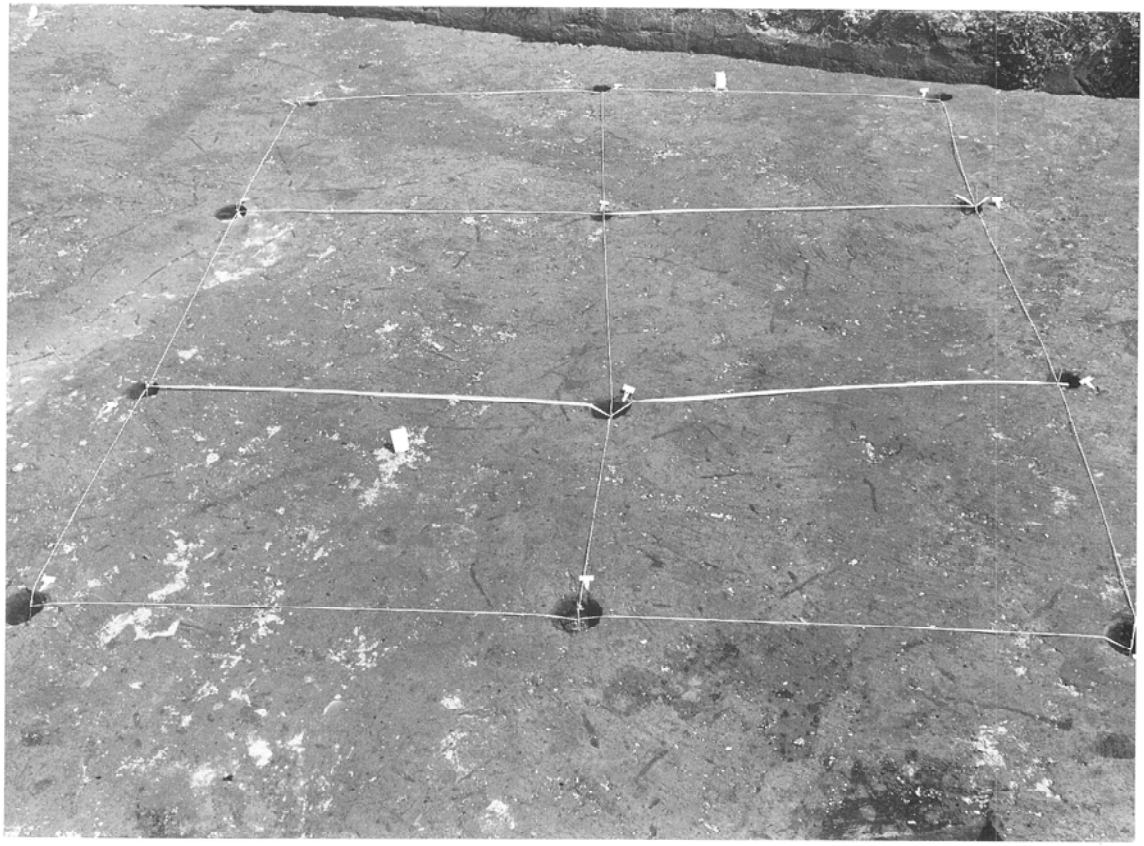
作業風景（南から）

図版 2

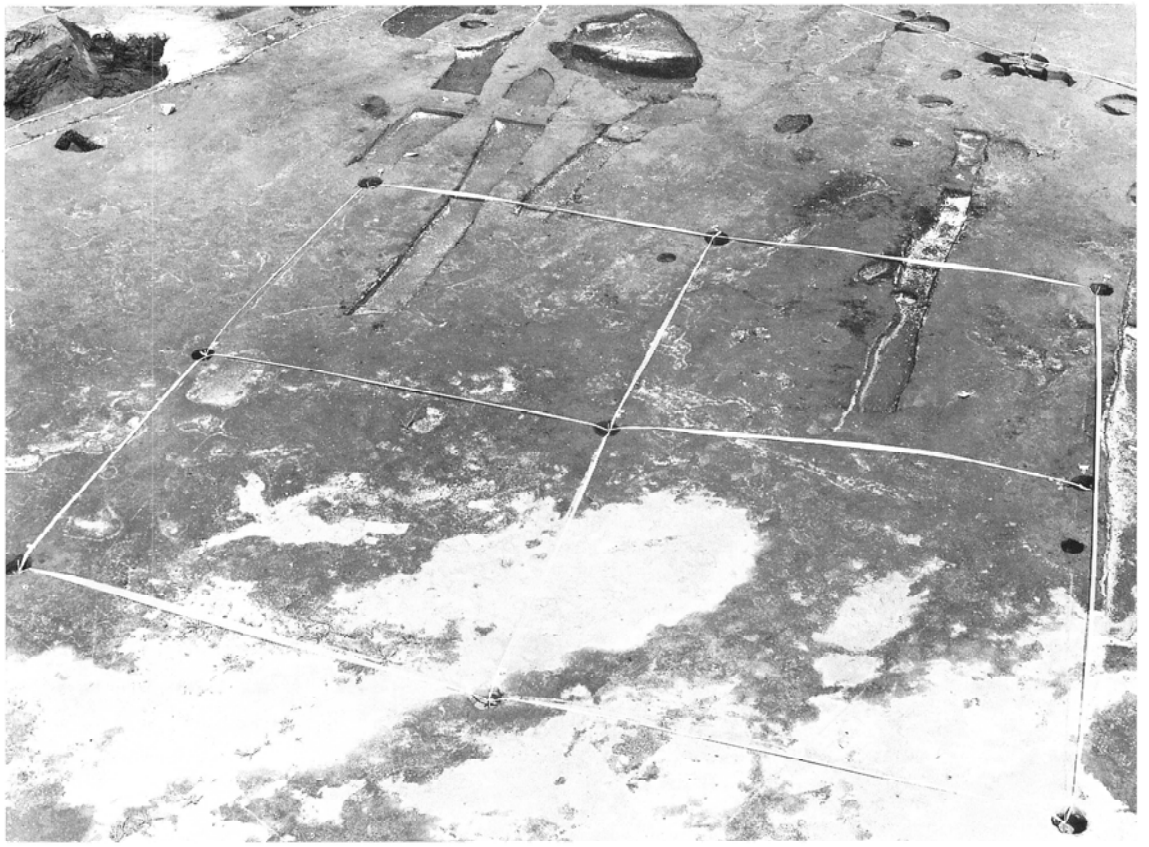
遺跡近景（南西から）

調査風景（東から）

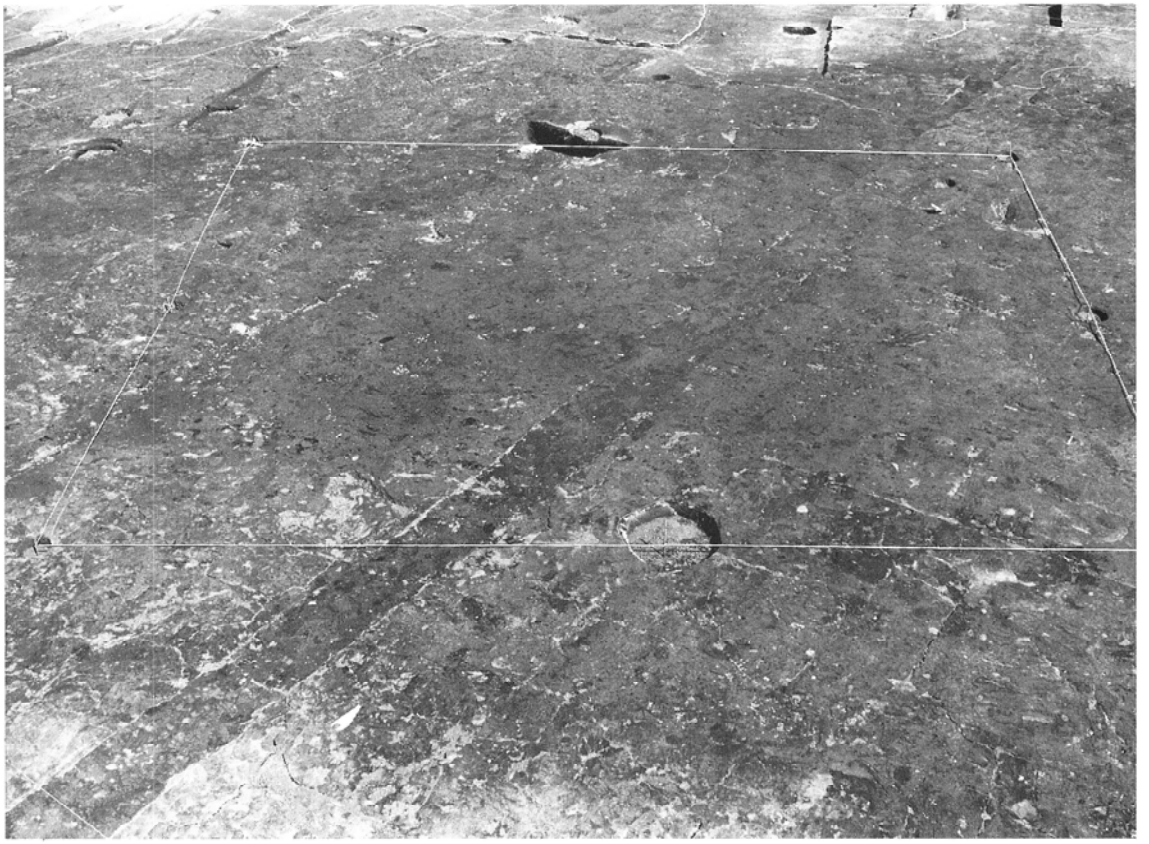
ＳＢ１（南から）



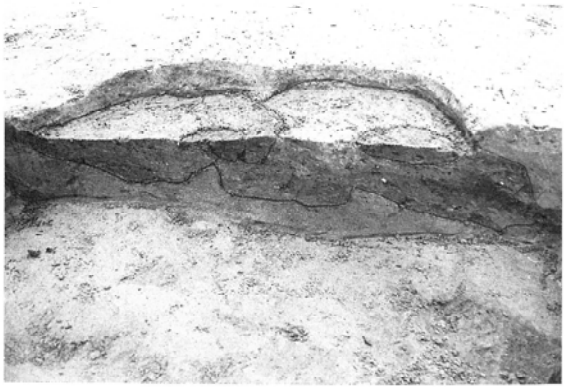
ＳＢ２（南から）



ＳＢ３（南から）



ＳＢ４（南から）



ＥＢ203

ＥＢ203

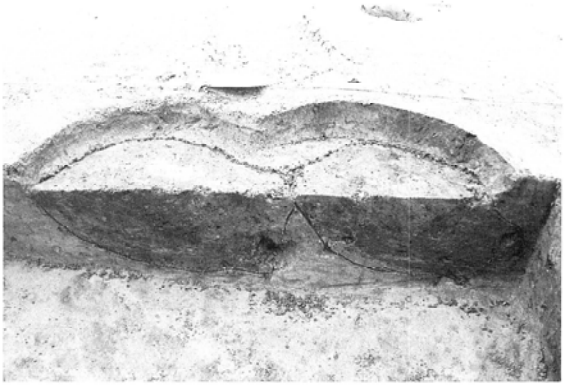
ＥＢ204

ＥＢ205

ＥＢ206

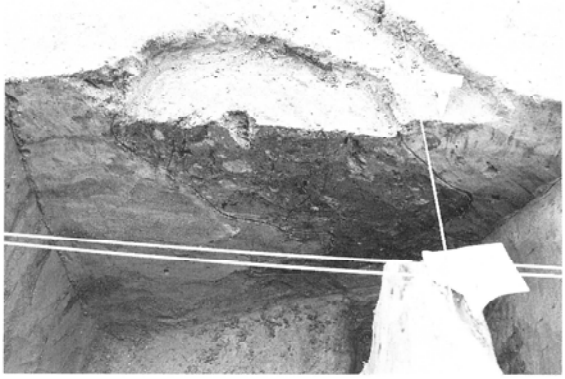
ＥＢ208

ＥＢ210

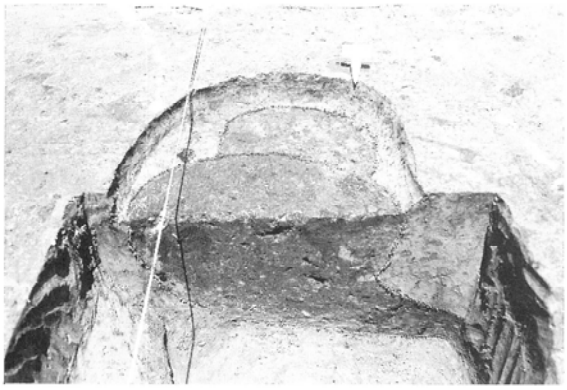


ＥＢ466(左)・ＥＢ211(右)

E B 213 (R P 98)



E B 215



E B 340

E B 504

E B 611

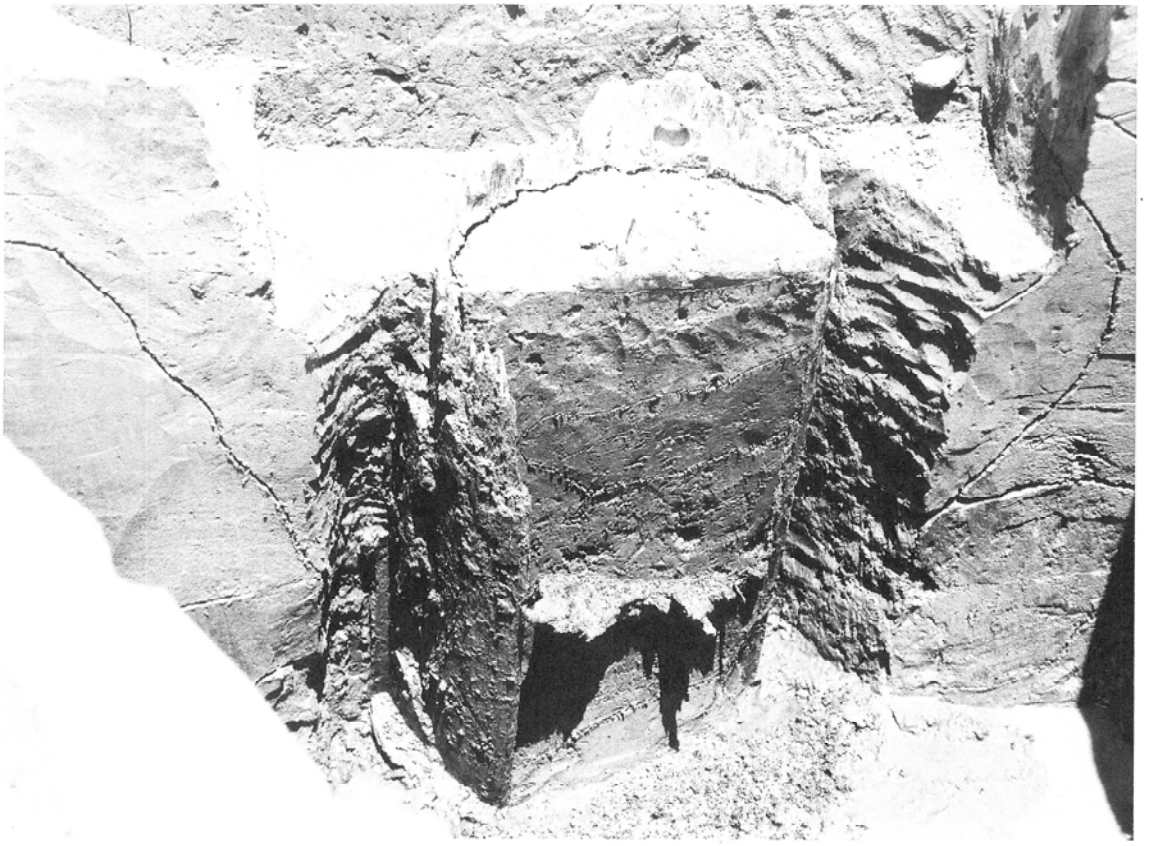
E B 450

E B 499

E B 583

ＳＥ11井戸検出状況

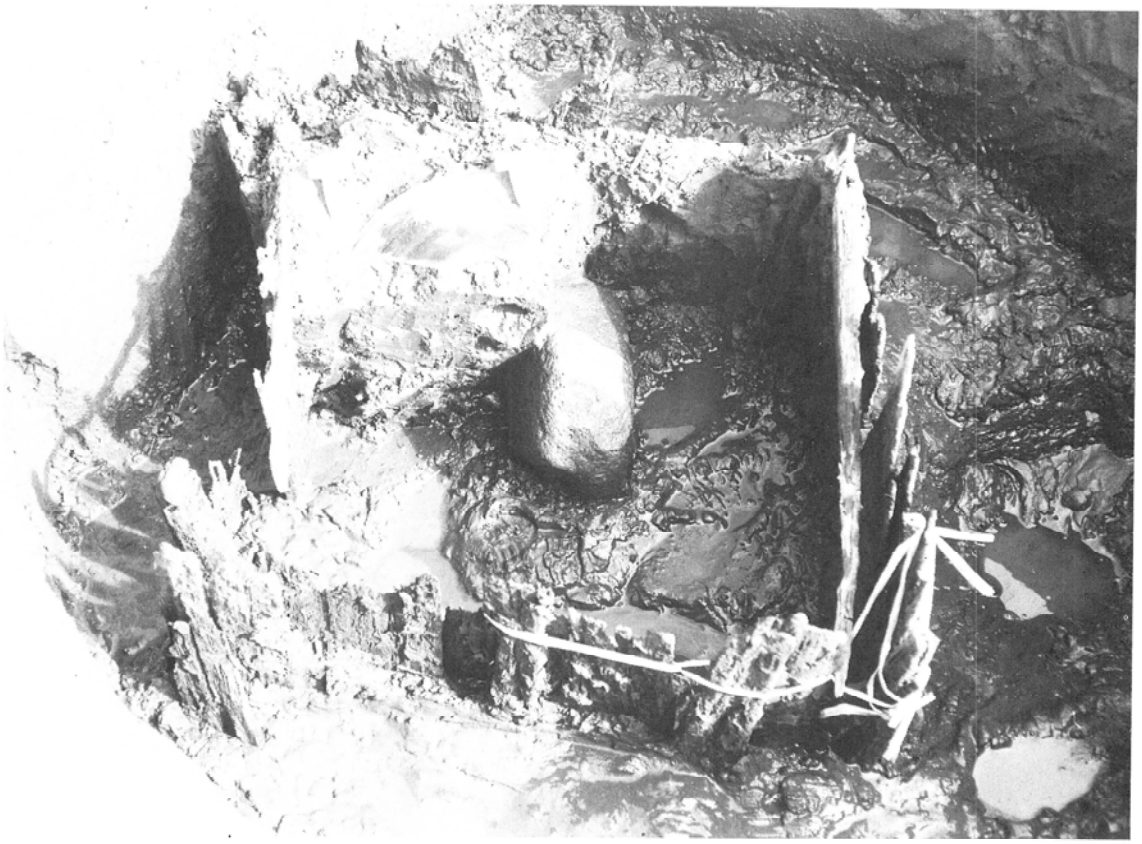
ＳＥ11（遺物出土状況）



ＳＥ14（南西から）

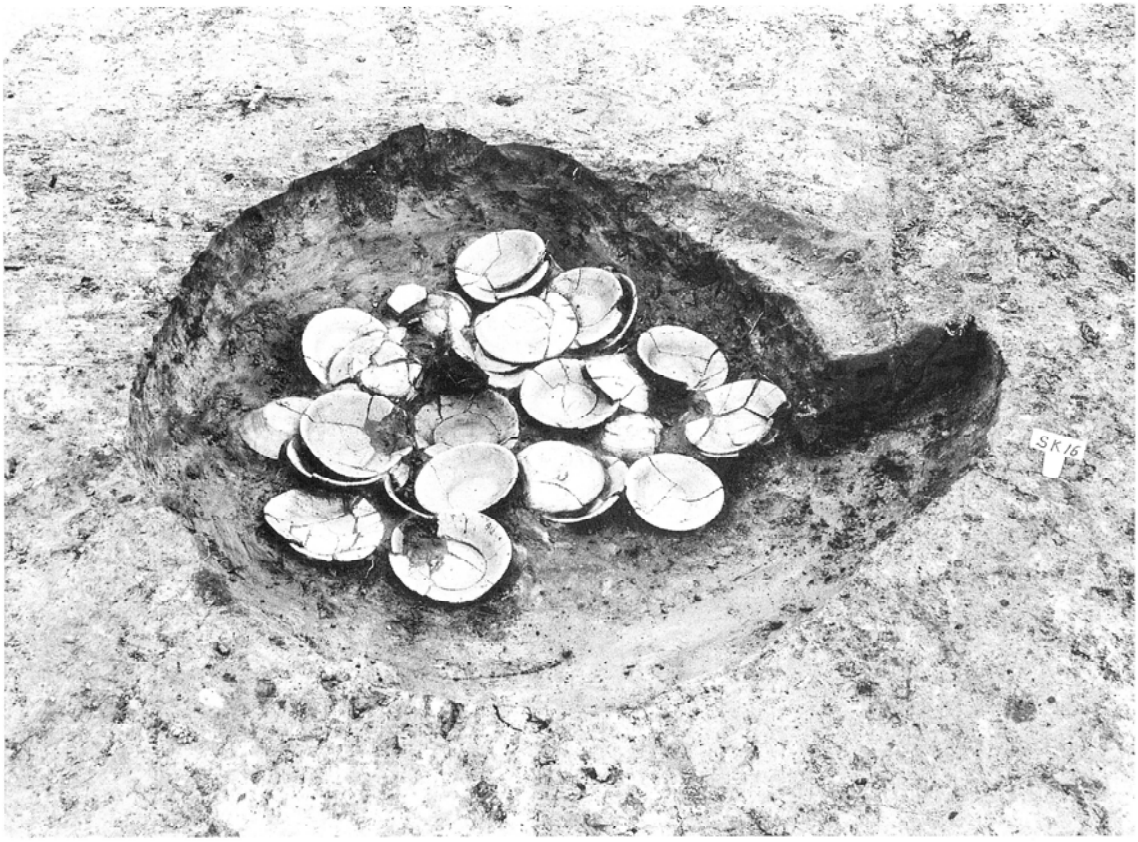
ＳＥ14（南東から）

ＳＥ15井戸跡検出状況（北から）

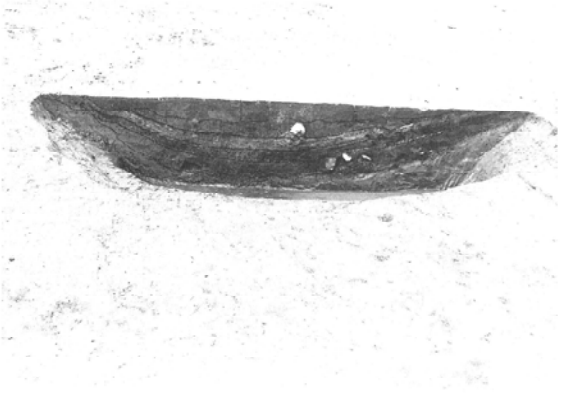


ＳＥ15井戸検出状況（北から）

ＳＥ12（南から）

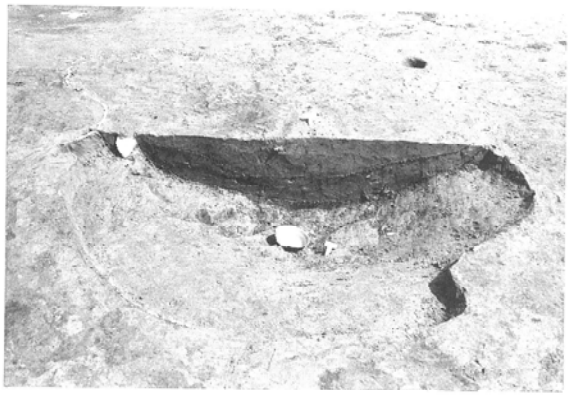


ＳＫ16土壙（遺物出土状況）

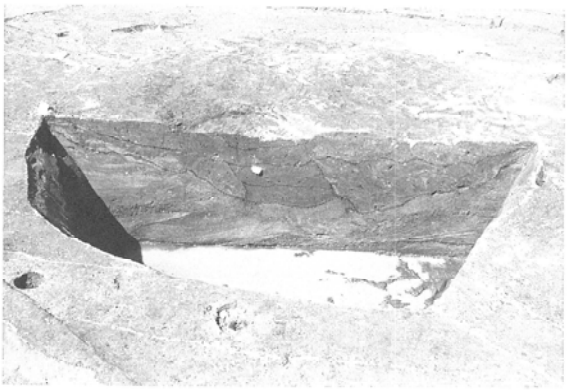


ＳＫ17（南から）

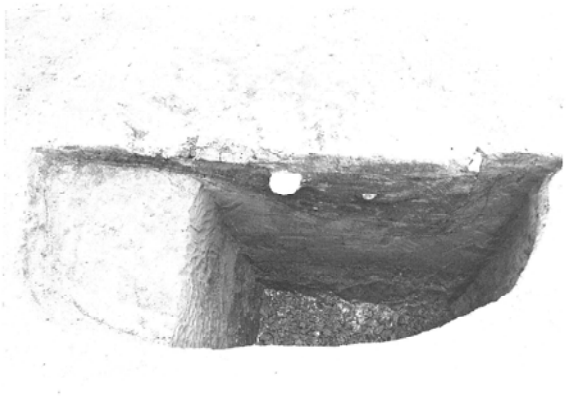
ＳＫ19（南から）



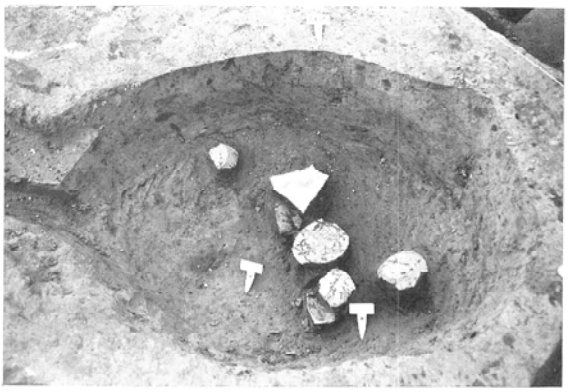
ＳＫ152（ＲＰ）



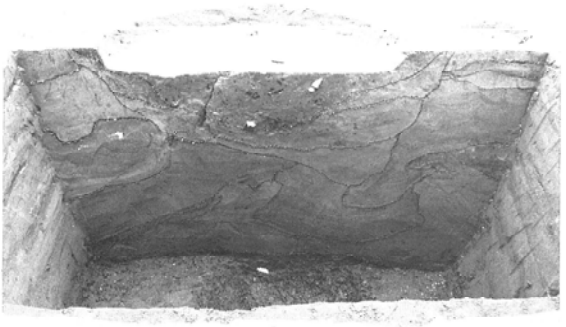
ＳＫ153（南から）



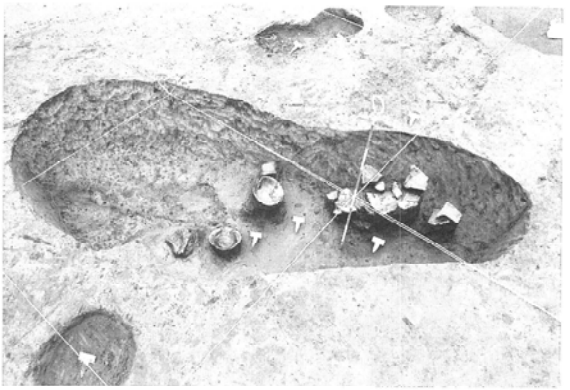
ＳＫ155（南から）



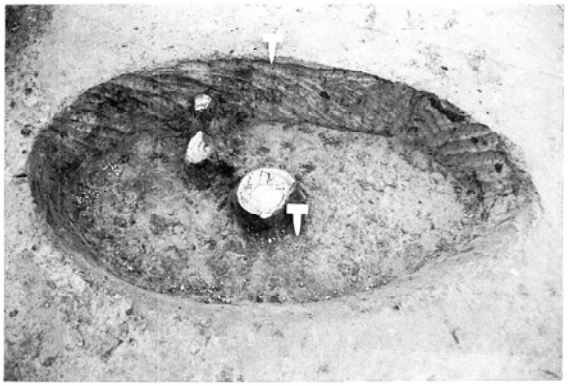
ＳＫ158



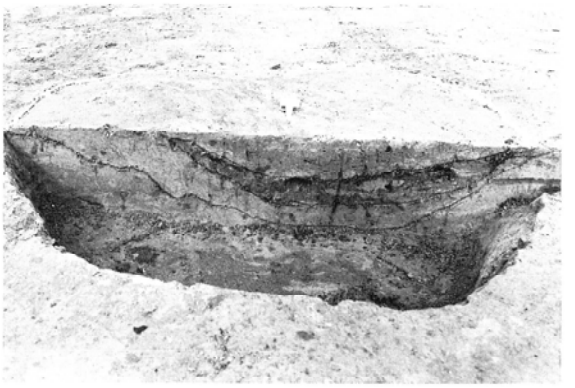
ＳＫ159（南から）



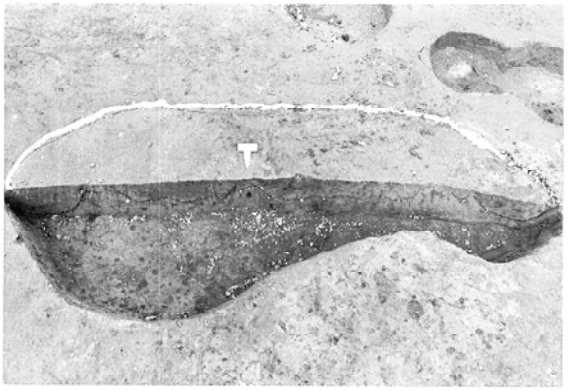
ＳＫ170・173
（右）・（左）



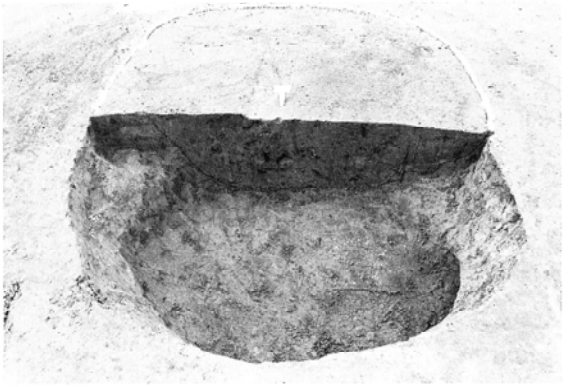
ＳＫ172（南から）



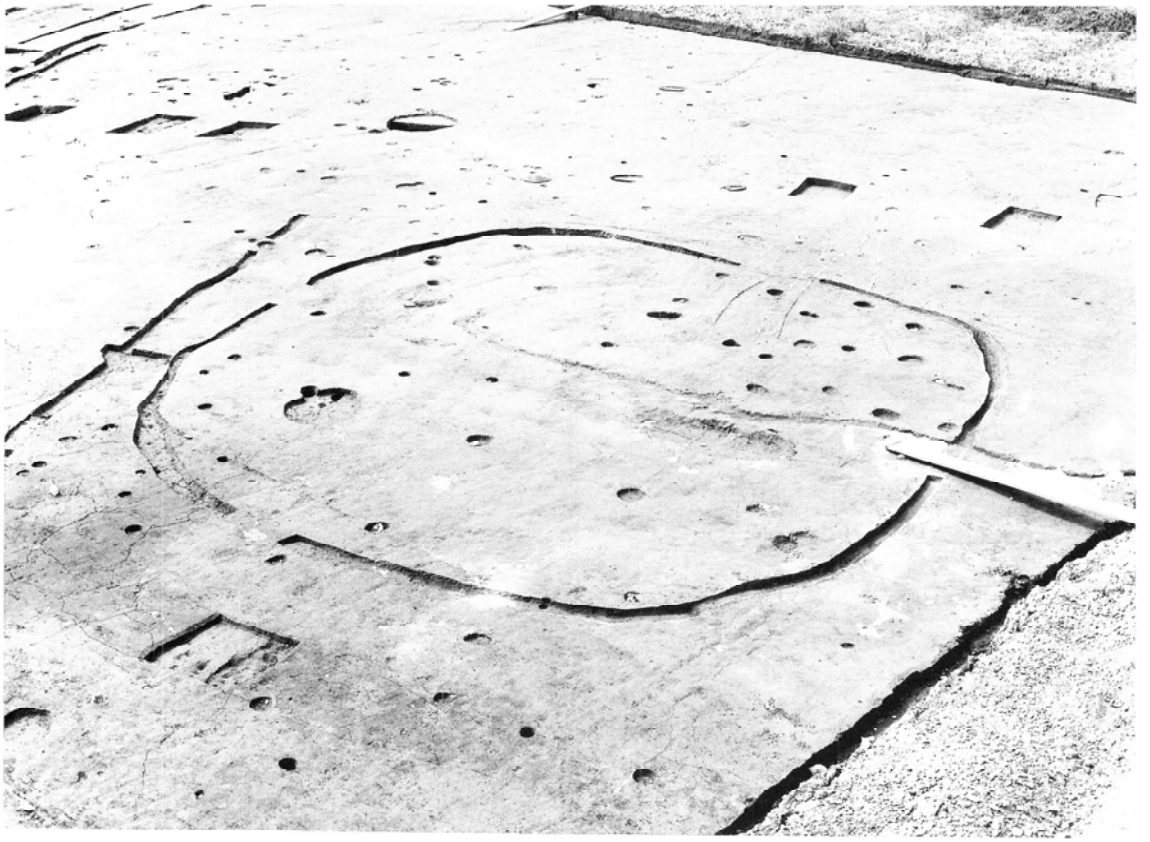
ＳＫ174（西から）



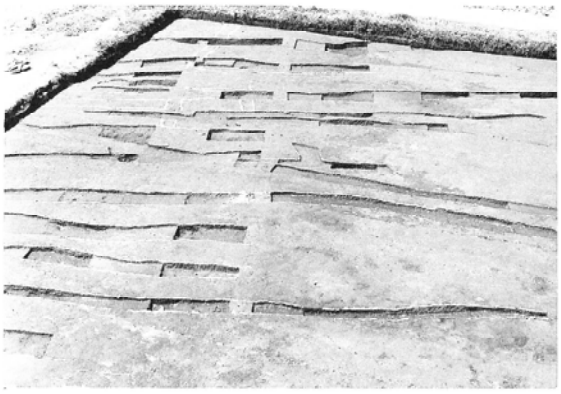
ＳＫ175（西から）



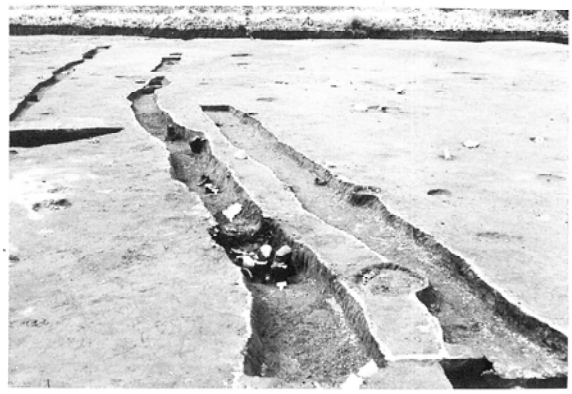
ＳＫ176（南から）



ＳＤ100（南東から）

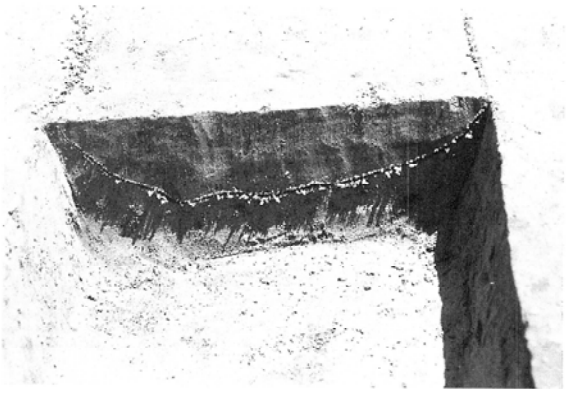


ＳＤ20（東から）



ＳＤ101・102溝跡（南から）

溝跡検出状況

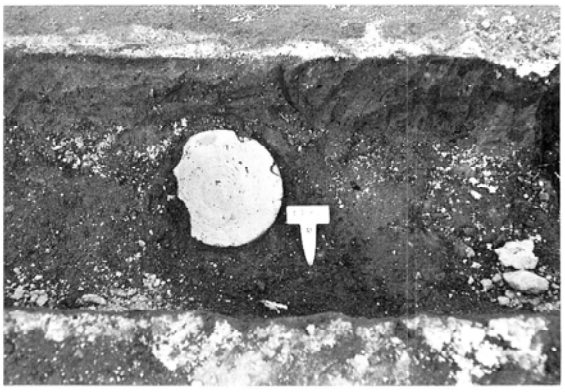


ＳＤ100

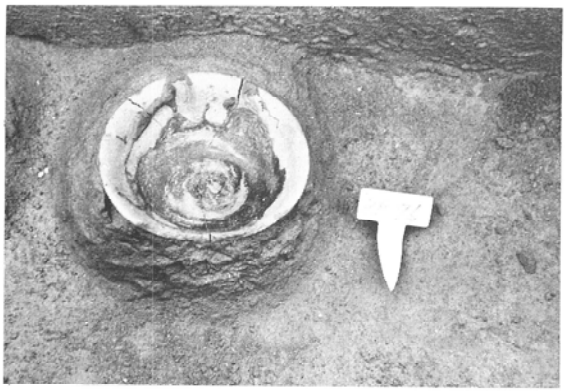
ＳＤ43

ＳＥ11（南から）

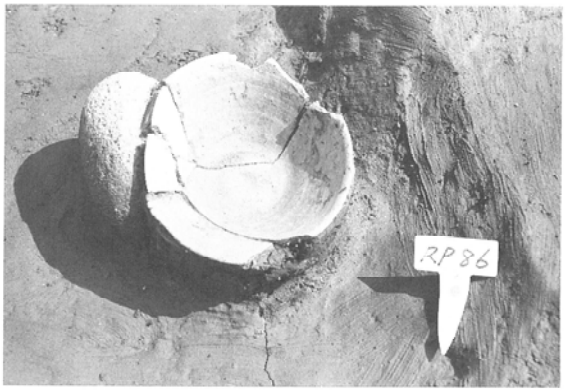
ＲＰ52他（ＳＤ101）



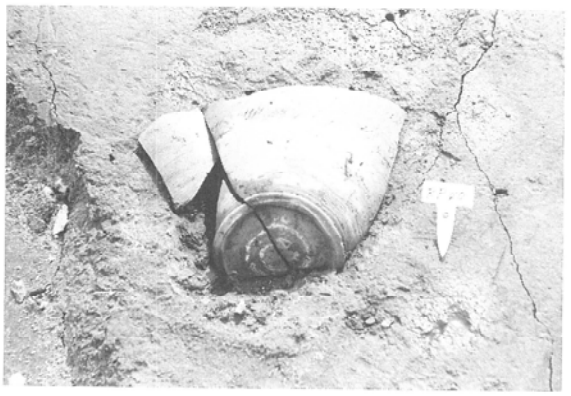
ＲＰ53（ＳＤ101）



R P 76（S K 170）

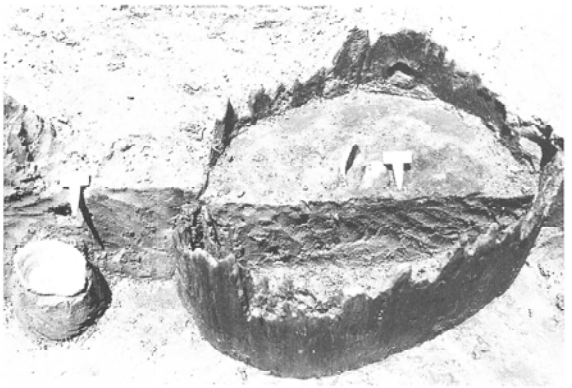


R P 86

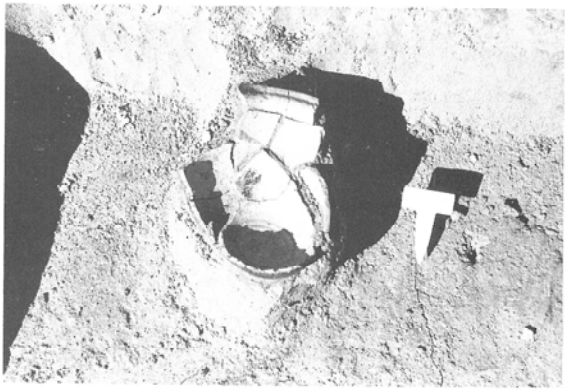


R P 40

R P 41（S K 153）

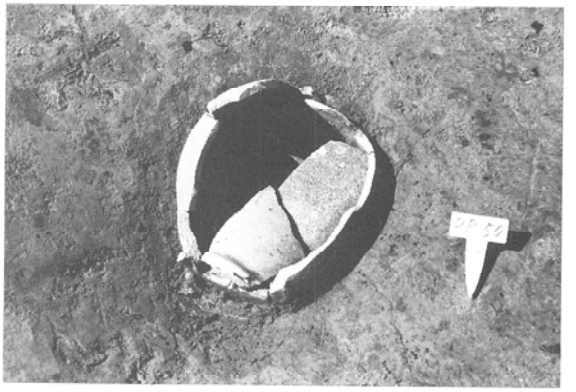


R P 42（左）・R P 43（右）

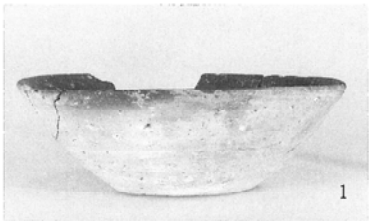


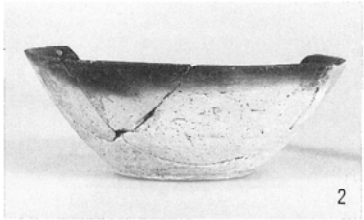
R P 45

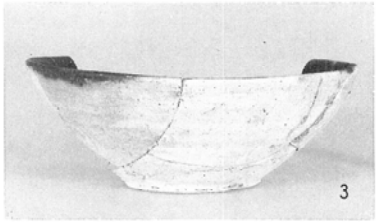
R P 47



R P 50

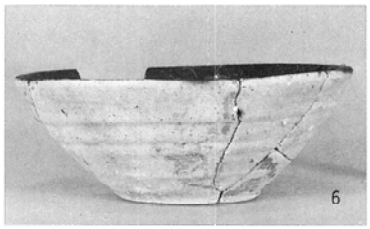

1

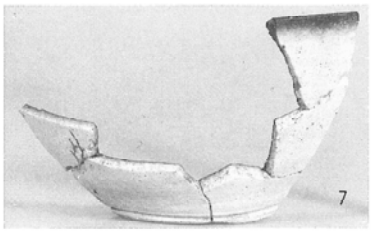

2

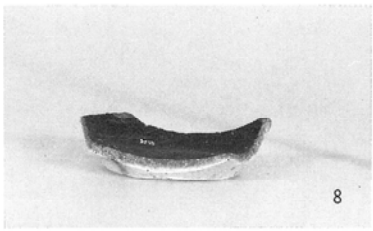

3

4

5


6

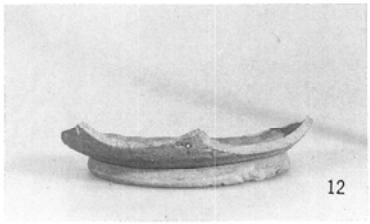

7

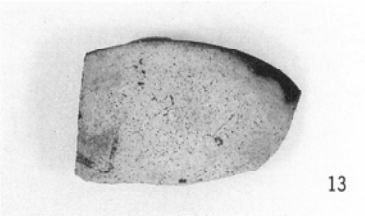

8

9

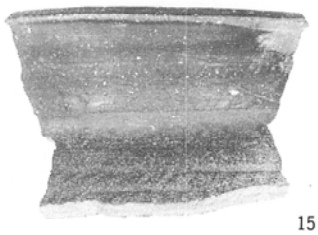
10

11

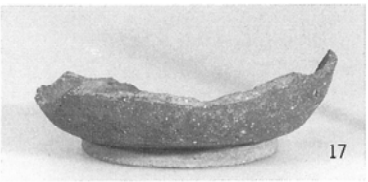

12


13

14


15

16

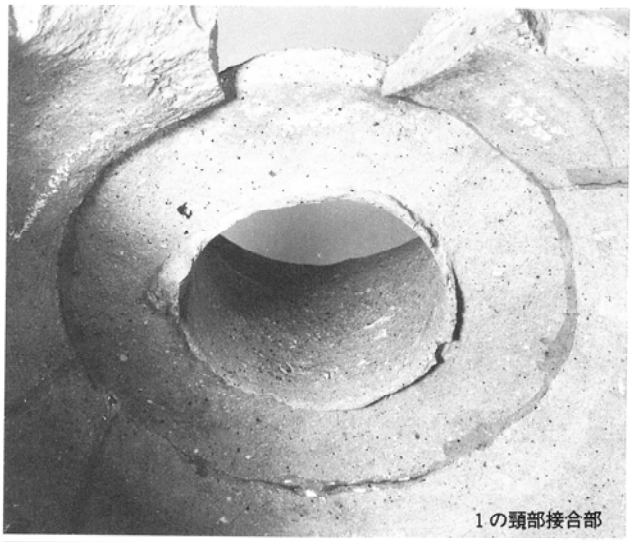

17

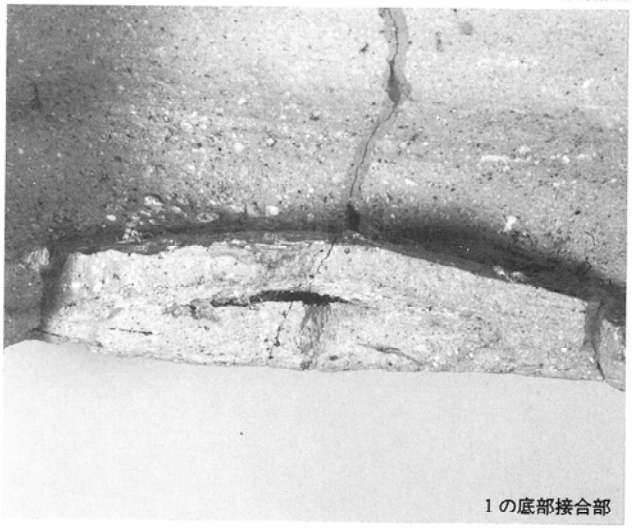
18

19

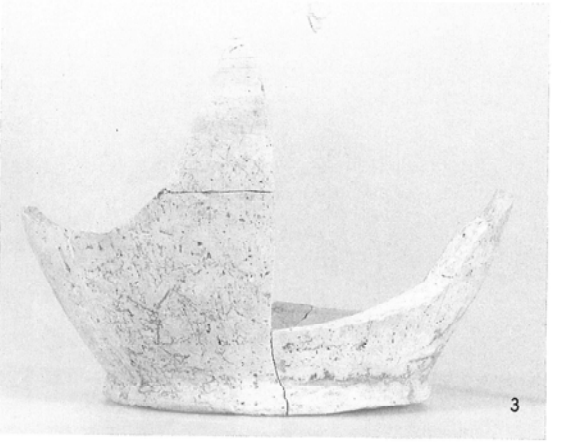
出土土器

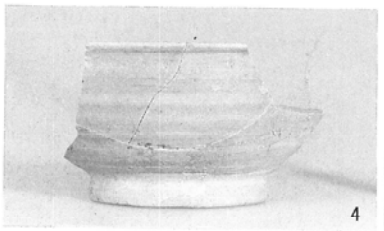
1

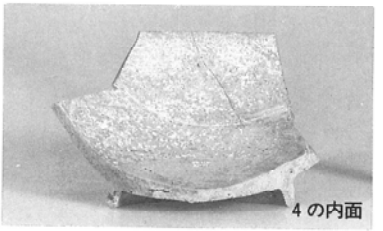

1の頸部接合部


1の底部接合部

2

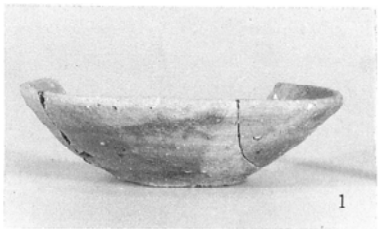

3


4


4の内面

5

出土土器


1

2

3

4

5

6

7

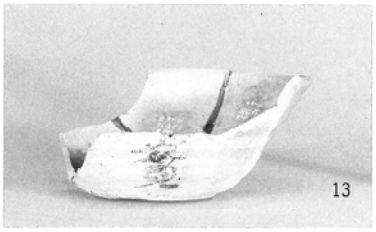
8

9

10

11

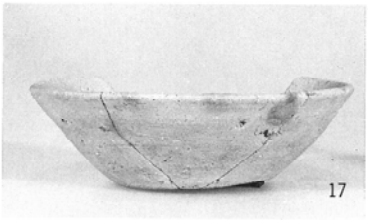
12


13

14

15

16

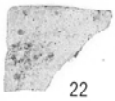

17

18

19

20

21


22

23

24

25

26

27

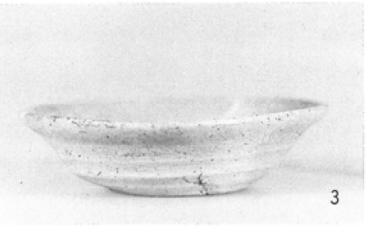
28

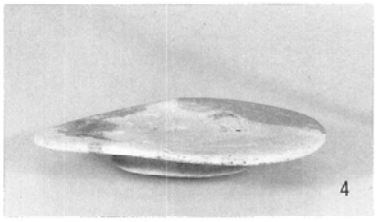
29

出土土器

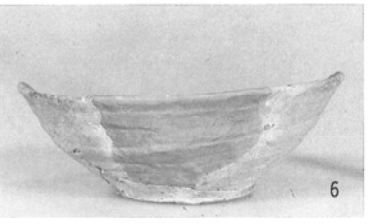
1

2

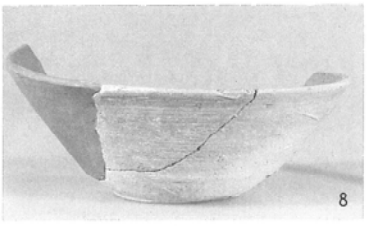

3


4

5


6

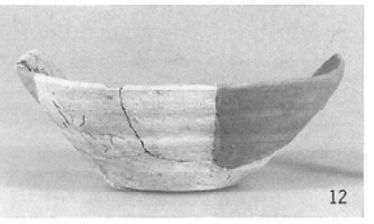
7

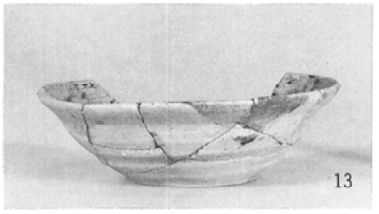

8

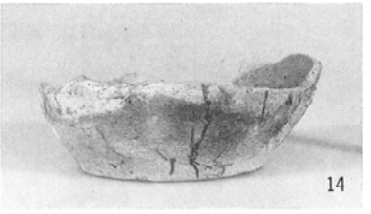
9

10

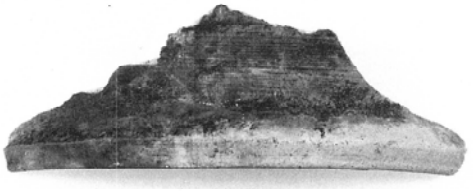
11


12

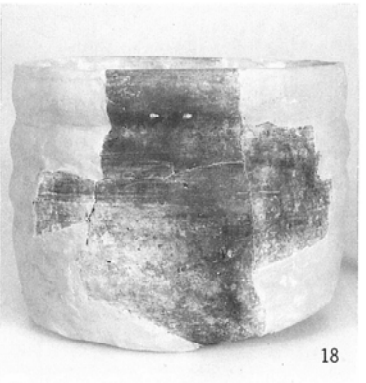

13


14

15

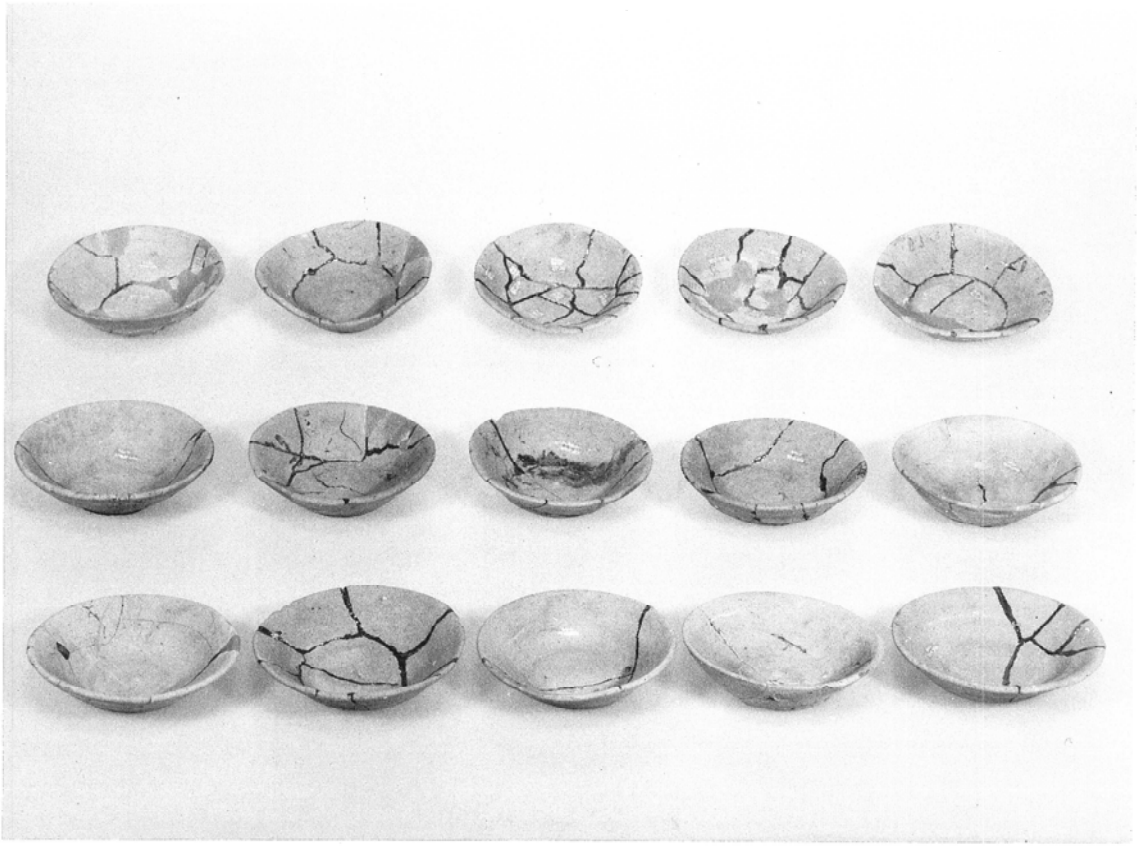

16

17

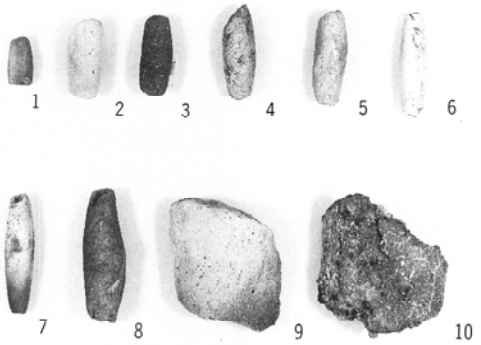

18

19

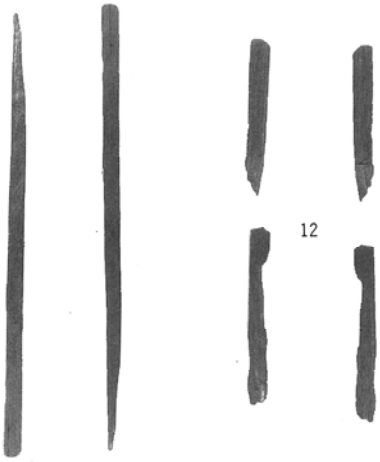
出土土器



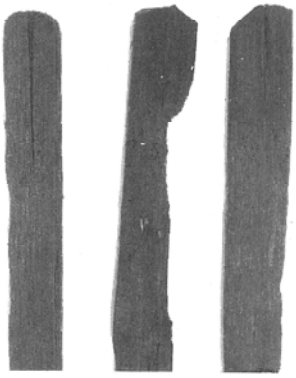
出土土器

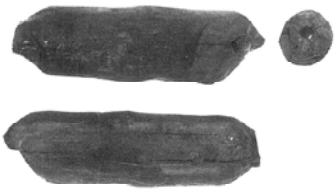


S = 1/3

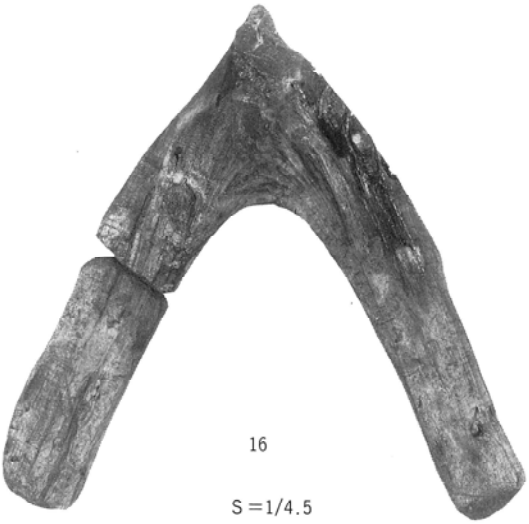


14





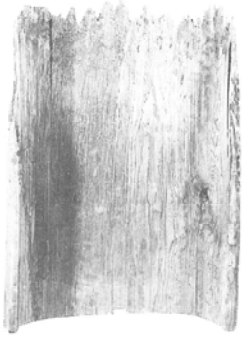
15

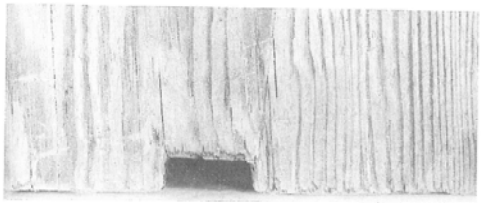


16

S = 1/4.5

ＳＥ11
井桁板材



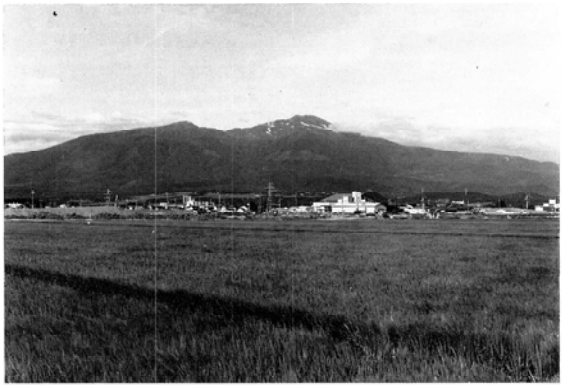


ＳＥ14
井側材

木抜栓拡大

S＝1/25

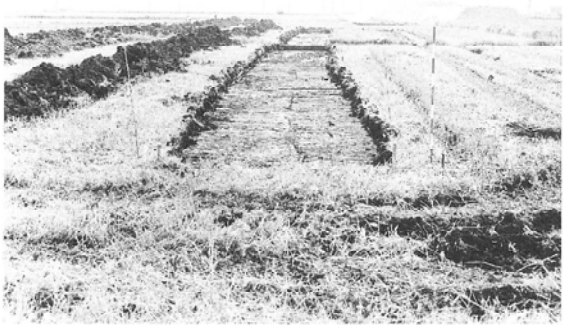
ＳＥ11・14井戸枠



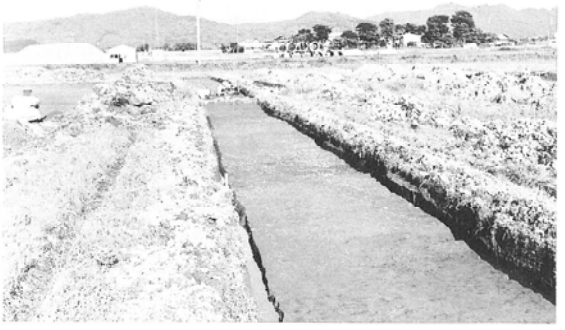
遺跡遠景

Ａトレンチ調査前状況（西から）

Ａトレンチ調査前状況（東から）



Ａトレンチ調査状況（東から）

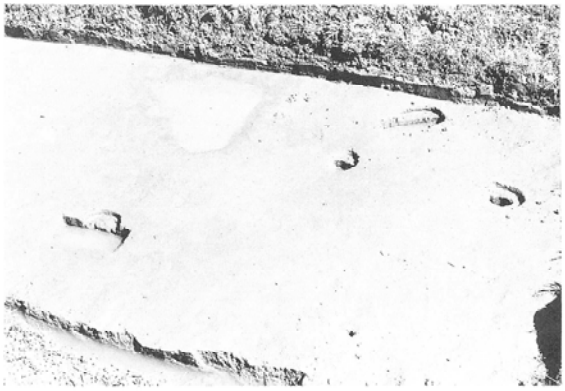


Ａトレンチ調査状況（西から）

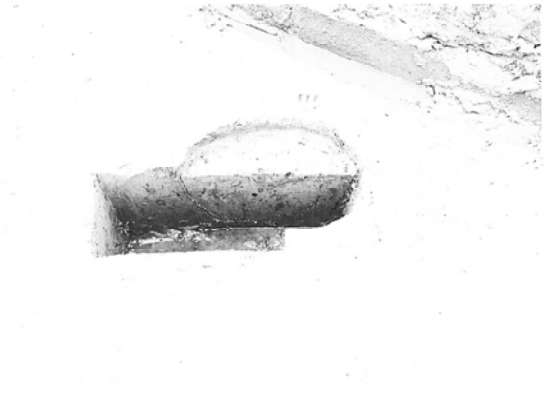
Ａトレンチ全景（東から）

ＥＢ５・16・17

Ａトレンチ土層断面

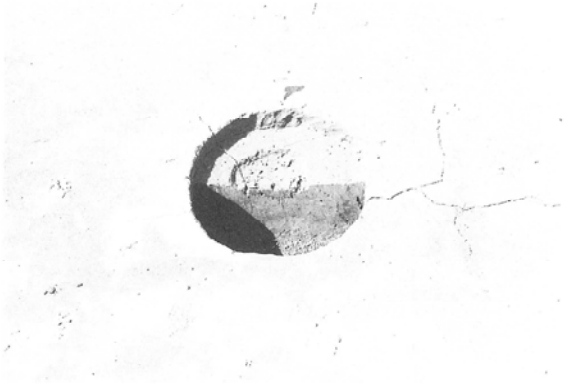


ＥＢ10・11・12・21

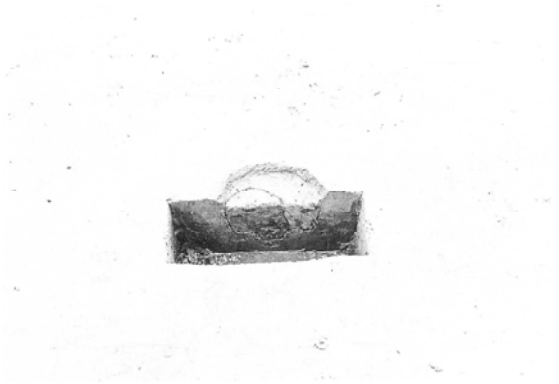


ＥＢ10

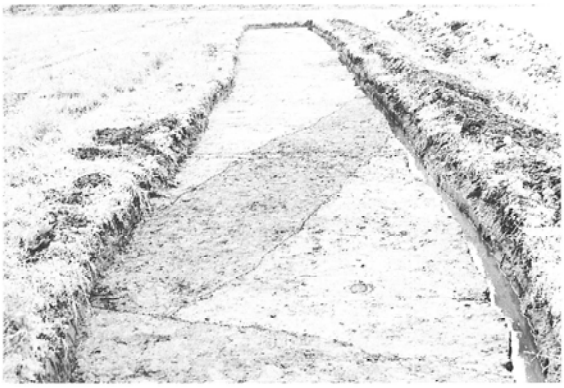
ＥＢ16



ＥＢ17



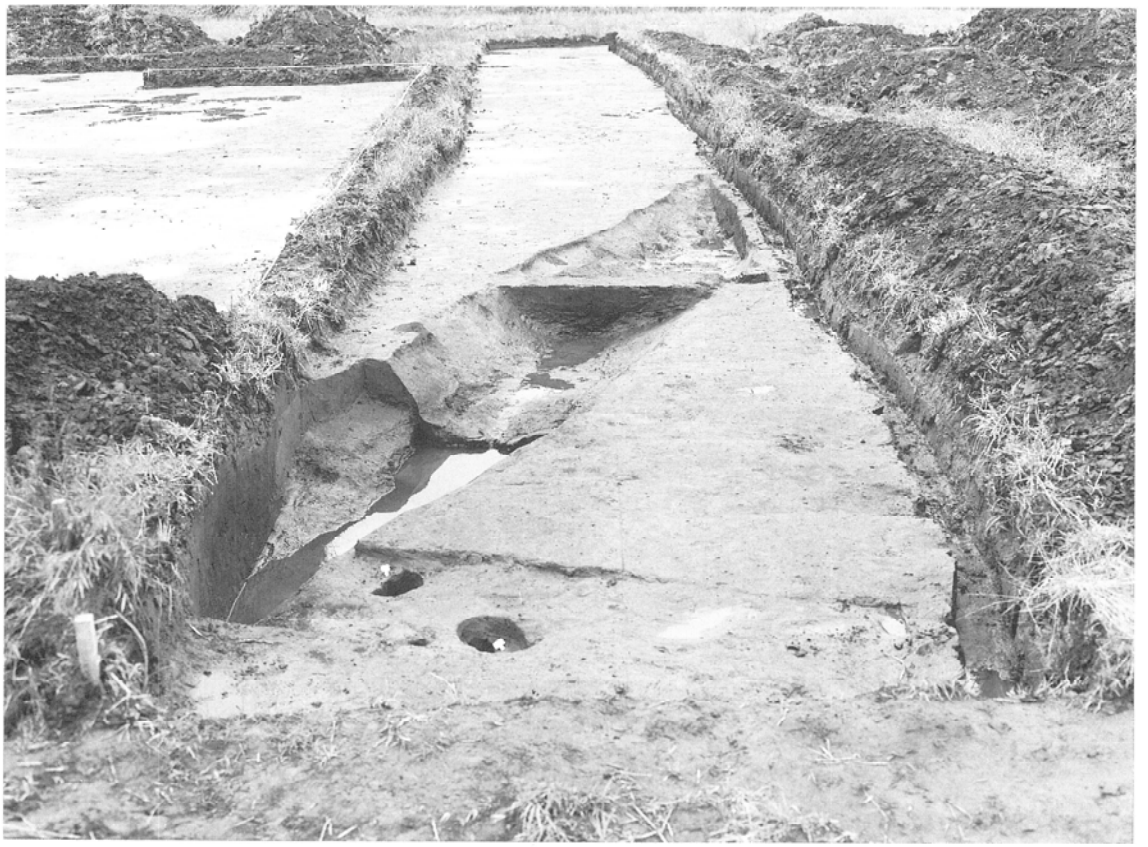
ＥＢ21



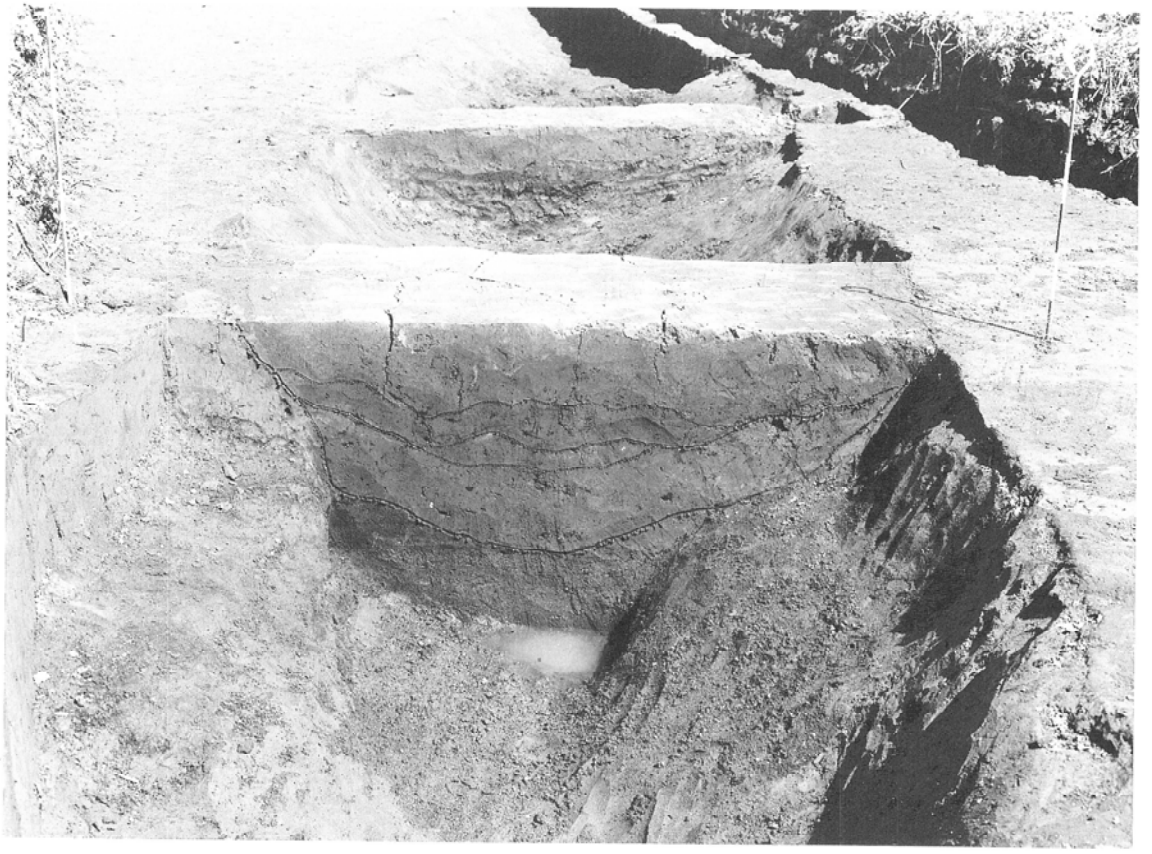
ＳＤ６・７検出状況

ＳＤ６（東から）

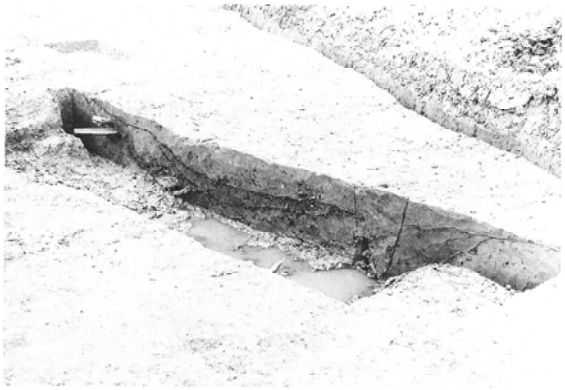
ＳＤ７



ＳＤ６・７（西から）



ＳＤ６土層断面

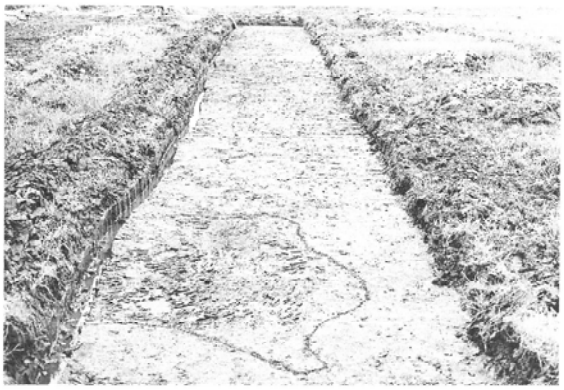


ＳＤ13土層断面（南東から）

ＳＤ13土層断面（南西から）

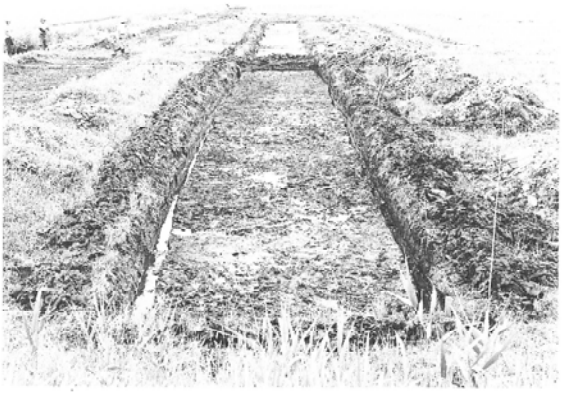
Ｃトレンチ調査前状況（北から）

Ｃトレンチ調査前状況（西から）



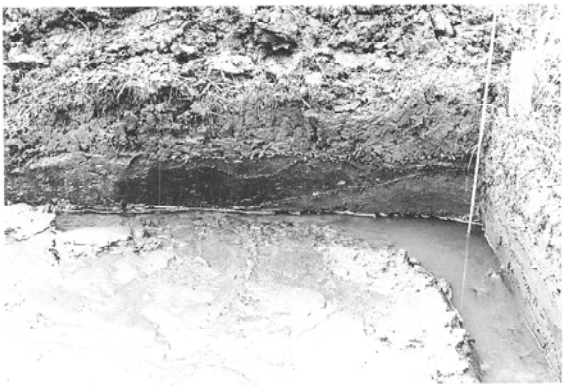
Ｃトレンチ調査状況（東から）

Ｃトレンチ調査状況（西から）



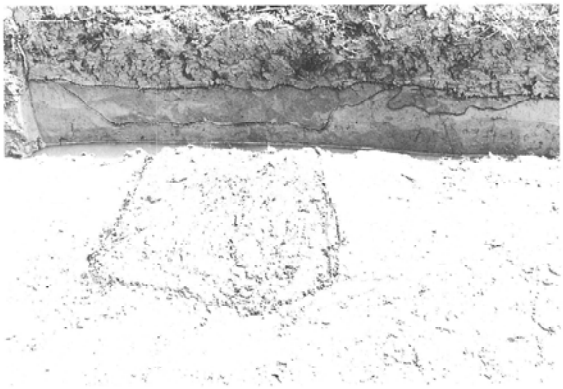
Ｃトレンチ全景（東から）

Ｃトレンチ全景（西から）

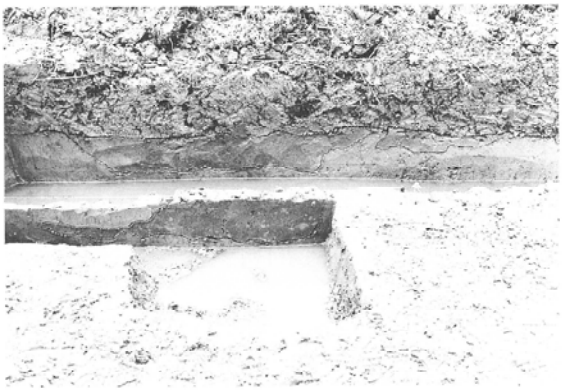


Ｃトレンチ土層断面

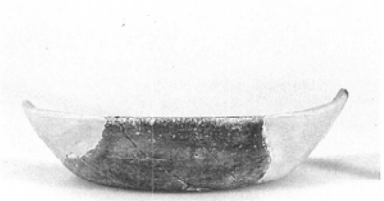
ＳＫ１（西から）



ＳＫ１検出状況



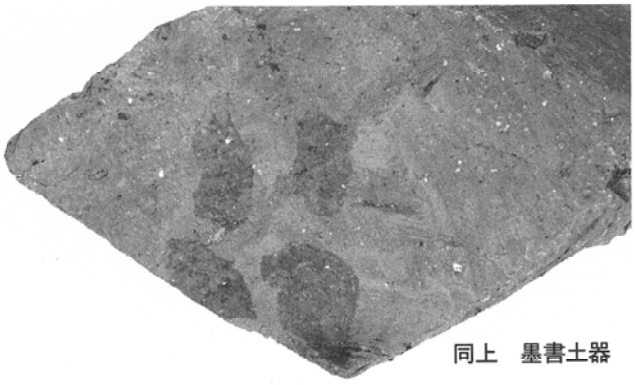
ＳＫ１



1

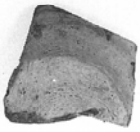
2

3



同上　墨書土器

4



5

6

山形県埋蔵文化財調査報告書第141集

浮橋遺跡
下長橋遺跡
発掘調査報告書

平成元年３月25日　印刷
平成元年３月31日　発行

発行　山形県教育委員会
印刷　大場印刷株式会社